

あえる やれる アイドル『TRK26』全裸生活

添牙いろは

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ストリップ劇場の企画の罰ゲームとして、1ヶ月間全裸生活することとなりました。そんな全裸の女のこに遭遇した男子の物語です。

目次

桑空操	2
沖道春奈	11
渋長優	21
檜しとれ	32
姫方紫希	41
宮條桃	51
水裏理々	61
崎乃平花子	70
天菊まこ	79
檜しとれ2	89
乙比野杏佳	98
崎乃平花子2	108

島門佑衣	118
園内晴恵	126
萩名里美	140
天菊まこ2	149
檜しとれ3	159
渋長優2	171
村月李冴	180
天菊まこ3	189
乙比野杏佳2	200
島門佑衣2	209
萩名里美2	218
崎乃平花子3	225

桑空操

操みさおさんのこともあるので、大学名は一応伏せておく。あの人のことだから、どこかでポロつと喋つちやうかもしれないけれど。一応、健康福祉学部、とだけ。

僕がこの学部を選んだのは……一応、人口のおよそ半分を占める高齢者のことをしつかりと見据えていなくてはならない……みたいに言っただけ。対外的には。でも、本当のところは……僕がどうしようもなく弱いから。今後歳を取ってさらに弱くなったら、僕はどうなってしまうだろう——そんな不安に押されて、進路を決めたところはあつた。

それにひきかえ——操さんはどこまでも強い。色んな意味で、強い。誰に対しても。そんな彼女が何故福祉の大学に？ と疑問に思っていたけれど……これ以上話すと大学を特定されかねないので、一先ず伏せておく。もし公開情報となつたら、操さんの口から語られるかもしれない。……いや、語らないだろうな。だから、僕から言うことではないのだと思う。

そんな、福祉の学校には似つかわしくない——もつと言えば、こんな僕にこそ似つかわしくない操さん——まるで抜き身の刃のよう——はつきりいつて、分不相応な一目

惚れだった。一方で、彼女から見て僕のようなウジウジした男は普通に嫌いらしく、このままだと嫌われちゃうなあ、と思つて……それで、どうせ嫌われるのなら、最後に殴られてもした方がある種の思い出になるんじゃないか……と半ばやけっぱちで。

校舎裏に手紙で呼び出したとき——操さんは本気で果たし状の類だと思つていたらしく、僕はチンピラの使いっぱしりとあしらわれそうになつてしまった。お前らの頭を出せ、と。けど、それでいい感じに僕から毒が抜けてくれたのだと思う。操さんは、やっぱり僕が見込んだ、女性^とだった、と。それで、僕は懇切丁寧に説明できた。僕が、操さんのことが好きなのだ。

その後のことは絶対他言するな、と操さんからも厳命されているので、僕から言えるのはここまで。だから、大切な思い出として僕だけのものにさせておいてほしい。きつと、あんな操さんを見たのは僕だけだろうから。

操さんは男嫌いで有名だけれど……それは正確じゃない。あの人は、気に入らない男に容赦がないだけで。空手有段者だから素人に直接の暴力は振るわないけれど……寸止めくらいなら平気でやるからなあ。その度に、僕はヒヤヒヤさせられる。

一方——知らない人には絶対に想像もできない秘密——本人は秘密のつもりらしいけど、結構知つてる人も多くて——けど、恐れ多くて誰も指摘できないこと——彼女のもうひとつの顔——それは『AV女優』だ。

しかも、いわゆるアイドル系というか、とてもキャピキャピした感じの。ツイントールのウィッグを着けて、カラフルな縁のメガネも掛けて。普段の操さんがその話をすることはない。隠している、という雰囲気も感じる。だから、僕から聞くこともない。本人が秘密にしようとしている限り、僕も——けど、やっぱり気にはなるので、動画は全部持っている。それもまた、操さんには秘密だ。

けれど、もし操さんのAV活動が僕とつき合い始める前から……ちよつとシヨックだったと思う。もしかしたらそつちが本当の顔で、凛々しい操さんは作り物……なんて疑ってしまったかもしれないから。

けど——きつと、僕とつき合い始めたことで……異性方面に関する見識が広がったのかもかもしれない。それにまつわる欲求不満なところもあるのだろう。僕なんか、女のひとり満足させられる男ではないことは重々承知している。だから……なんて献身的なことを言うつもりはない。僕より相応しい男の人とやりたいことをヤッている操さんは……やっぱり可愛くて……そんな操さんが僕の彼女だと思おうと、誇らしい気持ちになるのだった。みんなが、僕の恋人を可愛いつて認めてくれる。それは、まるで自分のことのように。

そんな操さんと、授業があつた頃は毎日一緒だったけど……休みに入ると忙しくなるんだらうね。きつと、AVの仕事の方が。これまでは週に一度はデートをして……

けれど、三月に入った頃からそれもなくなつて。ただ、僕が嫌われただけならいいのだけれど、操さんに何かあつたんじやないか、つて心配になつてしまふ。

でも、今日——僕は操さんの自宅に呼ばれた。操さんは、基本的に人を家に呼びたがらない。それは多分、『もうひとつの顔』に関するアイテムを多数秘蔵してるからだと思ふけれど——だからこそ、僕が招かれたのは意外だつた。

場所は、引越しを手伝つたから知つてゐる。知り合いがオーナーやつて、安く住ませてくれるから……と操さんは言つてゐた。けれど、本来そういう理由で引越すよな人ではない。オーナーである知り合い——しかも、場所は新歌舞伎町——多分、AV業界の人だ。だからきつと、ここに住んでゐるのはAV女優ばかり——きつと、悪い男から狙われることもあるのだろう。そんな女のコたちを護りたい——操さんは、そういう人だ。

その建物の名前は、メゾン・ニュー……——いや、本当にニュー、で名前が止まつてゐる。おそらくは、新歌舞伎町だけに『ニュー歌舞伎町』みたいな名前だつたと思われ。けど、何を思つたか『歌舞伎町』の部分だけ看板を外して、ニューで登録してゐらしい。何がどう新しいのかわからないけれど……機会があつたら聞いてみたい。

彼女の部屋は二階なので、階段で上がる。呼び鈴を鳴らすと、操さんはすぐに出てきてくれた。

けど——

「お、おう……ワリイな、こんなカツコで」

え……お風呂上がり……？

インターホンにカメラは付いている。だから、やってきたのが僕だと知って無防備に——にしては、ちよつと様子がおかしい。実際、操さんはちよつと恥ずかしそうだ。それに改めて見てみれば——風呂上がりでさええない。髪も濡れていないし……けど、頬は紅潮して、ちよつと可愛い。

これも、僕の前だけで見せてくれる操さんなのだけ——カメラの前では楽しそうに脱いでいるのに対して、僕の前ではあまり裸になることはない。かといって、僕が嫌われてるとも思っていない。基本的に僕の前で裸になるときは、もちろん……セックスするときだけど、そんな操さんはとても嬉しそうだから。

実際、操さんは——早く入れ、とか、扉を閉じろ、とか、そういう類の理由で僕を急かすことはない。ただ——僕に見られていることだけを恥じらっている。

「ま、まったくよお……見慣れてるんだろ、こんなもん」

こんなもん、と操さんは言うけれど、何度見ても操さんは可愛い。男勝り、と呼ばれる彼女に余分な贅肉はない。腕も、足も、しっかりと引き締まっている。それは胸も同じこと。それでも——本当に最低限、女のコであることだけはちゃんと示してくれる立

派な乳首と、控えめな乳輪。下の毛は少なめながらも、大切なところを見張る槍のよう。そこは、隠れたふたつの丘にも守られていて、その隙間が女のコの筋をスツツと作っている。

どこを見ても、操さんは可愛い。けれど、その視線が——操さんは苦手なようだ。

「ほ、ほら、アホ面晒してないでとつと来いよ」

操さんはくるりと踵を返す。その仕草はキビキビしているけれど——裸の女のコとなると、どうしてもしなりとしてみまう。お尻もすつきりとして控えめで——まさに、男の娘のような——もちろん、男根は生えていないけれど。男らしい身体に女のコの可愛らしさをトッピングした——操さんは、そんな女のコだ。

操さんが奥の部屋に座ると、僕は台所でお茶の用意を。招かれてるのは僕だけ——シンク周りの収納を決めたのも僕だし。あまり使われていないらしく迷うこともなかった。その間、操さんはこつちに背中を向けている。後ろ髪は長くないが、ウィッグを付けるために必要最低限は伸ばしているようだ。そこから広がる肩は綺麗で、見ていて飽きない。だから、きつと僕からの視線には気づいて——あえて、何も言わないのだろう。操さんはそんな人だ。

ふたつのマグカップに緑茶を注ぎ、僕は操さんの待つ座卓の前に腰を下ろす。けれど、僕から何を言うことはない。きつと、操さんに話したいことがあるはずだから。そ

して、操さんはこういうときに徒に間を延ばさない。

「あー……えーと、オレ、四月の頭、授業休むから」

「どうして?」

「どうしてもだ」

操さんが言いたくないのなら、僕は聞かない。それはきつと——今月前半に会えなかつたこととの続きなのだろう。それは、AVの仕事の都合……もしかすると、劇場の方かもしれない。

操さんは、AV女優の傍ら、ストリップパーとしてステージに上がることもあるようだ。僕にはあまり区別はついていないけれど、操さんにとつてはどちらも大切なはずだ。何しろ……本棚の上には仕事用の眼鏡が置きっぱなしにしてある。こういうところ、やつぱり雑だなあ。でも、そんな操さんが可愛いと思う。だから、そこにはあえて触れない。

「デートはできる?」

その一言で——操さんは噉つていたお茶を咽させてしまった。やつぱり、そういう単語は苦手らしい。

「つた……くよお……着いて早々次のデートの計画か? 今日を大事にしろよ、今日を」

「うん、そうだね。久々のデートだものね」

強調する必要もなく、これは家デートと呼べるものだ。

「ずっと会いたかったから……嬉しいよ」

操さんも嬉しかったらしく、ようやく強く微笑んでくれる。

「お前が寂しがつてるだろーから……誘ってやったんだよ」

けれども、重々承知している通り、今日のお誘いは軽くない。もし、言葉のままの理由だったら……わざわざ僕を呼ぶことはなかった。操さんは何らかの理由でこの家から——近所から離れられない——あ、だから大学にも来られないのか。

色々と一本につながって——やっぱり操さんは可愛いな、と思う。けれど、その感性はどこまでも格闘家としてのものです。狙われている場所には敏感でも——そこに込められている想いに対しては鈍感だ。

「……着いて早々やりてえのか？ ……ハア、だから全裸でなんて出迎えたくなかったんだよ」

操さんが誰かの指示に従うのは珍しい。大抵の気に入らないことは拳で解決してしまふから。だから——こうして裸になっているのは——きつと、操さんにとって大切な人、もしくは、大切な場所の都合なのだろうな、と思う。

そして、そんな悪態をつきながら——それでも僕を家に呼んでくれた。それは——僕もまた、操さんにとって大切な人のひとりなのだろう。

操さんは、身体を隠すことは余計に恥ずかしい、と思っ
ているフシがある。だから、あえて腰に手を当てて。

「オレの裸で欲情しちまったか？」

それは、僕のことを茶化すように。けれど、僕は操さん
に対しては正直だから。

「うん、だって操さんの裸は可愛いもの」

すぐにでも抱きたいくらい。

そこで僕はちよつと座る位置を変えた。本当に姿勢を直す
くらいのつもりで。けれども、操さんはピョンと立ち上がる。

「こ、こんなところで襲うなよ!? べ、ベッドでな……あ、
シャワー浴びるか? オレの方はもう浴びておいたけど……」

ここで、一緒に浴びたいな、なんて言ったら……きつとまた
慌てるのだろうな。けど、大丈夫だよ。僕も来る前に汗は流
しておいたから。

部屋に着いたらきつと——こんな感じになるのだろうと思
って。

沖道春奈

桜峰高校——来年度——来月から、ボクはここに通い始める。不本意ながら。

というか、書類の提出を忘れていて合格取り消しだなんてあまりに理不尽すぎる！

こっちは引つ越しの準備とかで忙しかったんだから！

……と、抗議したところで決定が覆ることはなく……こんな学校、滑り止めの滑り止めの滑り止め……というか、ネタで受けたようなものだ。受かるに決まつてる。だが……その滑り止めすら……危なかった。まさか、送った書類に漏れがあったなんて。……まあ、気が緩んでいたというか、乗らなかつたというか、そういうところはあるけれど。

ただ、入学式までに間に合えばいい、ということなので……わざわざ紙切れ一枚のために実家からリニアで届けに行くのも馬鹿馬鹿しい。そこで、こっちに引つ越してから……と思っていたら、これまたギリギリ。何しろ、最初は全然違う高校に行く予定だったわけで。アレコレ大慌てで別の進学先を決めて、しばらくゲンナリしてて、引つ越しキャンセルとか新規申し込みとかしなきゃ、って三月後半で気がついて。

時期や予算の都合とかから近くには住めず、見つけた住居はバスとか電車とか乗り継

いで片道三〇分……ただし、朝は道も込むので一時間近くかかることもあるという。……はあ、絶望的だ。ボクの高校生活、始まる前から絶望的すぎる。両親もガツカリしてるし、何というか……もう、大学進学を頑張ろう。

ただ……この三年間を無為に過ごすわけにはいかない。今回の事故での唯一怪我の功名といえるのは……都会の学校に通うようになった、ということ。だったら……彼女を作らなければ……！

けど、女子なら誰でもいい、というわけではない。恋人にするなら、やっぱりとびつきりオシヤレで可愛くて——それに見合う男になるため、自分なりに色々頑張っている。ブレザーの着崩しの研究とか。校則で認められてる範囲のアクセサリーとか。

そんなボクを、妹は冷めた目で見てたなあ……。女のコに夢見すぎだつて。それでも、ボクは夢を見たい。何故なら……アイドルだつて、実在する女のコなのだから。

ボクの理想が高すぎるのは、アイドルにハマりすぎた所為——とは妹談。曰く、気遣いはできるのだから、あとは身の丈にあった相手を見繕えばカノジヨもできなくないのでは、とのこと。けれど……やっぱりボクは可愛い女のコが好きだ。こればかりは譲れない。

ところで、この学校を受けたネタ、というのが……まあ、いわゆるネット動画？ この学校の去年の新生歓迎祭の舞台での、軽音楽部の出し物が……まさかの水着バン

ド。なにやら部員が三人しかいなかったらしく、四月中にもうひとり新入部員を見繕わないと廃部とのこと。そのため、手段を選んでいられなかったらしい。ちなみに、先日新入生向けの部活一覧を確認したところ、軽音楽部の名前はなかったもので……健闘むなしくダメだったらしい。あんな際どいピキニにさえなつたのに。

けど……確かに、可愛かった。特に、ボーカルのコが。ショートカットで、恥ずかしそうで……胸も大きかったなあ。そして、歌も上手い。何かこう……まさにアイドル……って感じだった。デビューしていかないのがもつたいたいなくらい。いまは何部に入ってるんだろう。もし出会えたら……あの人のためだけにどこであつても入部してしまいたい。……できれば楽なところであつてほしいものだけだ。

そんな思いもあつて……あと、はるばる往復一時間の学校まで来て、書類一枚だけ出して帰るのももつたいたい。それに、運が良ければ……あの人に会えるかもしれない。そこで、ちよつと校内の様子を探検してみるつもりだ。そのためにわざわざ新品の制服に袖を通してきたのだし。

上履きも持参してきたから、まさに気分は一足先に高校生だ。クラス分けについては入学式の際に告知されるようなので、ボクが何組になるかはまだわからない。

春休みの校舎内を少しフラフラしてみただけ……別に面白いことは何もなかった。そもそも授業はやってないし、グラウンドや校庭で部活もしていない。部室の並ぶ北校

舎二階もしんと静まり返っている。ちなみに、音楽室や美術室も鍵がかかっていた。当然、屋上への扉も。購買なんかもやってないし……ああ、本当に休みだ。残り少ない休み期間を全力で休み尽くしているって感じだ。当然、目当ての女のコも休んでいるのだろう。……つまらん。まるで、ボクの高校生活を暗示しているようで、入学前から陰鬱としてくる。

もういいや。とつとと書類を提出して……代わりに学校の周辺を歩いてみるか。デートスポットみたいなどころもあるかもしれないし。

一応、コースの最後に職員室が来るようにルートは決めていた。なので、これで校舎内は一通り歩いたことになる。文字通り無駄足だったけれど。

ただ……職員室つてのは、どの学校であつても緊張するなあ。もう入学は決まっているのだから恐れることは何もないのだけれど。

大きく深呼吸して……拳を握りしめる。ノックひとつでここまで畏まる必要もないか。よし、自然に。

気を取り直して、ボクは右手を振りかざす。その甲が扉に触れるか触れないか、その直前——

——ガラリ。

扉は勝手に開いた。いや、自動ドアではないのだけれど。室内側から誰かが開いただ

けで。

けど、ボクは、ここで、生まれて初めて――

女のコのおっぱいに――触ってしまった――それも、直に――

ふに、というか、ぽよん、というか……とにかく、とんでもない柔らかさだ。それに、温かい。人工物の類ではなく――紛れもなく、本物の女のコである。本物の女のコの――

――全裸の女のコが、そこにいた。

初めて見る異性の身体――もちろん、ネットでは見たことはあるけれど――それを目の当たりにすると――眩しすぎて――心臓が――爆発しそうだ――！

けど……なんで……そもそも……どうして学校で……しかも、事もあろうに職員室から……!?

ボクはどうしていいかわからず……思わず逃げようとしてしまった。けど。

「あ、ちよつと待って！」

女のコは呼び止めようとする。そのとき、手を伸ばした先に丁度あったからか。

――ブチイッ！

ズボンが強く引つ張られたのがわかった。それは、ポケットの財布とベルトループを繋いでいたシルバーチェーン――女のコはそれを掴んでしまったらしい。

入学早々――いや、入学を待たずに制服を破ってしまうとは。これには女のコも大慌

て。

「ごっつ、ごめんなさい！ 私、お裁縫とか得意だから……っ」

直してくれると彼女は言っている。それだけならとても女のこらしいのだけど……いや、これ以上に女のこらしい姿はない。何しろ、女のことしてのすべてを魅せてくれているのだから。

あまりに自然な仕草で——なのに、現実離れた美術品のような姿——あまりの異常事態に、ボクの意識はふらりと遠のいていく。それを現実に縛り付けてくれたのは、呑気なおバチャンの声だった。

「おきみち沖道さんー、事情は貴女から説明しといてくれるー？」

「あ、はーい」

室内から叫んでいたようなので顔は見えなかったが、そのまま扉は閉められる。多分先生で、どうやらすべての責任を女子生徒にぶん投げてしまったらしい。教員の立場としてどうかと思う。それに平然と応じる女のこの方もアレだけど。

そう、この女のこ——沖道さん、といったか——ん？ 沖道……？ その珍しい苗字がボクの記憶に電流を走らせる。

「沖道……さんって……去年の新歓祭で……」

ステージ中央で、ビキニの水着をぼよんぼよんさせて……その動画をボクは何度も観

た。そして又いた。この中はどんなになつてゐるんだろう——それを想像して。

けれど、もう想像する必要はない。水着の自身がここにあるのだから。その大きさは動画で見たとおり。張りもあつて、水着で支えなくてもたわわに実つてゐる。そして、隠れていた乳首は——ちっちゃくて可愛い。元々肌の色が薄いからか、乳輪のピンク色も控えめで——まさに桜よりも桜色だ。

さらには——予想外に下半身まで——ふわつとした毛の山の先が、こちらに向けてスつと伸びている。決して濃すぎず、可愛らしく——そして、艶めかしい。

ボクは下着の中の自己主張が収まらず、思わず腰が引けてしまった。そんな厭らしい男子と相對しても、沖道先輩は嫌な顔ひとつしない。

「えーと……びっくりさせちゃったよね。これも仕事で……」

「仕事？」

「うん、劇場の方の……つて知らない？」

「う、うん……」

劇場の仕事——どうやらこの学校では周知のことだったらしく、それを知らずに入学してきたボクは恥じる。だが、沖道先輩も同じように恥ずかしそうだ。

「ひえ〜……私つてば有名人みたいな顔して……恥ずかしい……」

恥ずかしがるのはそこなんだな……。全裸の女の口はちよつと頭を抱えて——けれ

ど、胸もアソコも隠すことなく——少し身を屈めていたけど、またすぐに背筋を伸ばす。
「えーとね、私、ストリップ劇場でアイドルやってるの」

「ストリップ……アイドル……?」

「そう、ストリップ・アイドル」

アイドルについては詳しいつもりだったけれど、そういうジャンルは初めて聞いた。

「で、その劇場の企画で、一ヶ月全裸生活つてのをやらされちゃって」

「ぜ……っ!?!」

大丈夫なのか、その劇場?! それを承諾する学校も大丈夫なのか?! と何から何まで不安になるも——

「先生たちも、私がいみんなと一緒に授業受けてると男子がソワソワするとか何とかで、ずっと隔離したかったらしく……」

そりゃ、同じ教室にストリップ・アイドルがいたら……例えば制服を着ていてもドキドキしちゃうだろうな。

「……その期間、謹慎つてことになっちゃったの」

とはいえ、自宅謹慎ではなく登校謹慎。授業時間をずらしたり教室を別にする形で一ヶ月過ごしたらしい。期末試験から月末にかけて春休みが入るのも都合が良かった、とのこと。

ただ……どうやら元々成績はあまり良くなかったらしい。補習として課題を与えられ、今日はその提出に来たようだ。

そして、ボクと鉢合わせて——

「けど、ホントにごめんなさい。お裁縫セットなら部屋にあるんだけど……」

「いえっ、本当に大丈夫なんで……」

ベルト通しひとつ外れたところでさほど困ることはないし。多分、コンビニのキットですぐに直せる。けど、沖道先輩はどこまでも律儀で。

「だったら、他の形でお詫びできないかな？ このままだと、私も落ち着かないし」

そのとき——悪魔がボクに囁いた。

「な、なら……ボクの……」

ボクの——彼女に——相手の善意につけ込んで——

けど。

「あ、ごめんなさい。私、その、一応、アイドルだから……」

あつさりあしらわれて、内心ホッとしている。ボクみたいなことを考える人はボクだけじゃなくて……それを断るのも慣れてるんだって。

けど——

「恋人とかはダメでも……ほら、私、アイドルはアイドルでもストリップアイドル、だか

ら……」

そう言つて——彼女はそつと視線を落とす。ボクが——股間を隠している両手の上に。

「本当は、劇場に来てくれなきやダメなんだけど……内緒にしてくれるのなら——」

——後から思い返してみれば、これは順序が逆になつていただけなのかもしれない。

このあとボクは——おきみちはるな沖道 春奈ちゃんのファンとして劇場の常連になつていたのだから。

渋長優

芸術とは、明確に分類できるものではない。当初俺は、絵を描きたいのだと思つてた。ゆえに、美術学科を選択したのである。そして、この二年間は油絵に費やしてきたが……何か違う——日々、そんな思いに苛まれていた。

大学正門から第一講堂へとまっすぐ向かう中央通り——その道端のベンチに腰を掛け、俺はぼんやりと敷地内を眺めていた。キャンバスも立て、絵を描く準備はできている。あとは、自分を刺激する何かを探すだけだ。

ふと、目と鼻の先の緑の中にパッションピンクな塊を見かけて——まあ、そこまで目立つ色彩で固めていれば、一瞬は視線も誘導されるだろう。だが、芸大ともなれば奇抜なファッションを見ても驚くには値しない。ただ……今日はコミケでもハロウィンでもないんだがな。背中に垂らしたマントは普段着としての常識を逸脱している。

にも関わらず、俺の心に響くものがない。きつと、私服と言ひ張る奇抜な衣装も見慣れてしまったのだろう。

それで——俺は気がついた。異質な環境にも浸りすぎると、そこが標準であるかのようにならなくなる。つまり、いまの俺に必要なのは原点回帰——大学

という殻を打ち破り、本来標準的と呼ばれる日常生活の中から芸術を見出していくべきではなからうか。このままでは、自分の中の感性のズレは大きくなる一方であり、いずれは心が死んでしまう。必要な技術や知識はすでに身につけた。これ以上こんなところに縛り付けられていても、きつと俺には未来などない。すぐにでも辞めるべきだろう。ここで学べることなども何もないのだから。

確かに、先程のマントの女は存在感があつたかもしれない。だが、所詮悪目立ちだ。この特異な環境においてはむしろ平凡とさえいえる。誰もが平凡……平凡……！ 自分の作品も……何もかも……！

人と違うことをしようとすること自体、ここでは人と同じなのだ。コスプレだろうと、ヒツピーだろうと、ゴスロリだろうと、全裸だろうと——

——って全裸!?

中途半端な時間のためか、敷地内を行き交う人間はまばらだ。ゆえに、目立つ。のどかなキャンパスを……何かの見間違いか？ 正門の方からゆつたりと——何に物怖じすることなく平然と——！

ベージュの上下を着ているのでは、と疑いたくもなる。しかし……何度見ても……全裸にしか見えない。ほのかに膨らんで丸みを帯びた両胸——その先端まで詳らかにしながら、決して焦ることなく堂々と——文字通り、胸を張って闊歩し——そのポリユ—

ムが控えめなこともあり、歩幅に合わせて派手に弾むことはない。その頂点で可愛らしい女のこの蕾がほのかな花びらを伴いしつかりと鎮座している。

肌色の全身タイツにつけ乳首、という可能性も考えた。しかし、股の間を覆う黒々とした暗がり——全身タイツであれば、そこに影など落ちようもない。そして、ふたりの距離が近づくにつれ確信する。それは紛れもなく、彼女の肌から生えている毛が密集しているのだと。成熟した股の間の割れ目を覆い隠すように、しつとりと。

俺は、観察するかのごとく彼女の身体を凝視している。だが、彼女は俺に一瞥さえしない。視線には気づいてはいるはずなのに。彼女はそのまま通り過ぎてゆき——通学のためのバッグを肩に掛け、平然と——お尻を振りながら——

その後ろ姿を見送っていると——俺の中で何かが失われていくような気がしてくる。それが何かはわからない。だが。

「ちよ、ちよつと待つてくれ！」

俺はつい……彼女を呼び止めていた。

「………何？」

彼女は足を止めて振り向く。その冷たい返事は怒っているようでもあるが………少なくとも、拒絶されているようには見えない。そして、恥ずかしながら——俺はこのときになって、初めて彼女が眼鏡をかけていることに気がついた。すつきりしたシヨートボ

ブの髪も、まるでミニマリストのような印象を受ける。

「ああ……その……」

ここで、俺はようやく自覚した。彼女は——美しい。もちろん、彼女の身体そのものの美しさもある。だが、これは美術的モチーフとして——かつて西洋絵画の常識として、神は人々の前でも裸である、という共通認識があった。それはつまり、こういうことなのかもしれない。俺はこの女性の中に神に似た何かを感じている——それと、乳房と乳首、それに下の毛まで湛えたありのままの姿——男としての純粋なところも刺激されていたことは否定しない。

もし、これが得も知れない繁華街であれば、悪い商売をしているのではなからうか、と疑ったことだろう。この芸大という敷地内で出逢ったからこそ——彼女の中に芸術を見出すことができる。

「……少々お時間を、よろしいでしょうか」

俺には何を話せばいいのかわからない。だが、このまま彼女を行かせたくはなかった。

そして、俺はいまなおベンチに座っている。隣に全裸の女のコを携えて。

彼女の名は、しづな優長 ゆう優——写真科の三年とのことだ。彼女は大学に通う傍ら、ストリップ劇場の踊り娘として——しかも、ただのストリップパーではなく『TRK26』と

いうストリップ・アイドル・ユニット——その一員であるという。

「とうか、そういう施設ってまだあったんだな」

そもそもこの時代ともなればストリップ劇場など、昭和の娯楽として小耳に挟むくらいは存在感しかない。

「風前の灯だったところを、うちのプロデューサーが復興したみたいよ」

せっかく生きながらえたというのに——そのプロデューサーとやらはとんでもない企画を打ち出したのである。一ヶ月間全裸生活——それも、部屋に引きこもるのではなく、極力日常を過ごすこと——！

「……ロックというよりクレイジーだな、そのプロデューサーは」

せっかく復興した劇場の灯があつという間に吹き消されかねない。

「ま、プロデューサーが、というより、うちのアホたちが悪乗りしたつてところは否認ないけど」

「アホ？」

「メンバーよ。痴女揃いの」

こうして誰の目を憚ることなく素っ裸で雑談に興じている優さんも……いや、平気な顔をして内心は羞恥心が渦巻いている可能性もある。

「と、ところで……その全裸生活というのは……どこまでを全裸と定めているんだ？」

「靴とかは着用を許可されてるわよ。路上で硬いもの踏んだら痛いし」

そう言いながら、眼鏡のツルをクイと直す。おそらく、そちらも許可されているのだろう。全裸に眼鏡——不思議な組み合わせだ。必要なものだとはわかる。だからこそ疑問だ。

「例えば、靴が許可されているのなら、そのままブーツと言い張って……」

「……ああ、なるほど、そういうこと」

そのままオーバーオールまでブーツだということにはできないのだろうか。そもそもそれが通じるのなら、全身タイツの方が全裸よりはまだマシだろう。

「残念だけど、丈は膝下まで、と決められているわ。その他袖袋なんかも。いわゆる

『あおずみ蒼泉ライン』で」

「アオズミライン?」

「うちのセンター、あおずみあゆむ蒼泉 歩つていうんだけど、前世で何があったのか、全裸でないと

唄えない性分らしくて」

「……本当に、前世で何があったんだろうな」

詳しい話はこちらからないが、その蒼泉歩というセンターが万全に唄える服装が基準になつているらしい。……ということとは、いまの優さんのような……実質全裸でなくてはいえない、ということか。実に難儀なことである。

しかし、そんな難儀な女性でも、誤魔化すすべはあるかもしれない。

「なら……身体に直接服を描くのはどうだ？」

例えば、肌には直接水着を描けば——乳首は押さえられないが、下の毛まで剃れば、遠目には本物のように見えるだろう。いや、水着に限らず、タイトなデザインを追求すれば、様々な衣装を描くことができるに違いない。服だけでなく……動物の毛皮を描けばコスプレのような楽しみ方もできる。むしろ、既存の概念に囚われない、もつとオリジナルの——それこそ、先程のマントの女のようなパッションピンク——そんな派手な色彩で肌を塗り潰し——

「……もしかして、私の身体に描きたいの？」

どうやら俺は、彼女の身体に夢中になつていたようだ。夢中になつて——それはもはや視姦ともいえる。それでも平然と話を続けられる女のコというのも、まさに職業柄というやつか。

ストリップパーだから受け入れてくれるかもしれない——などと甘いことは考えない。むしろ、相手はプロなのだ。

「金なら払う！」

俺はすぐさま財布を取り出し、中からひつたくるのように——万札三枚を優さんに突きつけた。金で身体を買うというのも失礼な話である。だが、同じ芸大の生徒ならば、こ

の思いは伝わるかもしれない。

「ならいいわ」

「……………」

あまりにあっさりと承諾を得られて、つい俺は聞き間違いを疑う。だが、優さんはすつと腰を上げ、俺の前に立つと胸を差し出してきた。しかも。

「あ、もしかしてお尻？ ああ、背中やお腹の方が描きやすいかもね」

「いつ、いえ！ できればそのまま……」

言葉には詰まりながらも慌てて絵の具を溶き、細い筆の先で、優さんの柔らかな身体の上を――

「……………ん、ふ……………」

毛先に素肌を撫でられ、優さんはくすぐったそうなため息をこぼす。それがとても――険しい口元から漏らされたものとは思えない艶つぼさ――そして可愛らしさ――それが俺の手元を突き動かす。

今回は完全に準備不足だった。このような柔らかいキャンバスに油絵の具は少なからず粘度が強すぎる。それでも、ペたり、ペたりと――

「あうん……………」

ぶくりとした優さんの突起を撫でると、女のコの熱が唇から溢れ出す。これまでに感

じたことのなかった背徳性——それが自分の中のイメージを歪めていく。これまで、思
いもよらなかつた形に。

一先ず、左の胸だけ。少し離れて出来栄えを確認してみる。だが、ひと目見ただけで

「う、う……うおおおおおおお!!」

美しさだけではなく、魂に身を委ねることによつて力強さを伴つた生々しい花びら—
—これか!? 俺が求めていたものは……これだったのか!? 女体をキャンバスにして、
色とりどりに……!」

「……で、気は済んだ?」

俺の感動とは裏腹に、優さんの感想は素つ気ない。けれども、俺の思いは燃え上がる
ばかりだ。にも関わらず。

「い、いや……だが……この画材では……ッ!」

ボディペイント用の絵の具というのは別途存在する。一刻も早く揃えたい……!
だが一方の優さんも——俺とは異なる理由で落ち着かないようだ。

「……まいったわね。さすがに胸にワンポイントみたいなものじゃ、金額には見合わな
いわ。かといって、返金するのも癪だしね」

優さんは——ストリップパーである。だからこそ、まっすぐにその発想へと至り——そ

して、躊躇もない。

「……金額分はサービスしてあげるけど……貴方、ここでズボン下ろせる？ わざわざ移動するのは時間の無駄だから」

……実のところ、許可が下りているのは優さんだけだったので、俺まで全裸になっているのが大学側にバレたらマズイことになっていたらしい。だが、幸いなことに——いや、誰かにはバレていたかもな。膨れ上がった様々な感情と、そして——あまりにも堂々としていた優さんに触発されたところはあつたが。

今回はこれで精算済み、ということらしい。それについて、こちらも依存はない。優さんは、その……とても素敵なひと女性だったから。けれども、俺は男であると同時に、芸術を志す人間でもある。

「くっ、今月いっぱいどこまでできるか……!?」

彼女の全裸生活はわずか一ヶ月だ。俺のインスピレーションはそんな短期間には収まりそうもないというのに……！ できればずっと……彼女の活躍を追い続けたい……！ それは、劇場の踊り娘というより、この地に降り立った神の姿として……！

だが、優さんは何事もなげにさらりと言った。

「来月以降でも構わないわよ。出すもの出してくれるならね」

そういつて、親指と人差指で輪を作る。決して、出すものとは股間ではないのだろう。しかし、いくらであっても捻出するつもりだ。俺の中のインスピレーションがあふれ続ける限り。

檜しとれ

コスプレAV愛好家であれば共感してくれると思うのだが……何故脱ぐ!? もちろん、衣装が汚れたら困るとか、そういう事情はわからないこともない。だが、コスプレAVだぞ? そのすべてを脱いでしまったら本末転倒も はなは 甚だしい。ゆえに、理想は着エロ……最悪でも半脱ぎか。

だからこそ、あの撮影は……けしからん……っ! そう、メイド☆スター・ ひのき 檜しとれさんの流出動画の件である。せっかくあのしとれさんにメイド喫茶の制服を着せたままあんなことやこんなことをさせていたのに……結局丸裸にしてしまうなど言語道断とはまさにこのことだ。

あの事件が原因でしとれさんは店を辞めてしまい——彼女の所業については我々『ご主人様』の間でも様々な意見が飛び交っている。入れ込みすぎていた連中は、メイド失格、辞めて当然、と息を巻いていたが……ナニか勘違いしていないか? 確かに、メイドたちにアイドル的な側面はあったが、それでも彼女たちはあくまでメイドであり、俺たちは主人である。そこに恋慕の類の感情は挟むべきではなく……その接し方も、あくまで主従関係によるものであるべきだ。ゆえにむしろ、主人でありながらメイドに対し

て余計な一步を踏み込んでしまったあの男こそ責められるべきであり……だからこそ、あの一件で俺のメイド熱が揺らぐことはない。メイド喫茶『Cheese O'clock』——未だに俺は、そこに通い続けている。彼女たちの主人として、残されたメイドたちの成長を見守るために。

だが……正直なところ、しとれさんが抜けた穴はやはり大きい。ミニライブも、何と
いうか……本当にただのカラオケ大会のようになってしまった。それはそれで可愛らしいところもあるのだが、しとれさんの舞台に慣れ親しんでしまった者としてはやはりどこか物足りない。

店側としても同じ想いがあつたのだろう。その証拠に——非常勤という形で、しとれさんは時折メイド喫茶のステージに戻ってきてくれていた。しかし、肩書きはメイドではなく——ストリップパー——喫茶を追われたしとれさんは、どういう経緯かストリップパーとして収まっていたのである。ストリップパーといえば、裸踊りを披露する盛り場だ。メイド喫茶にゲスト出演した際に脱ぐことはなかったけれど、きつと、劇場の方では脱ぐのだろう。最も盛り上がるシーンで、最も美しくも可愛らしいメイド服を。そんなものに、俺は興味が湧かない。主人たちの中には現在の職場に流されてしまった者もいるようだが……そんなものは、ご主人様の面汚しである。俺はメイドを愛する、メイドたるしとれさんのご主人様なのだ。

しとれさんが次に『Cheese O'clock』に来店するのはいつになるか——そろそろかと思っていたのだが、店の方ではなかなか告知が打たれない。そんな中、『別の店』で告知が——新歌舞伎町にあるメイドキャバクラ『メイドインヘブン』——こちらについてはしとれさんの後輩の湊ちゃんも勤めているため、当然チェックしていた。未確認情報として、密かにしとれさんが接客しているとの噂もある。正式なキャストとして登録はされていないところを察すると、ストリップ劇場との兼ね合いで色々あるのだろう。

だが、そのしとれさんが——期間限定で——しかも、スペシャルコスチュームで……ッ!?

これについて、俺には一抹の不安があった。そもそも、メイド服自体がスペシャルなコスチュームなのである。わざわざそこから着替える必要などあるか? いや、ない。スペシャルなメイド服にさらにスペシャルな追加など、まさに蛇足というものだ。

それに、看板こそキャバクラではあるが、その業務内容はお触りOKのセクキャバである。そんな店で……スペシャルコスチューム……となると……。

だが、俺はしとれさんを信じたい。メイド☆スターたるしとれさんが納得する形のスペシャルなコスチュームとは一体……?!

それを確かめるため、俺は新歌舞伎町のメイドキャバクラへと向かっていた。公式

ブログによると——普段は出勤予定すら公開されていないしとれさんの来店が確定しているのだから、キャバクラは毎晩大盛況らしい。だからこそ俺は半休を取ってここへ来た。ここまでしておきながら、満席で入れませんでした、など許されない。ゆえに、開店一時間前——さすがに行列ができるようなことはなく、俺は店の前を随時チェックしながらその近辺をウロウロしている。シンカフ街にいいイメージはなかったが……秋葉原も裏路地に入れば似たようなものか。

ただ、露骨に同じ場所を巡回していると、その筋の人に怪しまれてしまうかもしれない。ここは、コンビニにでも入って買い物しているフリでもするか。ちょうどそこに一軒あるし。ごく普通の全国チェーン店が。もちろん他の客もおり、ちょうど女の人が出てきたところだ。

しかし——

俺の足はそこで止まる。決して、店の中に異変があったわけではない。異変はむしろ店の外に。その、出てきたばかりの女性客に。

凜として伸ばされた背筋。長い後ろ髪は頭の上で束ねてポニーテールに——そのシルエツトだけで、わかる者にはわかるだろう。彼女は——

「しっ、しとれさん!?!」

俺は思わずそのお尻に向けて呼びかけていた。俺の声は雑踏の中でも彼女の耳に届

き、後ろ髪をなびかせながらふわりとこちらに踵を返す。

「もしや……岡島さま……?」

俺の目に狂いはなく、彼女は檜しとれさんだった。かつての職場を辞したいまでも、常連だった俺のことは覚えていてくれたらしい。やはり、彼女はメイドの頂点に立つメイド——メイド☆スターである。メイド喫茶から離れても、コンビニで買い物をしていても、メイド服を脱いでも——いや、メイド服を脱ぐだけならともかく、そこから別の服を着ることなく……というか、全裸でコンビニ……だと……!? しとれさんがストリッパーになっていたのは知っているけれど……いや、ストリッパーであろうとも舞台の外で脱ぎ散らかすはずがない。

ならば、まさかまた変な彼氏に乗せられて変なプレイを強要されて……と嫌な予感がよぎったが、彼女がカメラを気にしている様子もなく、それどころか不自然なまでに自然体である。まるで、狼狽している俺の方がおかしいほどに。だが、俺だけにしとれさんの裸が見えているわけではなく……ふっくらした胸は公証どおりのDカップ。流出動画で見たとおりの綺麗な乳頭——薄暗い店ではなく太陽の明かりに照らされているからか、その桜色はさらに美しく見える。腰はほっそりとくびれており、そこから膨らむお尻の線も柔らかい。彼女は姿勢が良かったため、張り出したところがより強調されるようだ。そんなしとれさんに、道行く人誰もが注目している。それは、しとれさんの美し

さによるものだけではないだろう。

一応知らぬ仲でもないからか、しとれさんは少し照れながら事情を説明してくれた。

「ご心配なさらずに。この街では……えー……女性がこのような姿で出歩いていても最大限見逃してもらえ、といたしますか……」

いや、むしろ日本で一番危険な場所だろうに。だからこそ逆に、一周回って安全になった……？ だからといって、そのような姿で出歩くなんて！

納得していない俺に対して、しとれさんは話してくれた。白昼堂々、新歌舞伎町で全裸買い物していた理由を。

「実は——」

ストリップ劇場の企画で——!?

「そんな……バカな……!?!」

一ヶ月間全裸で生活——しかも、できるだけ普段どおりに……!

もはや、どこからツツコンでいいのかわからない。なので、常識的などころはさておき……俺は、最も個人的な意見を彼女にぶつける。

「だからといって……メイド服を脱いでしまったのですか……ツ!?!」

ストリップ劇場で……メイドのすべてを捨ててしまったのですか……ツ!?!

そんな俺の訴えに、しとれさんが怯むことはない。ただ、静かに右手を頭にかざす。

「メイドの魂は、ここに宿っておりますので」

——それで——その一言で、俺はしとれさんが言いたいことのすべてを理解した。

確かに、メイド服には亜流が多い。メイド服と称した水着や下着など、もはやただの肌の露出だ。

しかし、そんな中でもひとつだけ変わらないものがある。それが、しとれさんの指し示す——フリル付きカチューシャ——ヘッドドレスだ。どんな変わり種でも、これを外している事例は聞かない。いや、外してしまった時点で、世間からはメイド服として認識されないだろう。

だが逆に、そのただひとつさえ掲げていれば——たとえ裸であつても、それが裸の“メイド”であると何となく感じられる。他のコスチュームで、ヘッドドレスを着けていることはない。つまり、しとれさんはメイドの魂を失っていない——ストリップ劇場で全裸になっているとしても……！

しとれさんの言い分は理解できるし、説得力もある。だが……俺は……俺の心は、納得できん……っ！

「でも、俺は……俺は……メイド服が好きですッ!!」

もちろん、いわゆる亜流に心惹かれることもないこともない。だが、それでも……やはり魂の中心にあるのは、白いエプロンを下げた濃紺のメイド服なのだ……ッ！

「はい、私も大好きです」

しとれさんはあつさり同意した上で――

「けれども、ご主人さまのカラダはもつと好きなものがあるようで」

意地悪そうに顔を近づけ――死角になった柔らかな胸の陰で――逃げられなかった。俺のソコが、しつかりと握りしめられているのに。

「ご主人さまが求める『ご奉仕』はナニでございましょう？」

しとれさんの両手をもごもごと動いている。俺はそれに……されるがままで。何しろここは、新歌舞伎町――全裸の女子が歩いていても許される街――ならば……

――気づけば俺は――コンビニの前にへたり込んでいた。しとれさんは、オープンの準備がある、と言って先に発ってしまった……ような気がする。うろ覚えだけど。

俺は……俺は……一体、ナニをして……いや、ナニをされていた……？ シャツも乱れ、ズボンも半開きで……それを、正す気力さえ湧かない。もし、俺を動かす気力が残されているとすれば、メイドだけだ。メイドのためならば、彼女たちの主人として立たなくてはならないだろう。

そう……今日は、メイドキャバクラに……だが……スペシャル……コスチューム……？ 一ヶ月、全裸で過ごさなければいけないしとれさんが、メイドキャバクラで……ス

ペシヤル——

具体的に、ナニを想像したということはない。だが俺は、夕暮れの空に吸い寄せられるかのように立ち上がっていた。

いまでも、全裸の——メイド服を脱ぎ捨てたしとれさんをメイドとして認めて良いものか——俺の中の迷いは消えない。だが——メイドか否かはさておき——彼女は美しかった。そして、俺はこうして立ち上がっている。ゆえに、俺のカラダは——いや、魂は、認めているのだろう。

だが、頭では納得できていない。だから、向かう必要がある。陽もすでに落ち、店も開いているはずだ。いまこそ、その真偽を見極めよう。自らの魂に偽ることなく。

姫方紫希

誰にも信じてもらえなくてもいい。釣りだと思われても構わない。だが俺は本当に……新歌舞伎町で、痴女に出会ったのだ。

とはいえ……正直なところ、自分の中でもまだ混乱している。実際のところ、夢か現か自信もない。ということ、改めて状況を整理してみようと思う。

その日俺は……少々足を伸ばして、新歌舞伎町のゲーセンへと向かっていた。大学も午後からで、ちよūdいから空いている間に連コしようと思つて。家や大学の近くだと知り合いに会つてしまうかもしれないし。

で、いつもの大通りを、少々急ぎ足で歩いていた。ちよつと、コンビニに寄るために。ゲーセンの自販機とはいえバカ高いわけではないが、安い^{プライベートブランド} P Bのお茶で済ませられればそれに越したことはない。

いまから思えば、何故遠目でソレに気づかなかつたのか、と自分でも不思議だ。しゃがんでいたため、白い置物、と認識していたのかもしれない。ともかく、俺が最初に気づいたのは、コンビニの店内に入ろうとして進路少し曲げたときだった。ただ、何気な

く。本当に何気なく、地面の方に視線を下ろしただけ。

そこで、目が合ったのである。そして、足を止めてしまった。なので、もう見なかったフリはできないな——などと、よくわからない言い訳を考えていたことを覚えていく。ともかく、そこに座っていたのである——全裸の女のコが。

それはいわゆる、ウンコ座りというやつで。無思慮に開いた両膝を肘掛けにしていた。幸か不幸か——といつても、あとにガン見することになるのだが——角度的に股の間は見えていない。その時点では。しかし、上から見ただけでも胸はすこぶ大きく——隠す気があつても隠すのは容易ではないだろう。彼女が身に着けているのはパンプスと——強いていうなら、肩から掛けられたスマホだけ。長いストラップが大きな脂肪の山と山の間を斜めに横切っていた。

そんな女性が、俺の方を見上げていたのである。そして、目が合うとニコリと微笑んだ。全裸で。安心してください、穿いてますよ……という可能性を検討する間もなく、その女性は立ち上がった。なので、もはやその可能性を検討する必要もない。検討するまでもなく——全裸である。胸の先の乳首と乳輪から、下の割れ目とそれを覆うふわふわの毛まで、すべて。

そして、彼女はこう言った。

「ちんぽを見せてっ！」

おそらく——最初に目が合ってからここまで、一〇秒もかからなかっただろう。その短い間に、俺の性器カラダはすっかり反応してしまっていた。加えて——あまりの急転——あまりの現実離れ——理性と本能が相反して一步も動けず、指一本動かさず——股間に伸ばされる手から逃れるすべもなく——

彼女は自分のことを『シキ』と名乗った。というより、一人称がシキだった。

「そんなにビビらなくてもいいのにー。シキなんて下だけでなく上も裸なんだからー」

言う通り、シキさんは全裸である。全裸のまま、俺と共に新歌舞伎町のゲーセンへと向かっている。そして、ちんぼ見せて、と言われた後、なんやかんやあつて……俺は下半裸にさせられてしまった。幸いなことに——俺のムスコは完全に力尽きている。アレだけされれば当然だが。おかげで、こうしてシキさんの裸を前にしてもそれなりに平常心で接することができる。

シキさんの言動は全般的に幼い——そもそも、一人称が自分の名前という時点で。しかし、身長は女子にしては結構高めだ。俺とてそう背が低いわけではないが、紫希さんはそれとほとんど変わらない。そして、その長身に見合う肉付きも——胸はしつかりと張り出し、お尻もどっしりと膨らんでいる。こういうのを……モデル体型というのだろ

うか。そのプロポーシオンに裏付けされた自信もあるようで、全裸だというのに物怖じしない。周囲の視線どころか、法的な問題にさえ物怖じしない。その、あまりに堂々とした立ち振舞いに——俺はついさん付けで呼んでしまう。

「シキさんは大丈夫かもしれないけど……」

あまりにも平然としているのでついそんな気がしてしまいが、そこに根拠はない。むしろ、女のコが胸どころか股間まで顕わにしているのだから、男どころか女性からの視線さえ釘付けにしている。おかげで……こつちの股間は周囲からの注目について多少は避けられているようだ。こちらの左腕を温かく柔らかい右腕に絡め取られていることもあるが……ちんぼを見せて、というシキさんの命令に逆らえず、ブラブラしているところに手で覆うこともできない。

シキさんは——純粹に俺のソコを見ていたいようだ。歩きスマホならぬ、歩きちんぼ見——むしろ、俺の顔や目ではなく、俺の股間と会話しているかのようでもある。

「うんうん、やっぱいいちんぼだよー。ゲーセンでもちよくちよく見かけてたし、いいちんぼの予感あったんだよー」

何故自分に話しかけたのか——その問いに『いいちんぼっぽかったから』と即答されたが——どうやら、以前から俺に気をかけてくれていたらしい。けど、こんな姿の女性がゲーセンのような場所にいたらすぐに気づくと思うのだが——その疑問に、シキさん

は自ら答えてくれる。まるで、俺の心を読むかのように。

「あー……シキ、今月は裸で出歩いていいんだよー」

「え？」

シキさんの言っていることがよくわからないので訊き返してみるも。

「いつもは霞さんに怒られるから服着てるけどさ、今月は着なくていいんだよー」

何のことだかわからないが……シキさんは、今月いっぱいこの姿で生活している……

？ それを意識してしまい……勝手に反応を始めたムスコを抑えきれない。こ、これは恥ずかしいぞ……!! 人前で、いままさに勃起していくところを見られるなんて……!

けれど、一番間近で見ているシキさんは嬉しそうに。

「あ、ちんぼ入れたがつてるー」

どこに、とはあえて言うまい。シキさんは俺の腕を解くと、くるりとお尻をこちらに向ける。その誘惑に俺は……やはり抗えそうになかった……。

その光景はあまりに異様と言うしかない。全裸の女と下半裸の男がゲーセンに入店——他の客どころか、店員さえもぎよつとする。けれど……何も言わない。店員さえも、何も言わない。もしかして、何か店長の弱みでも握っているのではなからうか。とはいえ……実際、自分が相手の立場でも何も言えないかもしれない。

ただ、俺はシキさんほど肝が太くないし、そもそも、彼女から離れたら本当にただの露出魔だ。……うーん、せっかく練習のために来たんだけど、これじゃあひとりでプレイなんてできそうにない。ちなみに、シキさんは言っていたとおりのゲーセン常連で、ダンスゲーから格ゲーから麻雀に至るまで異様に強い。支払いはすべてスマホで。便利な世の中になったものだ。スマホひとつあれば、裸一貫でも困らないのだから。

しかし、そのスマホがジャジャンと鳴り出す。この曲は……家庭用RPGのものだ。本当にいろんなジャンルに精通しているらしい。

電話が来ても、シキさんは落ち物パズルのプレイを続けている。だが、応じる意志はあるようだ。

「ちんぼー、ちんぼー、ちよつとスマホ出てー」

ち、ちんぼって……俺のことか？ 確かに、ちんぼ目当てで一緒にいるとは言われたけれど、さすがにちんぼ扱いは——と少し不満を感じるも——多分俺は、すっかりシキさんに魅入られてしまっているのだと思う。言われるがままに通話フリックをして、端末をシキさんの耳元に。

「もしもーし、んー……いまゲーセンー。……そーそー、近所のー。ウンウン、覚えてるってー。大丈夫、これ負けたら行くからー」

どうやら誰かに呼び出されているのだろう。そして、パズルが上まで積み上がればそ

こへ赴かなくてはならないらしい。俺はシキさんを応援すべきか、否か。シキさんが負けてくれれば——この痴女から開放されて、ようやくズボンを穿くこともできる。けれど——

「……ひえっ!? わーっ たわーっ たつて! すぐ終わりにするから! もー……シキ、捨てゲーとかあんま好きじゃ……わーっ たつてば、もーっ!」

プレイに関わらなく終わることが確定し、俺も心の内で寂しさを自認する。やはり……俺は、すっかりシキさんに魅入られてしまったようだ。

そしてシキさんも、それなりに。

「むーん……ちんぼとも対戦したかったけど……すぐ行かないと霞さんに怒られるから」

どうやら、シキさんは霞さんという人に頭があがらないらしい。名残押しそうに、隣に立つ俺に向かって——立ち位置的にも股間に向かって。

「シキ、捨てゲーとかしたくないし……代わりに続けといてくんない?」

それは頬にキスをするかのような気軽さで。しかし——急なことだったので、俺は——

「……わっ♪ ……これなら捨てゲーも致し方ないかなー?」

まだゲームの途中だったが、シキさんは隣の筐体から空いていた椅子を引き寄せた。

そして、身体をコチラに向けると引いてきた椅子に背中を預けるようにごろりと横になり――

送っていくよ、とも、送っていく、とも言うことなく、俺は成り行きのままにシキさんと連れ添っている。相変わらずシキさんの視線は俺の股間に下りたままだ。

「今度対戦するときは、シキがちんぽんちの近所のゲーセンに行つてあげるよ」
自宅のことは伝えた覚えはないのだが――

「……ちんぽ、ホントはこのゲーセン来るの、遠いでしょ」

それを聞いて、俺はドキリとする。どうして、そのことを……？

「大学のお友だちとは勝つても負けても気不味い……わからなくもないけど、勝つたり負けたりするのがゲームだからさー」

「!? シキさん、貴女は一体……？」

何故俺のことをそんなに知つて……？

これにシキさんは一言だけ。

「だって、ちんぽがそー言つてたから」

このときシキさんは、初めて俺の目を見て話してくれた。

そして、彼女は足を止める。

「あ、連絡先交換しよ」

スマホを差し出されて……俺はホツとする。

「今度は……はい、対戦しましょう」

もう俺は恐れない。シキさんに勝つことも、負けることも。

だが。

「それと、またちんぽシキに入れてねー♡」

シキさんにそんなことを言われてしまうと……また、反応して……！　だが、意外なことにシキさんは食いついてこない。

「……おっと、劇場の外であんまちんぽ入れるなって言われてたっけ。けど……いいちんぽは我慢できないから。……こっそりね♪」

さつき、股間に使っていたような軽いキスを俺の唇に——そして、軽い足取りでぐるりと翻ると、シキさんはその建物に入っていく。そこは——劇場だった。彼女のお尻が見えなくなったところで、俺はカバンにしまっていたズボンを穿く。それで、ようやく俺に返ったようだ。そして、わからなくなる。ここまで現実だったのか、それとも俺の妄想だったのか——と。

彼女を見送ってすぐに、俺はスマホで調べてみた。日本に何軒あるかは知らないが、

真つ先に当たったのがここ——TRK劇場であり——キャスト——というか、メンバーの一覧に彼女はいた。『ひめかた姫方し紫希』——全裸のまま楽しそうな笑顔でカメラに向かつてダブルピース——やはり、彼女そのものだ。短い間だったけれども、共に過ごした、彼女である。

劇場の外ではあんまり……ということとは、劇場の中にてそのような行為に及んでいるのだろう。けれど、シキさんはこつそり会ってくれと言っている。ならば、本来俺が劇場に金を払う必要はないのだが……俺は迷うことなく紫希さんのファンクラブに入っていた。例え、劇場の外で会えるとしても、劇場の中での紫希さんも応援したい。

紫希さんと新歌舞伎町で過ごして以来、どうも足元がふわふわしている。何事に対しても現実味がない。だから俺は——紫希さんに連絡を取ってみようと思う。明日、対戦しましょう、と。それですべてがわかるはずだ。

宮條桃

そんなウワサを信じていたわけじゃない。とはいえ、減るものでもないし——軽い気持ちでやってきた暇潰しの結果は、ウワサをはるかに超えるものだった。

「困ったなー。できるだけ自然に過ごすよう言われてたんだけどねー」

と、本人は言っているが……ハンバーガー屋に全裸の女のコが座っていればあまりに不自然極まりない。本当に、下から上まで——だからこそ露わになっっているその両胸のサイズは紛れもない本物——公証どおりのJカップ——！ それをあの小柄で支えているのだからそのアンバランスさは尋常ではない。

彼女は みやじょうもも 宮條桃——ストリップアイドルユニット『TRK26』のメンバーのひとりである。この ま 新歌舞伎町では時折女性のストリーキングが目撃されることらしいが、僕も実物は初めて見る。

とはいえ、ウワサというのとはそっちではなく——本来はもう少し穏やかなものだった。このハンバーガー屋の前の通りは駅から劇場をつないでいるため、窓際席で待機している桃ちゃんに会える——ファンでなくとも、リアルJカップと聞けば一度は見てみたくなるものだ。それでも、直接話しかけては迷惑になる、とのことで、普段はガ

ラス一枚隔てた客席からそのお姿を——というか、その巨乳を拝むだけ、ということらしい。

だが、今日は——

「それがさー、カラオケのシフト、ちよつとだけ入ってほしいって言われたんだけどねー」

これまでは店の中から眺めているだけだったようだが、今日は例外ということ——主賓の座る四人席はもとより、両隣に加えて通路を挟んだ向こう側、さらには背後の席に至るまで男子学生がぎっしり詰めかけている。なるほど、うかつに應對してるところなので、普段は窓越し限定なのだろう。

だが、この状況を遠目で見ると……全裸の桃ちゃんより男子の集団として他の客には映るだろう。だが、その中心には全裸の女のコー——これには事件の匂いしかない。が、あまりの不自然さに一周回って平穏なバランスを保っている。……男子たちの熱気を察すると、危ういバランスにも見えるが。

「ちよつとだけでもアウトー、って止められちゃった。やっぱ昼間は難しかったかもー」桃ちゃんは軽い口調でそう言うものの、夜でも難しい気がする。オーダーしたドリンクを持つてくるのが全裸の女のコー——メンズの集団ならともかく、女子——しかも、オバチャン集団だったら激おこでは済まされない。……いや、深夜のノリを考えると、む

しろメンズの集団を相手する方がより危険ではなからうか。

ともかく、全裸で接客しようとしたところ、店の他の人に止められたらしい。常識的な判断だと思うし、むしろ、ちよつとだけ入ってほしいと打診する方がどうかしている。「まー、リハの時間まで控室でのんびりしても良かったんだけどー」

せつかくバイトのために急いで下校してきたにも関わらず中途半端に時間が空いてしまったようだ。それで、この店に立ち寄つたらしい。何故か全裸で。本人は先程から困つたような素振りを見せていたが、普段からファンがこの店でたむろしていたのは知っているはずだ。そこに堂々と入ってきたのだから、むしろ確信犯な気がする。

「今月は全裸生活月間つてことで劇場の許可も下りてるしー」

その一言に、自分を含めた男子たちがソワソワし始めた。『月間』——ならば、彼女はずつとその姿で——？

「ふつふつふー、学校も全裸で登校してるよん。いやー、すごいよね、霞さんの交渉術」
全裸で登校……だと……!? その男子は何て幸せな……ッ!

「あ、ちなみに、うち女子校だから」

その補足情報により、我々も少々落ち着いた。……桃ちゃんが全裸で生活している、という事実は変わりないけれど。

桃ちゃんは卓上のスマホに目を落とすと、コーヒーのカップに蓋をした。どうやら、

そろそろ店を出る時間らしい。それを察すると、桃ちゃんがスマホをスクールバッグにしまっている間に、囲んでいた男子たちも速やかに道を空ける。何とも訓練されたフアンたちだ。

「それじゃー、今日も劇場で……あ」

桃ちゃんは口にしなかった言葉を慌てて飲み込む。そして、言い直した。

「当選した人は、また劇場で会おうね♪」

これに対する男子たちの反応は——あからさまにシヨンポリしている者——苦笑いを浮かべている者——どうやら、誰もがチケットを手にできるわけではないらしい。こんな場所で自分が当選者であると公言するのは落選者にケンカを売る挑発も同然だ。誰もが何も言うことはなく——ただ、ハーメルンの笛吹きに同行する子どもたちのように——ぷりんぷりと揺れる桃ちゃんのお尻に、少し離れてついていく。とりあえず現地まで同行した後、チケットのある者はそのまま中へ、ない者は帰路に就くのだろう。誰もが桃ちゃん目当てであったため、店のフロアは一気に閑散としてしまった。けれど——桃ちゃん、トレイ置きっぱなしだよ……。まあ、いいものを拜ませてもらったし、そのくらいは僕が代わりに片付けておこう。そう思つて手をかけたところ——ん？

下から出てきたのは……？

夜の新歌舞伎町——ただでさえ物騒なところで僕は、さらにとんでもないことをしようとしている……！

夕方のハンバーガー屋でトレーを片付けようと持ち上げたところ、その下から現れたのは一枚の名刺。そして、その裏側には——『今夜25時、全裸で待つてくれたらセフレになつてあげる♡』——そんな怪しい誘いに乗るなんて、我ながらどうかしていると思えない。けれど——桃ちゃん自身あはして全裸で出歩いていたのでから現実味がある。それに、記されていたのは紛れもなく桃ちゃん自身の名刺だったし——ただ、それを拾つて赤の他人が悪戯で書き込んだメッセージだったら、僕はおしまいなのだ。

なのに、こうして……！ 指定された場所が劇場の裏口前、というところがまた信憑性を高めている。待ち合わせ時間まであと一分を切ったところで……僕は、桃ちゃんの名刺の指示通りにいそいそと……。

現着したのは一時間前だが、ちよくちよく外の様子は覗いていた。表通りと比べれば静かとはいえ、そこに人通りがないとはいえない。五分か一〇分に一度は人影があつたし、先程もスーツ姿のサラリーマンが駅の方へと歩いていったばかりだ。

一方、僕が待機しているビルの方は……何なんだろう？ 細く暗い階段は古いマンションのような雰囲気だけれど、何かの事務所のようにでもある。幸い、こちらに人の出

入りはなかった。とはいえ、万が一の際には助けを……呼べる気がしない。もし誰かが住んでいたとしても、下手に騒げばむしろものすごい剣幕で僕の方が暴行を受けそう
だ。

もはや不安しかなく、その先の希望のことも考えられない。なのに、僕は、その姿のまま建物から外に出て——新歌舞伎町の路地裏で全裸直立——何分、いや、何秒耐えられるか、というチキンレースも同然である。僕にできることは、おそらく彼女が出てくるであろう劇場の裏扉を凝視することだけ。

だがそこに……足音……ッ!? 死ぬ! 死ぬ……ッ! すぐさま、せめてマンシヨン内に隠れようとしたところで……相手が、彼女で良かった。そのシルエツトだけで、他の誰とも間違えようがない。ふわつと大きなツインテールに、小さい背丈からはみ出さなばかりの巨乳——その姿をもう一度拝めることを願いながら堪えていたのだから、その姿が現れればすぐにわかる。

そして彼女は言った。カラカラと笑いながら。

「うわ、ホントに全裸で来てる!」

こうして、僕は桃ちゃんからセフレとして認めてもらえたわけだが——もちろん、外で一夜過ごすことは難しいため、僕たちはホテルに向かっている。全裸で。

「ね、ね？ チンチン立ってるってことはあゝ……やっぱ、興奮してるっ？」

桃ちゃん曰く、男は全裸で外を出歩くとどんな気分なのか、とのこと。これまで桃ちゃん自身はいろんなところで脱がされてきたが、男の方は脱ぐことがなかったので、それが気になっていたようだ。

しかし、当の男である僕の方は……こんな状況では思考もまとまらない。終電の過ぎた深夜とはいえ新歌舞伎町ともなれば未だ人々は少なからず行き来している。そんな中、全裸で歩いているのだから、みんなからジロジロと見られているし……こんなの、いつ通報されてもおかしくない。むしろ、堂々としていられる桃ちゃんの肝の座り方がすごいと思う。例え、見られる仕事であるストリップパーだったとしても。

桃ちゃんから話を聞くまで、ストリップパーというのは舞台上で踊りながら脱ぐ仕事だと思っていた。しかし実際は——ショーの一環として、その……本番まで行うようである……だからこそ、劇場の外では自重するようには言われているらしい。が、プライベートまで制限することはできず……だからこそ、このような条件を課したとのことだ。

「男の人って、何かと都合いいウソつくからねー」

桃ちゃんくらいになれば、逆ナンくらいは難しくない。というより、男の方から寄ってくる。だが——仮に、一緒に脱いでくれるなら、と事前に約束しても、男がそれを守るとは限らない。守ってもらえなければただのセフレであって、劇場から自粛要請さ

れている関係そのものだ。それを無下にすることは桃ちゃん自身も望んでおらず……それで、先に脱いでくれるくらいの人なら、と考えたらしい。

「あたしの代わりにトレー片付けてくれてありがとうね♪」

もちろん、お店で置きっぱなしにしたのもわざとだ。そのくらい気の利く男なら、という意味で。けど……お礼と言わんばかりにぎゅつと腕を絡められると……胸が……！ 桃ちゃんの胸はあまりにも大きすぎる……っ！

そんな僕の胸の内は、桃ちゃんの胸くらい大きく膨れ上がっていたらしい。それは、傍から見ても明らかなほど。

「もしかして……おっぱい触りたすぎる？」

桃ちゃんは絡めていた腕を下ろして僕の手を取ると、無造作に自身の胸に手を当てた。僕の手を胸に触らせているといつてもいい。そこはどこまでも柔らかく、ふわりと飲み込まれてしまった。この感触は……あまりにも魅惑的すぎる……っ！

だが、そこまでされてしまったら……！ そもそも、そのために来ているのだし……っ！

そして、桃ちゃんもまた、僕が堪えているものを理解した。

「あ、そんなじゃ先にシとっか」

あまりにあっさり口にするので、僕は少し混乱する。だが、桃ちゃんが僕から一歩

離れてお尻を突き出してきたところで……これは……理解せざるを得ない……!?

とはいえ……え、え？ まさか……ここで……？ まだ人も歩いてるのに……！ そんなところをこの姿で歩いてきている時点でどうかと思うけれど……！

そして、だからこそ……！

「もー、いまさら気にしても遅いつて。ほら、又くもん又かなきやちゃんとお話できなさそうだし」

思えば、今日は驚愕の連続だった。巨乳を見物に来たつもりが相手は全裸で、僕まで全裸で、大通りでも全裸で——もはや、常識の境界がわからなくなってくる。

そして、その一言がトドメとなった。

「あたしたち……セフレでしょ？」

セフレだから当然のこと……僕にはもう、その誘惑に抗えそうになかった——

結局、ホテルに着いてからは本来の目的より……一緒にスマホでゲームをしている間の方が長かったような気がする。

「ふーん、男子もフルチンはさすがに恥ずかしいかー」

それを確認できたことで、桃ちゃんは一先ず満足してくれたようだ。

連絡先も交換して、ゲームのIDも交換して、名実ともに——セックスフレンド——

セックスを伴うフレンド——桃ちゃんの中ではそういう定義になっているらしい。

だから、当然セックス以外のこともする。けれど、ふとゲームから気が逸れると——隣には裸の女のコがいるわけで……！

「……んん……？　そんなじゃ、ちよつとさつき続きやろつか」

桃ちゃんは、はつきりいつてゲームも強い。それも、こちらの様子を逐一窺いながらで。そのため、僕の変化はしつかりと視認されており、ひと区切りついたところで彼女は当然のようにスマホを置く。こつちがメインでしょ？　と言いたげに。そして、こちらの方ににじり寄り……大きな胸を押し付けるように……！　そして、そんな柔らかさ
に抱きしめられては、僕の方も抑えきれず……！

しかし。

「ね、今度は上になってよ。舞台じゃあたし、上ばつかだからさ」

本来、桃ちゃんとこのようなことをするためには高額なファンクラブに入会して、さらに抽選に当たらなければならぬ。けれど、僕はこうして桃ちゃんとセックスフレンド——友達になることができた。きつと、これからもこうしてこうして劇場の外で会うこともできるだろう。

だとしても……僕は、ファンクラブ会員としても桃ちゃんを支えたい——そう思えた。桃ちゃんには、ずっとアイドルとして輝いてほしいから。

水裏理々

二十四時間営業だからといって油断してはならない。終電を逃し、だったら、とファミレスで形ばかりの夜食を摂り、そのまま始発まで居座ろうと目論んでドリンクバーまで注文したのだが――

『当店は二時間制となっております』

言い忘れだか何だかしらんけど、後出しはちよつとずるくないか？　ともかく、結果として深夜三時に新宿の街に放り出された俺は途方に暮れるしかなかった。

もちろん、付近にはホテルもあれば、漫喫もある。だが、始発まであと二時間足らずだ。そんな隙間時間のためにこれ以上の出費は控えたい。

とはいえ――たかが二時間、されど二時間。隙間と呼ぶにはいささか広すぎた。日の出前の夜風は涼しいが、日本の夏らしく湿度は高い。こうして外をブラついているだけで俺の肌にまとわりつく不快指数はじわじわと上昇していく。

たまたま見かけたコンビニのイトインコーナーは閉鎖されているし、雑誌も当然紐で対策済み。店内を二周三周と巡ってみたものの、こちららファミレスでしつかり飲み食いしてきた直後だ。追い夜食という気分にもなれない。

だが、幸いにもこの街には無数のコンビニが存在する。一軒一軒の滞在時間は短くとも、つないでいけば二時間くらい稼げないか？ などと企んでみるも……三軒四軒と立ち寄っているとさすがに飽きてくる。これだけ建ち並んでいるのに、そのラインナップに変化がない。おいおいどうした自由競争。そんなことじゃ商売敵に駆逐されるぞ……なんて心配がないくらいに、この街の来客は潤沢なのだろう。

蒸した夜からの逃避行という目的はあるとはいえ、早くも厳しくなってきた感はない。あまり考えなしに徘徊していると駅からも遠くなるし。コンビニ以外に二十四時間やっている店舗はないものか。ただし、飲食店は除く。もう一度そこへ入ろうものなら、敗北感が半端ない。

そんなことを考えながら五軒目のコンビニを出て、次のコンビニを探して右を向き、左を向き、上を向く。すると……あ……スポーツジム、か……。二十四時間の——ってコレだ！

ジムなら俺もひとつ会員になっている。残念ながら見上げた店舗とは別のチェーンだが、ここは新宿である。きつとありとあらゆるフランチャイズが集っていることだろう。早速スマホで調べてみると……うむ、あった。あるにはあった、が——おいおい、新宿からただ離れてるんだよ。というか、最寄り駅どこだよ。徒歩十五分のところに……かろうじて初台。この辺の地価が高いのはわかるけど、もう少し利便性にも配慮し

てくれ。

言いたいことは色々あるけれど、涼しく過ごせるのであれば贅沢は言えない。ここまで運良くそつち方向に歩いてきたこともあり、徒歩五分でジムへ到着。

持ち歩いてきたセキユリティキーで扉を開けると……ああ……涼しい……！ 汗ばんだ身体から続々と熱気が吸い上げられていく。そういえば、今日は夜食という形で余計なカロリーを溜め込んでしまったし、ここで健全な汗を流すのも悪くないだろう。

こんな勝手の悪い立地だけに他の客は誰もいない。トレーニングウェアまでは持ち合わせていないので……とりあえず、ズボンやナンヤくらいは脱いで、シャツとパンツ姿に。これならギリギリウェアに見えなくもないだろう。

それじゃ、ストレッチでも……と、マットスペースを覗き込んでみたところ――

「……あ」

どうやら、無人ではなかったらしい。しかも、そこにいたのはよりもよつて女性客……！ しかし、悲鳴は上がらない。むしろ彼女は、バツが悪そうに目を逸らす。大きく足を開いたまま。女性の股の間の割れ目を――毛までしつかりと開かしたまま――

あまりにも衝撃的だったので思わずそちらばかりに目を奪われていたが、上の方――胸の方もしつかりと――乳首まで、しつかりと――左右へのストレッチの最中だったのか、逸らされた肋骨の上にたゆんと湛えられている。

こ、これはどういう状況なんだ……？ 思わず放心して——それでも彼女から目が離せず——ズルンという下腹部の感触で我に返る。俺自身は何ひとつ、指一本動かさなかつた。けれど、勝手に動いた場所がある。持ち主の意思とは無関係に——ビクン、ビクン、ズルン、のような感じで。大人しくしていてくれれば大人しいのだが、ひとたび猛ると——重力に対して水平に力強く形を変えたそれは、器用に穴から這い出して——

「……………あららら♪」

状況に反して、女性の顔が少し綻ぶ。客観的に見て……その本能的な動きは馬鹿馬鹿しくも、ちよつと面白かつたかもしれない。ただし、異性を見慣れているのなら、だが。その表情で、本当に唐突ではあるのだが——俺の緊張が解れたのか、ようやく目を見て話せるようになったからか。それで気づく。さすがに。

「り……りりちゃん……？」

タレントの……みずうら水裏理々ちゃん……じゃないか……？ ちよつと前までは深夜

番組の常連で、よくテレビにも出演していて……他人の空似だったら申し訳ないのだけれど。だが、その一言で彼女は……照れながら軽く会釈をする。股割りの姿勢のまま。

「え、えーと……いまはオフでして……」

「あつ、失礼しました」

隠すものも隠さず、俺は会釈を返すが。

「あ、いえいえつ、話しかけるなって意味じゃなくて……」

リリちゃん……いや、リリさんはマットからゆつくりと立ち上がる。その両手はいまさら隠すべきか、どうしたものかと悩ましげに——右手は胸と胸の間に、左手はおへソの少し下辺りに。そんなポジションニングをされては、余計に目がいってしまうのだが……っ！

そんな視線に臆することなく……むしろ、俺の方もリリさんからの視線を感じている。仕舞うに仕舞えない、俺のソコに。多分、リリさんも同じ気持ちなのだろう。

気不味さの中でお互い何も言い出せないまま少しの間見つめ合っていたが——目と目ではなく、目と恥部を、だが——リリさんは一歩、また一歩と近寄り——指先で軽く、摘むように俺を握り——

「このことは、秘密にしておいてほしいんですけど……」

当然、この場合は交換条件が付加されることになる。もし、ここでのことを黙っていてくれるのなら——

まさか、このような形でトレーニングをすることになるうとは。ジムのシャワールームはひとり用ではあるものの、俺たちはふたりで汗を流している。

「す、すいません……。リリ、明るくなる前に帰らなきゃなので……」

「い、いえ……。こちらこそタオルをお借りする立場ですから……」

「そもそも、汗を掻くことになったのはリリの所為ですし……。えへへ♡」

照れてはにかむリリさんは、画面を通して見るよりずっと可愛らしい。そんなリリさんの湯浴み姿をこんな間近で見ることができるとは……。間違いなく最初で最後のことだろう。

リリさんが予備のタオルを持っているというので、それを借りれば俺もシャワーを浴びられる……。とはいえ、どうやらリリさんはそろそろ帰らなくてはならない、ということとで、ならば一緒に、と誘われてしまった。

シャワールームは男女別にひとつずつあるのだが、話したいこともあるので……。と。すでにすっかり裸のつき合いをしてきたばかりなので、むしろ俺は喜んで承諾した。

さて、何故リリさんが帰りを急いでいるかと言うと――

「実はリリ、劇場の企画で全裸生活、というものに挑戦中ですよ……」

一ヶ月間全裸で生活――しかも、できるだけ日常通りに――女性にそんな無茶苦茶な……。とも思っただが、テレビに出ていた頃のリリさんもかなり無茶な企画をやらされていたので、少し驚いた後、何となく納得もできた。外に人が増えてくる前に戻っておきたい、とか、このジムなら深夜は誰もいないので、とか、そういう気の使い方にも妙な説

得力がある。

それよりも、俺はそちらについて尋ねたい。

「劇場……というのは……？」

少し前、リリさんは突如テレビから姿を消した。どうやら業界の闇に触れたらしく、どの番組でもその件について一切触れられていない。なので結局謎のままだったが、その『劇場』というのがいまのリリさんの活動場所なのだろう。

確かにかつての俺は、リリさんがテレビから消えたことに関して別段興味はなかった。けれど……いまとなってはそのままじゃいられない。リリさんにすっかり夢中になっている。その劇場とやらで応援したいほどに。そして、その劇場とは――

「えーとですね、リリ、TRK26というアイドルグループに所属しております、その劇場で……」

そういえば、リリさんは昔アイドルをしていたはずだ。それを思い出したところで、リリさんはすかさず訂正を加える。

「あつ、アイドルグループといってもですねっ、ストリップパーによるアイドル、といいますか……」

慌てて言い直す必要のあるところだったのかはわからないが……とにかく、リリさん的には重要なことのようにだ。

「り、リリはこんなですけれど……他のみんなは若くて可愛いコばかりですから……」

そんなことを言う目の前の可愛らしい女のコは、肩をすぼめてシユンとする。どうやら歳の差を気にしているらしい。確かに、テレビでのリリさんは若作りをイジられるキャラで笑いを取っており、実際、こうして裸になると……アイドルグループとして一緒にステージに上がっているのなら、リリさん自身が最もよくわかつているのだろう。それこそ、肌身にしみる形で。

けれど、それでも。

「リリさんは、いまでも綺麗ですよ」

それは、俺の身体が証明している。改めて見下ろす彼女の胸は……いまでもしつかりと張りを保っており、ますます抱きしめたいくらいだ。

すると——その胸の向こう側で——再びきゅつと俺に指が添えられたのを感じる。

「ほ、ホントは、こういうのは……ファンクラブ会員への特別サービスで……だから、劇場の外では、あまりシないように、と劇場からも言われているんですけど……」

モジモジしながら頬を染めているのは、シャワーのお湯に当てられたから——だけではないだろう。

「あ、あと一回分くらいなら時間もありませんし、も、もし、秘密にしていってくれるのなら

……」

リリさんが口止めしたがる理由はその内容というより、劇場の規則によるものなのだろう。だから俺は……リリさんのファンクラブに入会することを決めていた。今度はちゃんと、正規の手続きを踏んでリリさんと抱き合うために。

とはいえ、それはそれとして……いまは最後に、もう一度だけリリさんの誘いに甘えさせてほしい。

崎乃平花子

新歌舞伎町の裏路地にひっそりと佇む居酒屋『ゆるり』——俺は以前、その店で大失態をやらかしたことがある。閉店間際で酔い潰れて……気づいたら店の前で眠っていたらしい。警官に声をかけられて目を覚ましたが、もう少し遅れていたら良からぬ連中に身ぐるみを剥がされていたことだろう。

ただ——失態ばかりでなく、ほのかな幸福感の欠片も俺の中に残されている。その店で働いている——崎乃平さきのひら、という名前だったか——落ち着いた雰囲気の下りに肌艶が良く、愛想もあり、空いているときは隣に座って話を聞いてくれることもあった。キャバクラのような露骨さがないからこそ過ごせる穏やかな時間——俺は崎乃平さん目当てでその店に通っていると書いても過言ではない。

その崎乃平さんがあの日、俺の前で——両胸を——？ 酷く酩酊していたこともあり、もしかすると自分の妄想だったのかもしれない。けれど——その柔らかさ、それに——舌先の感触——それらはあまりにもはつきりと残されている。恥ずかしさと共に、安らぎを伴って。

決して真実を確かめたいわけではない。ただ、いつもの癒やしを求めて——今夜も俺

は『ゆるり』へと足を向けている。上司の采配は極めて雑で、今日も二十二時まで残されてしまった。到着はラストオーダーギリギリになるだろう。けれど、悪いことばかりではない。遅ければ遅いほど終電の都合で帰路に就く者から減っていく。つまり、崎乃平さんと話せるチャンスも増えるということだ。

実際、街を往く俺の目に映るのは店から出てきたり駅へと向かうべくすれ違う人ばかり。俺だつてこのくらしいの時間に帰れるくらしいの仕事をしていたいものだが———すでに出来上がっているほろ酔いの帰宅者たちを尻目に、俺は暗い脇道へと入っていく。

そんな小さな雑踏の中腹にその店はあつた。随分構えの古い建物で、自動ドアさえない。ガヤガヤと漏れ聞こえる喧騒に温もりを感じつつ、俺はいつもの引き戸を開いた。そこにあるのはいつもの賑やかさ———だと思つていたのだが———

「あんらあら、いらつしやい。今日も遅くまでお仕事お疲れせん」

出迎えてくれたのは朗らかな笑顔の崎乃平さん———地方から出てきたばかりらしく、朴訥とした訛り口調———そののんびりした笑顔は都会のアスファルトに咲いたタンポポのような穏やかさを感じさせてくれる。

だが、今日は———いつもと違つた。その装いは古風な店内によく馴染む割烹和装ではなく———すべてが肌色で———どうやら着痩せするタイプなのか、普段はそこまで意識しなかつた両胸は、自分が思つていた以上に豊満だつたらしい。それが、俺の目の前に、ふ

たつとも、その頂きまで隠すことなく——そのぶつくりとしたところを染める色合いには少し年季を感じる。だが、そのふた房を支えるお腹はすつきりしており、さらにその下——ふわつとした毛の塊もまた、整えられているのか綺麗な楕円の形をしている。

俺の前には、生まれたままの崎乃平さんが——だが、彼女が立っているのはいつもの居酒屋——崎乃平さんの様子も——笑顔も——何も変わらない。まるで、自分の目がおかしくなつてしまったような。彼女は本当に崎乃平さんなのか……？　だが、紛れもなく彼女である。左胸に付けられた名札には、紛れもなく『崎乃平』——安全ピンではなく、洗濯バサミのようなクリップで——右の乳首にぶら下がつて——！

「ほんじゃあ、こちらへどおぞお」

崎乃平さんの一声で俺は我に返る。彼女は本当に何も変わらず、カウンター席の椅子を引いてくれた。ゆえに俺はそこに座る。挙動不審に目を泳がせながら、訊きたいことは何も訊けずに。何故そんな恰好なのか——いや、一体何が起きているのか——そんな疑問を押し殺し、ビールに焼き鳥、天ぷらに枝豆——まるで現実逃避するかのようにつまみを食らい、酒を煽る。

女将さんもいつも通りだし、店内は元々騒がしいということ差し引いても——誰も動揺している様子はない。いつもなら崎乃平さんに声をかけて注文したいところだが、ふわりふわりと踊る胸を視界に差し出されては、つい厨房の女将さんの方に頼んでしま

う。

確認する勇氣もなく、勢いよく飲み食いした所為で腹も満たされてしまった。改めて思えば、不思議なひと時であったとはいえ、決して悪いものではない。酔いの中で見た幸せな幻想——それでいいんだ——そう自分を納得させようとしていたのに——やはり、俺が見ていたものは現実だったようだ。

「おばちゃん、歳のわりにいいカラダしてんじゃん」

酔ったオヤジが崎乃平さんにまとわりついて……！ 従業員として笑顔でいなそうとはしているが、酔っ払いというのは夕チが悪い。さすがに女性の胸に向けて伸ばされていく男の手を見逃すことはできず——俺は見かねて席を立つ。店の誰もが止めないのなら俺が——！

しかし——

「あんならアア？ お客そんなもしかして——」

——あたすと子作りしたいべか？

崎乃平さんの甘い言葉が俺の両足を硬直させる。立ち上がったばかりの椅子の前で、俺はふたりの光景を呆然と眺めることしかできなかつた。男を拒むどころか自らスラックスに指を這わせ、ファスナーを下ろしていく崎乃平さん——それで、俺は本能的に察したのだろう。ここから先は、見たくもないものを見ることになる、と。

癒やしを求めて来てみれば、逆に絶望を味わわされることになるとは。俺だって、崎乃平さんに純情を期待していたわけではない。酸いも甘いもすべてを受け入れるような包容力——ならば、俺の厭らしい視線程度、動じることはなかっただろう。

この気持ちは——一体何なんだろうな……。少なくとも、他の男に犯されている崎乃平さんの姿は見たくない。だが——

思わず脱力して、上げたばかりの腰をそのまま下ろす。もうとつとと会計を済ませて帰りたいところだが、疲労に加えて酔いもあるため再び立ち上がる気力さえ湧かない。

俺は、なるべく何も考えないようにしてぐったりと項垂れている。しかし、店内で痴れごとが始まる様子はない。ただ——ゴトゴト、と隣の椅子が動く音が聞こえてきた。それで俺は横を向く。そこにはいつもの崎乃平さんの微笑みがあった。そう、微笑みはいつもの崎乃平さんと変わらない。けれど——やはり何も着ていなくて——裸の胸の膨らみがそこにあり——見たい——だが、見て良いものか——迷った末に、俺はついグラスに目を落とす。

そこに再び——ゴトゴト、ゴトゴト——崎乃平さんが俺の愚痴を聞いてくれるとき、いつもこうやって席を寄せてくれていた。けれども今日は——まるで椅子を連結するかのようにピツタリと。スーツ越しても女性の腕の柔らかさが感じられるようだ。そんな俺たちの後ろを、さつき崎乃平さんに絡んでいたオヤジの一团が通り過ぎていく。

「勘弁してくださいよお？ 仮にも部長なんですからねえ？」

「わーってるって、冗談だよ冗談」

うお……背中を感じるジトつとした視線……！ やっぱ未練アリアリじゃねーか。部下に窘められてこの場は思い留まったようだけど。しかし、俺には思い留まらせるような関係性の相手はいない。

「つれないべなあ。せつかく子種もらえると思ったんに」

その露骨な言葉遣いに、俺は身を固くする。それは、さっきの様子を見ているから。崎乃平さんは同じように、俺のスラックスの——どうしようもなく山なりになったところに指先を滑らせてくる。

「遠慮はいらんよお？ あたす、適齢期だべからなあ」

——思えば——どこから夢だったのだろう。先程、崎乃平さんが他の男に抱かれそうになったときはにわかには現実へと引き戻された心持ちだった。けれど、いまは再び夢の中にいる。

だから、俺は……俺は……！

結局俺は、崎乃平さんが他の男とまぐわうのを阻止することはできなかった。俺が不甲斐ないばかりに、いまはお座敷席の方で艶めかしい歓びの声を上げている。だが——

彼女はすごすぎた……！　すべてを包み込む柔らかさと、すべてを吸い尽くす力強さで——不安も、悲しみも、すべて洗われてしまったらしい。

さつき、俺の胸の中で崎乃平さんが唇を触れ合わせながら教えてくれた。この街で様々な仕事を掛け持ちしている彼女だが、その本職はストリッパー——それも、サービスの一環として。『このようなこと』まで行おうという——彼女が所属する劇場の企画で、崎乃平さんは一ヶ月全裸で生活しなくてはならないらしい。信じられないような話だが、実際こここの女将さんから咎められることもなかったので本気なのだろう。

サービスの一環として『そのようなこと』——もちろん、崎乃平さんの勤めるこの居酒屋に來れば、特別な料金を払うことなく再びチャンスはあるかもしれない。だとしても、本来の姿はストリッパーであり——だから、これからは劇場の客席から崎乃平さんを応援したい。これまで、この店で俺を励ましてくれた崎乃平さんを。

ぐったりしている俺の脇を、最後の団体客が帰っていく。そろそろ終電も近いのだろう。かくいいう俺の終電はとっくに発ってしまった。しかし……まあ、この街には漫喫でも何でもあるだろう。前回と違って意識ははつきりしているから寝潰れることはなさそう。しかし、この疲労感は何ともしがたい。

だが、崎乃平さんは——いまなおハツラツとしているようだ。

「ふふ、お疲れせん♪」

ふたりきりとなったカウンター席——先程と同じく崎乃平さんが椅子を寄せる。元々艶つぽかった肌にはなお精気が漲り、いつにも増して美しい。

酒の勢いゆえの無礼講というか——仕舞われることなくしなびていたモノが——もう、すべてやりきったと思っていたのに——崎乃平さんに寄り添われたことで、新たな力が吹き込まれてゆく。

「……………あんなら？」

俺の変化を目の当たりにして嬉しそうに微笑む崎乃平さん。そして、遠慮なく差し伸ばされる指先を受け入れるべく俺は胸を高鳴らせるが——

「……………んツ!？」

ふ、袋の方だと……………？ 少し意表を突かれて変な声が出てしまったが……………崎乃平さんは探るように、ふたつの玉をコリコリと握り回している。そして、俺に顔を近づけて。

「まだ、出るべか？」

そんなことを言われたら……………俺は……………俺は……………ツ!

「は……………はいっ!」

実のところ、ご希望に応えられるかはわからない。けれど……………応えずにはいられない……………ツ!

だが、俺の熱意よりも花子さんの熱の方が遥かに強く——息を弾ませながら席を立つ

と、俺の膝にゆっくりと跨る。股の下で、男女を向き合わせたまま。

「んじゃあ……最後まで頼むべよ♡」

これはもう、ホテルを探す気力が残されるかどうかもわからない。それでも俺は——
崎乃平さんを抱きしめずにはいられなかった。

天菊まこ

たとえ警官であつても積極的に犯罪行為に首を突つ込みたいわけではない。何事もなく、平和であればそれでいいのだ。それこそ、道を聞かれたり、拾得物を引き渡したり——そんな毎日が送ればそれでいい。

だが——まさかこんな交番に配属されることにならうとは。バス通りの向こう側は新歌舞伎町——グレーな集団がたむろする東京一危険な街である。そこばかりは日本の常識が通用しない——新歌舞伎町には新歌舞伎町のルールがある——詳しくは教えてもらえなかつたが——ただ、不用意に首を突つ込むな、とだけ。

そこまで言うならバリケードでも張つて封鎖してもらいたいのが情動的なところだが、そもいかな。実際、否応なしに騒乱の切れ端が街の外まではみ出してくる。それに、外れの方で騒動でも起きれば、最寄りがここだから、という理由でこの交番に通報が来たり。勘弁してくれ。歌舞伎町のこと、歌舞伎町担当の交番で責任を持つて引き取つてもらいたいところなのだが。

そんな日常の中、今日は何もなければ——などと祈るほど弱くもない。まあ、起きるだろう。いつも起きるから。朝はいい。せいぜい物が落ちていたとか酔つ払いが寝て

いたとか、トラブルといってもその程度の穏やかなものだ。もうすぐ昼のパトロールの時間だが、そこでも大したことは起きないだろう。問題は夜だ。気の立った連中がこちらにまで火の粉を振り撒いてくる。困ったものだ。

しかし、それを今日は前倒しにするように――

「あ、あのー……すいませーん」

サイドテールの女のコがひよいと交番を覗き込んでくる。

だが――いや、待て、ちよつと待て！

「ど、どうされたんですか!? 何があつたんですか、一体!？」

場所が場所である。ここは新歌舞伎町の隣接地――ヤバイ連中に襲われたところを辛うじて逃げてきたかのような事件の匂いしかししないのだが――

「いえ、そのー……スマホ、届いてませんか? ネコのストラップが付いてて……」

ス、スマホ……? それどころではないように見えるのだが。とにかく、彼女にとつていまはそれが一番重要なだろう。

実際、それならつきつき届けられていた。幸い女のコも落ち着いているし、とりあえず見せるだけ見せてみよう。

「あつ、それです! それ!」

女のコの顔が途端に明るくなった。加えて、一応番号は合っていたので落とした本人

でほぼ間違いないだろう。だが、こちらにも手続きというものがある。

「えっ!? 身分証!」

言われて身体をパタパタと触ってはいるが、何も持っていないのは明らかだ。

「うー……ソレ返してくれないと困るんですけど……」

しかし、手続きとは必要だからあるものだ。こちらとしても、万が一別人に渡してしまつたとあつては始末書モノである。

「……はあ、多分カバンには入つてると思うんだけど……『劇場』まで取りに帰るしかないかなあ」

ガツカリと項垂れながら踵を返す女のこ。だがしかし。

「ちよつ、ちよつと待つてください!」

いま、劇場……と?

「どこまで戻るつもりですか!」

確証はない。ただ、不安だっただけ。

「だから……劇場まで。あ、新歌舞伎町のだからそんなに時間は——」

昼間はまだ安全とはいえ、何かトラブルがあつたのは確かだ。そんな女のこひとりであの街を歩かせるわけにはいかない。

「わ、私も、ちよつとパトロールの時間ですので……」

一応新歌舞伎町は巡回エリアに含まれている。自ら足を踏み入れたことはないが。

このコを送っていくことに、もちろん下心は一切ない。ただ——彼女をひとりで行かせては何かが起る——そんな気がしたのだった。

一先ず、交番で必要書類に記入だけはしてもらった。拾得物の返却に必要なのは残すところ身分証だけ。それでも、女のコは改めて自己紹介してくれる。

「あたし、あまぎく天菊まこっ、職業は……アイドル！」

「は、はあ……」

確かに、書類にもそのようなことが書いてあったが……。もちろん、可愛くないわけではない。けれど、アイドル的美少女というよりマスコットの愛嬌を感じるというか……。

ともかく、私は天菊さんに案内されてその劇場とやらに向かっている。通行人たちの注目を浴びているのは、彼女がアイドルだから、というわけではないだろう。

「それで、どのような番組に出演されているのでしょうか」

「う」

天菊さんの笑顔が、上からガンと潰されたように歪む。こういうところも愛嬌があつて可愛い。本人も意外と慣れているのか、すぐに立ち直ってくれた。

「あ……アイドルだからって、みんながみんなテレビで活躍してると思ったら大間違いなんだからねっ」

「それは失礼しました」

では、普段どんな仕事をしているのかというと。

「色んなイベントに出向したり、商品を宣伝したり……」

「では、劇場というのは……」

「……で、天菊さんの表情が輝く。」

「そこでは可愛い衣装を着て、唄って踊って！」

「アイドルらしいですね」

天菊さんにとって、それが一番好きな仕事なのだろう。そして、彼女はトントんとステップを踏み、嬉しそうに足を止めて振り向いた。

「……！　……があたしの劇場！」

確かに劇場ではあるけれど——詳しいことは私も知らない。けれど、入口前に掲げられたポスター——その雰囲気だけで何となく察せられる。写っている女優は公道に面しているため露出は合法の範囲と思われる。だが、しかし……

天菊さんからそのような雰囲気をまったく感じなかっただけに、意表を突かれて面食らってしまったところは否めない。だが、思いつきり顔に出してしまったのはいささか

失礼だったか。

「う、ま、まあ……うん、一応、そーいう劇場……ですけどー……?」

天菊さんは胸の下で恥ずかしそうに指を捏ね回していたが。

「で、でもっ! 可愛い衣装を着て唄って踊るのはホントだから! 何なら観てくっ!」

「いえ、仕事中ですから」

「こうまで真摯に主張しているのだし、嘘ではないのだろう。とはいえ、この雰囲気は明らかに……。」

「ま、まあ……唄って踊りながら……可愛い衣装は脱いじやうんだけど……」

おそらく、それは全裸になるまで。ストリップ劇場——二〇世紀に流行っていた風俗である。何十年前前に性産業に対する締め付けが強くなった際に滅んだものと思っていたが、こうして生き残っていたらしい。

つまり、天菊さんはアイドルという名のストリップパー——

「ストリップパーだけどアイドルだからっ!」

そこは譲れないところらしい。

「ストリップアイドル・TRK26! 知らないの!」

「すみません」

新歌舞伎町とはできるだけ距離を置きたかったから。

「はあ……少なくとも新歌舞伎町ではケッコウ有名になったと思っただけだなー。
『あえる！ ヤれる!!』がコンセプトのアイドルユニットで……」

「ヤれる!?!」

それはアイドルといえどもファンサービスの枠を超えているのでは!?

「あつ、あつ、ヤれるっていつても……!」

さ、さすがに……それはアイドルとしてマズイよな……。

「……ふあ、ファンクラブに入会してくれた人限定のサービスだから……」

結局、ヤれることには違いないらしい。

これには気不味い空気が流れる。だが、少なくとも天菊さん自身は納得してこの仕事に就いているようだ。

「いつ、いまはそーいう時代なのっ！ アイドルだって女のゴであつて……ファンだつて結局推しとやりたいんでしょ!?! その夢を叶えるためのアイドルユニットであつて……!」

「わかりました！ わかりましたから……!」

新歌舞伎町といえども大通りである。大声でやるだの何だのと議論すべきではない。

「と、とにかく……一度ステージを観てもらえばわかるから。ちゃんと可愛い衣装を着て唄って踊って……い、衣装は脱いじゃうけど、それでも唄って踊って……!」

「で、ですから、いまは仕事ですので」

「ずつと仕事申つてわけでもないんですよ!? ちよつと待つててー!」

天菊さんは建物の中へと駆け込んでいく。どうやらメインフロアは二階にあるらしく、入り口は上り階段と直結していた。転ばないかと心配だったが……天菊さんは数分で無事に戻ってくる。

「はいコレ! あたしのサイン入りブロマイド!」

そこに写っていたのは……ストリップパー……であることは確かにわかった。そして、紛れもなく渡してくれた本人であることも。だが、背景がステージでなければ着替え途中と思ってしまったかもしれない。

このようなものを押し付けられると、こちらとしても困ってしまうのだが——どうやらこれはただの営業資料ではないようだ。

「日付も入れてるから、受付で見せてね。一回限りファンクラブ特典ももらえるから」

どうやら特別な意味があるようなので突き返すのも角が立つ。何より、あまり長く外に出しておくような被写体でもないのです、私はすぐポケットに仕舞い込んだ。そして。

「身分証は……?」

少し時間が止まった後。

「むぎやーつ、忘れてたー!」

てつきり身分証を取りに行ったと思つていただけれど。そして、今度の天菊さんは階段でちよつと躓いたが、幸い転倒することはなかった。

天菊さん、二度目の帰還。今度こそ身分証を確認できたので——返却手続きはこれで完了である。

「あー良かったー。ホント、親切にありがとうございましたっ」

両手で恭しくスマホを握つたまま深々と頭を下げられると、こちらとしてもつい頭を下げてしまう。

「けど、誤解されたままつてのはイヤだから……絶対ステージ観に来てよねっ！」

そう言つて建物へと駆け込んでいく天菊さんはやはりどこか危なっかしい。三度目ともなると——そんな予感はあるがあつたが、天菊さんは無事階段を上りきつたようだ。いや、普通は躓いたりはしないのだけど。階段の上り下りだけでハラハラさせる人も珍しい。だからこそ——やはり私は、彼女のことが気になっているのだろう。

だが……今夜は仕事があるからさすがに行けない。とはいえ、彼女の出演は今日だけではないのだろう。TRK26の天菊まこさん——危ういからこそ見守りたくなる。そんな彼女がこの劇場でどんなステージを魅せてくれるのか——警察官だからといつてこのような場所に足を運んではならない、という決まりはない。ホームページの方でスケジュールを確認して、今度予定が合うときに来てみよう。

……つて……ハッ!? あんな堂々と大通りを全裸で出歩くなんて公然わいせつド真ん中じゃないか! なのに、つい空気に飲まれて普通に接していたなんて……。こまでくると、自分の見間違ひさえ疑いたくなる。だが……可愛らしく控えめな胸——綺麗な乳輪とちよこんと突き出した乳首——下の毛はふわつとして、それでいて少しだけ上を向いていて——仕舞ったばかりのブロマイドをこっそり取り出してみるも——さつきまで見ていた姿がそのまま写し込まれている。にも関わらず、注意どころか服を着せてあげるといふ発想にさえ至らなかつたとは——もしかすると、それもアイドルという職業の為せる業……なのかもしれない。

そもそも地域が地域だけに、てつきり何か事件に巻き込まれて身ぐるみ剥がされたため助けを求めて交番に駆け込んできたと信じて疑わなかつたのだが……いや、普通に考えてそうだろう、うん。いくらストリッパーだからといって、あんな平然と裸で振る舞えるはずがない。

だが……う、うーん……自分でもよくわからなくなってきたが……少なくともそちらでの通報は受けていないし、この街はこの街ならではのルールで動いているそうだし……あとのことはそつちに任せよう。そして、もしかまた天菊さんと会う機会があつたらそのとき改めて尋ねてみたい。本当に、何の事件性もなかつたのかと。それまで、この件は捜査中ということにしておこう。

檜しとれ2

夏休み限定のメイド喫茶——それが行楽地などならまだわかるが、よりにもよって新歌舞伎町とは。喫茶『歌舞伎館』——この街で『新』を付けずに歌舞伎町を名乗っている店舗は『歌舞伎町クライシス』——性産業に対する行きすぎた締付けによって、この街は一度減んでいる——その前から続く老舗である場合が多い。その喫茶店も例外ではなく、だからこそ、古くからのコネクションを駆使して生き残ってきたのだろう。

さて、そもそも俺はメイドにとりわけ執着があるわけではない。ただ、友人との飲み会に来たものの早く着きすぎてしまい、どこかで時間を潰そうと思つたところ——『新歌舞伎町+喫茶店』でググったらここが出てきただけだ。そりゃ、歌舞伎館なんて名前なら上位に来るだろう。期間限定のイベントをしていればなおさらだ。

何かと物騒な街だけに、妙な安売りをしているところより広く話題になつている店の方が安心だろう。というところで、検索第一位の歌舞伎館へと俺はやつてきた。メイド喫茶といえば、入店時の挨拶として『お帰りなさいませご主人さま』とか言われるものと思つていたが。

「いらっしゃいませ」

……普通だった。一応女性店員はメイド服ではあるが……いや、それだつて特別なのか？ 見れば、店の内装はシックで年季が深い。普段の制服を知らないが、案外メイド服っぽかつたんじゃないか？ だとすると俺は、ヘッドドレスをかぶつただけの薄っぺらい宣伝にまんまとやられてしまったことになる。だが、それもまた一興か。

案内されたボックス席——メニューにも別段メイドらしいものはない。オムライスを頼んだら恒例のおまじないみたいなのをかけてくれたりするのだろうか。してもらつても仕方ないが。

他の客の様子をさり気なく見回すと……俺がいうのも何だが、誰もがどことなく垢抜けていない。男率が高いのは街の性質によるものだろうが、もう少しこう……シンカプらしい装いというものがあつたものがある。そのうえ、この雰囲気には馴染めていないのか、あからさまにソワソワしている。いや、堂々とした黒服だらけでも物騒なだけだし、こつちの方が遥かにマシか。

注文はタッチパネルにて。この街は特に自動化が進んでいて聞いている。色々と事情はあるのだろうか……機械は嘘をつかない、ということなのだろう。あらゆる意味で。

俺が頼んだのはホットコーヒー。アイスだと氷が溶けて薄まってしまうので、長居するには不向きといえる。外は暑いの中は涼しい。チビチビやりながら集合までの一時

間をこの一杯で乗り切ろう。

ということ、当然注文の品を急ぐ理由はない。むしろ、忘れてくれていても構わない。その間、店内を眺めながら今夜の話のネタでも見繕っておこう。新歌舞伎町に突如現れた秋葉原のような空間——何かひと悶着あつてもおかしくない。

すると——ざわつ——店内の空気が明らかに変わった。何かと気にはなるが、あからさまにギョロつくのも格好が悪い。ということ、俺は動じない素振りを見せつつも——首を捻る必要のない範囲で様子を窺い——すると、注文の品がやってきた。

「お、お待ちせしました……ホットコーヒーでございます……」

そう言つてテーブルの上にカップを置くために軽く前屈みになつただけで緩やかに形を変えるウエイトレスメイドさんの胸——つて、おいおいおい……マジか……!?! 後方から近づいてきていきなりこれは……さすがに度肝を抜かれたぞ。何しろ……メイドさんが……おっぱい丸出し……!? スカートも……それどころかパンツさえ穿いておらず……下の毛も、丸出しで……! メイド服を着てなきやメイドだつてわからないだろ! という無粋なツツコミは必要ない。むしろ、メイドに関心のない俺にはこつちの方が大歓迎だ。

「ガン見したいのを堪えつつ——あまり堪えられていないかもしれないが——そんな不審な俺に、メイドさんは小さく一言、申し訳なきように。」

「いや、このことは、他言無用でお願いします……」

さつき見た店のサイトにも載っていないなかったし、この催しは非公式かつ極秘なのだろう。

引き返して戻っていくメイドさんの後ろ姿も……いや、ジロジロ見るものではないが、一応確認という意味で。ソファ席から身を乗り出してほんのりと覗き見てみると——プリンプリンと揺れるお尻——ま……マジか……。マジで……裸エプロンどころか……全裸接客……！

俺は慌ててスマホで店舗のサイトを再確認してみる。確かに、期間限定メイド喫茶、とは書いてあつて……営業時間の変更……メニューの変更……イベント価格……う、うん……書いてない……あんなメイドさんがいるなんて……！

だが、どうやらこの連中はあらかじめ知っていたようだ。これまでゆったりしていた時間が一気に加速していく。止まることなく店内を行き来する着衣のメイド——そして、そんな中にひとりだけ全裸のメイド——！みんなが一斉に注文しているのだろう。どちらのメイドが来るかは運次第だが、誰かのテーブルに向かってくれれば……というか、フロアにさえ出ていてくれれば構わない。

しかし……おそらくみんな注文はホットコーヒー——しかも、百円引きのおかわり注文。店側は利益が出ているのかいないのか。無駄に忙しくしてしまい——それでも最

後の一線、直接手で触れようとするセクハラ野郎が現れないのは、ここが闇の街・新歌舞伎町だからだろう。余計なことをしでかせば、店の奥に連れて行かれて……なんてことになりかねない。

なので、追加注文だけがメイドさんとお近づきになる唯一の手段。だが——俺はあえて自分のスマホを凝視していた。もちろん、裸のお姉さんを見たくはないはずがない。だとしても——先程のぎこちない笑顔は少々痛々しいものがあつた。もしかすると、何かの罰のようなものだったのかもしれない。だとしたら、これ以上辱めるべきではないだろう。

俺は、それを武勇伝として胸の中に留めておきたい。この誘惑に俺の良心は打ち勝つことができたのだと。

だが。

「おっ、お待たせ……しました……っ」

なんと、全裸メイドさんとの二度目の邂逅である。だが……俺は何も頼んでいない。怪訝にスマホから顔を上げるも——一瞬で頬が綻んでしまう。いまでもその両胸は乳首の先まで剥き出しのまま——しかし、俺は紳士である。女のコの恥ずかしいところからはさり気なく視線を外して——

「いえ、注文してませんが……」

「ひえっ!?!」

メイドさんは余程緊張していたのだろう。まあ、その姿だ。緊張しないはずがない。テーブルに起きかけていたコーヒーを慌ててトレイに戻そうとしたようだが焦るあまりソーサーからずりりとカップごと滑り落ち――

「あっつっ!?!」

その瞬間は見えていたのだが、こんな座席では逃げようがない。いや、一応逃げようとはしたのだがテーブルの上の水溜りならぬコーヒー溜まりの広がりの方が速かった。

「もももっ、申し訳ありません、ご主人さまっ!」

こんなときでも『お客様』ではなく、『ご主人さま』とはある意味感心させられる。幸いズボンの方は軽症で済んだし、裸のまま拭き掃除をさせるのも忍びない。俺もペーパーナプキンで参戦した方が良いだろうか。しかし、下手に共同作業をしては――胸の膨らみが気にならないはずがない。

その混乱の最中――

「あと私が受け持つから、みなと湊はオーダーの続きをお願い」

――彼女は現れた。

「しとれ先輩……」

「ここまで俺は、このコの胸ばかり――後ろ姿のときはお尻ばかり見てきたが――新たに

に現れたふたり目の全裸メイド——彼女は——完璧だった。

変な表現になるが——何故か視線が定まらない。頭頂のヘツドドレス——高く束ねられたポニーテール——首周りの白い襟チョーカー——肩は細く、それでいて胸は大きい。そして美しい。ツンと上を向いた乳首と、薄い肌をほんのりと染める桜色——お腹はおへそまですつきりしており、下腹部に至るまで——見せる前提で、きちんと梳いているのかも知れない。下の毛もふわりと——それでいて、下地となる膨らみの割れ目は薄つすらと透けさせている。そのすべてを支える背筋はシヤンと伸びており——全裸でありながら恥じることなく堂々としており——紛れもなくメイドだった。メイド服は着ていないけれど、メイド服姿の彼女が容易に想像できる。だからこそ——メイド服を着ていなくてもわかる。彼女はメイドであると。メイド服を脱ぎ、裸になったメイドさんなのだ。

しとれと呼ばれた先輩メイドは大量の台拭きを持参しており、それをガバつと卓上に広げて一気にこぼしたコーヒーを吸い上げていく。それから、ソファの座面の方を。だが、布巾からすつと手を離し——おもむ徐ろに、俺のズボンのシミの上へ——

「大変失礼いたしました、主人さま」

その指先が——ひどく淫猥に感じてしまい、俺はつい——ズボンの中で——。それを見透かしているかのような手つきで、スツ……とそこへと吸い寄せられるように——

「こちら、お詫びと致しまして——」

狭いテーブルと椅子の間が、さらに狭く、そして熱を帯びていく。その熱気を、俺には遠ざけることなどできなかつた——

新歌舞伎町の圧力とでもいうべきか、幸いなことに俺たちにスマホを構える者はいなかつたけれど——まさか、人前であんなことをしてしまうとは——いや、されてしまうとは……。だが、きつと客たちはしとれさんばかり観て、俺のことなど目に入っていなかつただろう。入っていないなかつたと思いたい。

ズボンにこぼしたコーヒ―は結局そのままである。先程のひと悶着をもつて有耶無耶にされてしまったといつていい。

だが……俺の気持ちの方は有耶無耶にはできず、ズボンのシミよりも深く刻まれてしまっている。

これはもう……こんなの、今月いっぱいには歌舞伎館に通うしかないだろ……ッ！　だが、シフトがわからない以上再び逢えるとは限らない。手がかりとなるのは、ドジっ娘メイドの方が呼びかけていた『しとれ』という名前だけ。……落ち着いたら検索をかけてみよう。『メイド』と『しとれ』で。

これから飲み会だというのに……なんてこつた……体力のすべてを吸い取られてし

まった気がするぞ……？　むしろ、飲み会で英気を復活させなくては……。

何か土産話になれば、と思い入店してみた期間限定メイド喫茶だったが——少なくとも、友人らに渡せるような土産にはできなさそうだ。この気持ちは、俺だけの中に置いておきたい。

乙比野杏佳

あれは二学期が始まって一週間くらい経ったあたりの週明けのことだったと思う。教室は涼しいが登下校の道のりは暑い。だったら、涼しくなるまで授業を先延ばしにするか、せめてリモートにしてほしいところなのだが。

七月の頃はこの暑さに耐えきれば夏休み、という希望もあったが——その休みが終わってしまえば絶望しかない。学校のない一ヶ月間は基本的に家に籠もりきり、友人らと集まる場所もネット上。なんと快適なことか。そもそも、わざわざこうして炎天下の中を移動してくるメリットがない。

非効率な学校教育に対して不満を募らせながら——校門のあたりでスマホがブルつたので取り出してみる。それはいつものソシャゲのエネルギーが切れました、という通知で——このタイミングなら授業が始まる前に補充しておけばいいことだ。が、時刻がマズイ。あと三分で授業のチャイムである。ここまで定刻どおり来ておきながら僅差で遅刻はもつたない。なので、少し小走りで僕は教室へ向かう。

昇降口で靴を履き替え廊下に出ると人は少ない。この季節、こんな蒸した通路に残っているのは自分のような遅刻寸前の者だけだ。なので熱気に背中を押されるよう

に、歩速は緩めず教室へ。似たような生徒が他にもいるが、きつと同じ心境なのだろう。到着して扉を開くとひんやりした空気が漏れ出てくる。生き返る思いだ。が、逆に教室からすれば、僕が熱気が流し込んでいるに等しい。入り口附近の席の坂本から嫌な顔で見上げられて——案ずるな。僕とて同じ気持ちだ——すぐさま扉を閉める。

だが、すぐに再び開かれた。この時間帯なので駆け込みの登校者が相次いでいるのだろう。そりゃ、入り口附近の席を充てがわれた者として嫌な顔をするはずだ。

が、しかし——坂本は真つ赤になつて固まつている。僕の方を向いたまま。いや、正確には僕の後ろなのだろう。釣られて、僕も振り向いた。それで——坂本が何に驚いていたのかを知る。

「……邪魔よ、退いてくれる?」

後から来た女子に毒づかれて——僕は何も言い返せずに従っていた。まさに、僕の背に触れるか触れないか——そんな間近にあったのは——おっぱい。

いや、女子高生なのだから胸くらいあるだろう。だが、彼女は——おっぱいの乙比野——下の名前は忘れた——の胸は——その膨らみは、制服の中に収まつていなかった。その肌が軽く火照っているのは、晩夏の日差しに当てられたからだろうか。しかし、その先が特に朱く染まつているのは日差しのためではない。それは生まれ持つてのもの——ふたつの膨らみ——その頂点の乳首と乳輪——それらを大きく揺らしながら、乙比野は俺の

目の前を横切つていき——

さすがにクラス中が異変に気づく。そんな乙比野の背中を——お尻を、僕は目で追つていた。きっと、背後にいる者はみんなそうだろう。逆に、正面にいる者は——さつき僕が見たふたつの胸に釘付けになつて、逆にならぬに違いない。

そして、乙比野がボスンと——いや、ぽよんと椅子にお尻を落としたところで、始業のチャイムが鳴つた。

僕は女子の交友関係には詳しくないが、どうやら乙比野と親しい間柄の友人はクラス内にはいないらしい。チャイムの後、すぐに担任が来たので全裸のことは不問となり——教師が触れず、かといつて自ら教師に問い質そうという者も現れず——少しの休み時間を挟んで、一時限目のチャイムと共に矢島——英語の担当教師がやつてきた。時間きつちに。普段はもう少し猶予がある。まるで、乙比野に関して僕たちが触れる時間を最小限とするように。

英語の授業は、淡々と進んでいく。誰もが気になつて仕方がない。いつになく静かな授業風景に、矢島はさぞご満悦——とはいかず、やはりどことなくこちない。

「じゃあ、ひとり一行ずつ和訳を。今日は——」

と言いかけて固まる。前回は僕のいる列だった。そのひとつ右隣となると、その三番目に座っているのは——

「——五列目で」

それでも矢島は果敢に自分の進め方を固持する。もちろん、読み手が立って発音するのも変えることはない。先頭の田川、二番目の吉本が読み終え——教室の空気が変わったのを誰もが感じたことだろう。その中心で、乙比野が——立ち上がった。

全裸の、乙比野が。

裸の胸をふわりと湛えて。

席を立ったことで足の付け根辺りもよく見えるようになり——立体的に積み重なった縮れ毛まではつきりと視認できてしまう。

乙比野が卓上に目を落としていているのは手に持った教科書と机のノートを確認するためだろう。だが、真っ赤になって俯く様は羞恥に耐えかねているようにしか見えない。

そして、実際そうだった。

「S、S……She has——」

その二語を発したところで、ぐにやりと膝を折り——ガタガタ、と机と椅子をひっくり返す。

「乙比野さんっ」

と、慌てふためく矢島。

「早くっ、誰か保健室に！」

で寝かせたところで、横にあつた丸椅子に力尽きるようドツカと座り込む。き、緊張つて……こんなに体力を削り取るものなんだな……！

乙比野をベッドで寝かせた、というか……僕の方も限界だったのだから仕方ない。乙比野をベッドにただ座らせただけで——そのまま背後に倒れ込んだので、掛け布団さえお尻に——背中に敷き込んでいる。ここからだと言われ裸の女のコを下から見上げるような塩梅になっているが、それでも乙比野の胸はたゆんと肋骨の上に乗っており、ツンと立つ乳首まではつきりとわかる。

乙比野はぐったりして見えるのに、語気だけはいつもどおり無駄に強い。

「ふ……不甲斐ないわ……。私ならできると思ってたのに……」

「な、何を……？」

僕は——僕らクラスの間は何も知らない。乙比野が何故こんなことを——何のためにもこんなことをしようとしていたのか。

それを裸の女のコに問い詰めるほど、僕の肝は座っていない。だがこれに、乙比野はポツリと小さく答えてくれた。

「……全裸生活」

「は……？」

何を言っているのかと聞き返すと、乙比野は驚くべきことを口にした。

「私……アイドルなのよ。ストリップ・アイドル」

何のことだかわからなかったが——乙比野がダンス部を潰したという噂は聞いたことがある。だがその後、彼女はひとりストリップパーとしてデビューしていたらしい。

その劇場の企画で、『全裸生活』に挑戦することになり——

「私なら通学謹慎なんてしなくても通えると思つてたのに……ッ！」

どうやら学校側にも許可を取つており——通学時間をずらして別室で授業を受ける通学謹慎という形を打診されていたが、教室でも叫んでいた通り、特別扱いを嫌つた乙比野はそれを拒否。他の生徒と同じように授業を受けたい、と言つて聞かなかつたのだろう。だが、こうして倒れてしまつてはそれ以上意地を張ることもできない。

「く、くう……けど、これで終わりじゃないわよ……もう大丈夫だつて証明して、今度こそ……っ」

乙比野は未だ教室に復帰する腹積もりのようだ。男子もいる、あの教室へ。女のコの考えることはよくわからない。……いや、コイツが特別なのだろう。何しろ、ストリップ・アイドル——普通に生活していたら交わることのない世界だ。

だからこそ、僕も自分の世界に帰ろう。これ以上彼女と触れていては頭がおかしくなつてしまう。

「そ、それじゃ……僕は教室に戻るから」

立ち上がる僕の視線は壁の方を凝視したままで。乙比野の視線は天井へ。それでも。「待ちなさいっ！」

乙比野は僕を呼び止める。

「こんな形で世話だけかけて、そのまま帰すなんて……私が納得できない」

ああ、乙比野ってのはこういうヤツだった。それが面倒くさくて……クラスでは孤立しがちだったのだろう。なので、僕もまた淡々と。

「これも保健委員の仕事だから」

などと、ギザなセリフで誤魔化そうとしてみるも、乙比野は——一度言い出したら聞かないキャラらしい。

「だったらー！」

少し言い淀んで——それでも時間はかけずに。

「……私たちストリップ・アイドルの仕事が、踊って脱ぐことだけだと思つた……？」

その言葉に——僕は何かを期待していたのだろう。つい惹きつけられてしまった視線の先で、乙比野は——ゆっくりと両腿を——布団の上に滑らせていく。

「……っ、こういうのも、私たちの仕事なのよっ！ もう、ステージの上で何人もの男に跨ってきたんだからっ！」

これが、ダンス部の股関節か——ベッドの縁と女のコの太腿が一直線に——その中心

には女のコの——ぷくつとしたところが僕の目に飛び込んでくる。このような角度でなければ決して見えないところが。どうやら、毛は向かって正面にしか生えておらず——二枚の唇は綺麗で、ちよろりと中から舌のようなものがはみ出ている。

「につ、逃げたら……絶対許さないからっ！ 教室まで追って行って、クラスのみんなの前でもひん剥いて……ッ！」

——言い出したら、乙比野は決して止まらないのだろう。何より、ここまで女子から求められては——というか、女ってこんな求め方するものなのか——？

僕にはもう、何も考えられそうにない。すべては、登校中の直射日光にやられたから——そういうことにしておいてほしい。

TRK26——それが乙比野が所属する劇場の名前だった。『ストリップ・アイドル』で検索してみても、見つかったのがそこだけで、そのメンバーとしてその名もあつたから。おっひのきょうか
乙比野 杏佳——ステージジパフオーマンズのアーカイブもあつた。これをクラスの連中が観たら驚くことだろう。顔見知りか、きらびやかな舞台で、あんなことや、こんなことを——

だが、乙比野の温かさまで知っているのは——おそらく、このクラスでは僕だけだ。姿や声は画面越しでも伝わってくる。けれど、それは乙比野のいち部分でしかない。

これまで僕は、ネットさえあれば十分だと思っていた。けれど——僕はもう、乙比野に触れてしまっている——あちらの世界に引きずり込まれてしまつては、もうスマホを通じた乙比野だけでは満たされそうにない。視覚と聴覚——それ以上のものを得るためには、現地に足を運ぶ必要があるのだろう。僕らはこの現実には足をつけて生きていく。ネット上だけでは完結しないこともあるということか。

とはいえ——この暑さは如何ともしがたい。少しでも外が涼しくなる日を心待ちにしつつ——しばらくは、別教室で通学謹慎となつている乙比野に想いを馳せよう。

崎乃平花子2

それは、何気ない求人ポスターだったはずだ。一応『急募』とは銘打たれていたものの、時給も条件も差し障りないコンビニの深夜バイト——この街のレイトシヨールにはよく来るので、そのままバイトして始発で帰るのも悪くないか——そんな理由で。

面接についても、最初は穏やかな雰囲気だった。学生のバイトなど珍しくもないのだろう。しかし、最後に。

『えーと、この仕事は守秘義務が厳しくてね』

コンビニ業務に守秘義務？とも思ったが、これも昨今のコンプライアンスの類なのだろう、と軽く受け取っていた。

しかし、バイト初日——

「今日から始めることになった森くんだべなあ。よろすくなあ」

のんびりと話しかけてくる先輩は、崎乃平^{さきのひら}さん。業務内容は彼女から説明を受けてくれ、と店長からは言われた……本当に何事もなく、平然と言われたが……！

「……そうそう、あたすは制服着とらんけど、森くんはちゃんとして着んとあかんべ？」

「は、はあ……」

いや、制服どころか……崎乃平さんは何も着ていない。誇張ではなく、本当に何も着ていない。メガネは掛けているし、頭のお団子——シニヨン、というやつか——髪をまとめるのにゴムなりリボンなりは使っているのかもしれない。あと、靴も履いている。靴下も。本当に、そのくらいだ。

そんな足元を確認して、スーッと視線を上げていくと——モジャつとした下の毛が。とはいえ、濃すぎることはなく、その向こう側の割れ目も何となく影として見て取れる。そして、意外とすつきりしたお腹——ここは年齢が出やすいと聞くし、印象より若いのかもかもしれない——それは胸にも現れており、垂れてもいないし張りもある。乳輪は——少々年季は感じるが、子供を産んだ後、という感じではない。

「……ほんから……つて、森くん、聞いたるべ!?!」

「あつ、はい」

崎乃平の裸体に見惚れて耳の方がつい疎かになってしまった。一応、コンビニのバイトは慣れているから大丈夫だとは思うけど……確かにこれは……業務中のことを外で話してはならない……よなあ……。

初の出勤日ということで、新しい作業が入るたびに説明を受ける。

「ああ、お疲れそんですー」

パンの入荷がやってきた。この時間に来るということは、やはり新歌舞伎町は眠らない街、ということなのだろう。

「んで、このバーコードを読み込んだら、こっちにはこのハンコなあ」

腕の動きに合わせて揺れる胸——本人は普通に説明しているけれど……やはり、ピンの先っぽに意識がいつてしまう……！

これは、トラツクの運ちゃんもさぞ目のやり場に困っているだろう……と思つたら……ガン見……ッ!? ……ああ、毎日のルーティーンであれば、もうすっかり慣れてるんだろうなあ。

慣れてるだけに。

「やつ……ああん……♡」

運ちゃんはサイン済みの明細を受け取るついでに、崎乃平さんの胸をひと揉み。いや、ひと揉みというカムニムニコリコリ……乳首まで念入りにしっかりと。完全にセクハラではあるが、当の本人がおっぱい丸出しの全裸なのだから仕方がないという一面もある。何より、揉まれてる本人にも嫌がっている様子がないので……ああ、痴女なんだな。

何となくわかつてきたところで……このままだと落ち着かないし、そろそろ質問させてもらおう。

「ところで崎乃平さん。……どうして制服着てないんです？」

一応、言葉選びに最低限の配慮はしたつもりだが。いくら新歌舞伎町が如何わしい街だといつても、警察に見つかったらマズイだろ。社長の愛人が羞恥プレイでもさせられていいのか？　と思つたが――

「あたすなあ……実はストリップ・アイドルなんべよ♡」

アイドル――と本人は言っているが……結局、ただのストリッパーなのではないか、という感想しかない。

重要なのはむしろここから。

「ほんでなあ、劇場の企画で全裸生活つてのに挑戦中なんよ」

曰く、一ヶ月間全裸で生活すること――それも、できる限りいつもどおりに――この街は規格外である。全裸の女性がうろついていたとしても大して騒がれすらない。

このコンビニの店長は崎乃平さんのファンだというのが――正直なところ、ファンだというのは口実に全裸生活中の崎乃平さんを誘い込んだのでは、という疑いが濃厚である。例えファンでなかったとしても……崎乃平さんの身体は魅力的だから。

「けど、危なくないです？」

うっかりタガがしまつたら、俺だって襲いかねない。だが、崎乃平さんはそんな男を前にしても樂觀的だ。

「そこはまあ、大丈夫よお」

いや、樂觀的というより——

「あたす……適齢期だべからな♡」

そう言つて——崎乃平さんは俺の股間に手を伸ばし——！

「……ッ!?!」

これは……確定だ！ 崎乃平さんは、間違いない……痴女……ッ!!

カタくなつたところをズボンの上から手触りで確認していく。その中がどうなっているのか——いや、使い物になるのか——！

「元氣いっぱい嬉しいべよ♡」

耳元で痴女が囁くと、そのまま離れて、無防備に——ッ！

「えー……タバコの棚を整理するべかなー……♪」

不自然にお尻を突き出して——これは……明らかに誘っている……!!

だが——ここはまさにレジカウンターの中……さっきのような業者も来るし、何より普通に客も来る……事情の知らない部外者が……!!

だが、目の前には——

「んー……もう少し、こう、こうだべかなー?」

お尻をくいくいと揺らしながら……崎乃平さんが……チラリとこちらの様子を伺い

……視線を確認したうえで再び作業に戻る。素知らぬ顔で、お尻をツンと突き出して。「ここのカウンター、腰から下は外から見えん高さだべなあ……？」

崎乃平さん自身は腰から上も裸なのだが。けれど、花子さんはこう言っているのである——俺に、下半裸になれと。そこまで言われたら……もう……もう……つ！

崎乃平さんは、業務中に時折三〇分ほど売り場から姿を消すことがある。それは、おそらく店長の相手をしているのだろう。なので、その間は休憩室には近づかないようにしている。例えわかりきったことであっても……店長と穴兄弟である確信は持ちたくない。

ただ、あれから軽く調べてみたが——崎乃平さんの所属している『TRK26』というストリップ・グループにはそれぞれ個人ファンクラブがあり、店長はそこに入会しているようだ。ならば、公式的にもファンといって間違いないだろう。そして、俺も入会した。穴兄弟かはさておき、同担ということにはなった。

崎乃平さんの出身の地方はいささか特殊で、子供はそれぞれの家庭ごとではなく村全体で育てる、という風習があるようだ。なので、父親にはこだわっていないという。誰の子であれ——しかし、父親がファンであればそれに越したことはない、くらいらしい。そんなスナック感覚で——奸活——子供を欲しているというのだから——都会の人間

には理解の及ばない領域だ。もし、先乃平さんが自分の子供を身籠ったとわかったら——迷っているのに、花子さんの押しに甘えて毎晩毎晩、誘われるがままに——そして、今夜も——

「……ウフフ、ヤーっぱ若いコは元気だべなあ♪」

それはまるでタイムカードのように。出勤の打刻と共に先ず一回。そして、帰り際も——崎乃平さんのそんな姿を見続けていたら、溜まるものも溜まってしまう。

だが、こんな生活も長くは続かない。崎乃平さんの全裸生活はこの一ヶ月だけなのだから。

「あたすはこのままこの仕事を続けていくつもりだけんど……さすがにシフトは減らすにしても……森くんはどーすつべ？」

朝四時が近づいてくると、崎乃平さんは仕事を終える準備に入る。俺はともかく——崎乃平さんの全裸生活は店の中だけに留まらない。このまま家まで帰らなくてはならないのだから——人の足が増える始発の前に早上がりさせているのは、オーナーもファンだから、ということなのだろう。

ということ、別れる前のひと搾りを済ませたところで——行為や姿を見るにピロートークのようでもあるが、レジを閉じる準備を始めているあたり、やはり俺たちはコンビニでの仕事なのだと言現実に引き戻される。

「俺も同じですよ。辞める理由はないですし……ただ、いまみたいに毎日入ることはないですけど」

だが、そんな通常運転になったとしても——少々心配なことはある。

「ほんなら、また一緒に入ることもあるかもなあ」

そうなったとき、俺は崎乃平さんを我慢することができだろうか……。この一ヶ月、求めるがままに——というか、求める以上に求められた気がするが——そんな爛れた相手と、平常心で一緒に働くことができるのだろうか——

しかし、崎乃平さんにそんな懸念は一切なく。

「フフ、楽しみだべ」

そう言って——またしても男を誘うようにズボンに手を伸ばされては——男の力ダが単純なのか、崎乃平さんの手つきが一際厭らしいのか——事後にも関わらずすぐに力を取り戻してしまふ。それが、崎乃平さんには嬉しいらしい。

けれど、いまはもう出るものもないし、時間もないし、けれど、こんな崎乃平さんを忘れることもできそうにないしで。

「……そんなことされたら……家で崎乃平さんのこと、思い出しちゃいそうですよ」

崎乃平さんのイタズラっぽい笑顔——手つき指つき——その他諸々——そうしたら、きつと。

「フフ、ケンど、ひとりです又いちゃあかんべ？」

「そんな殺生な」

くだらない猥談を交わすくらいの間柄ではあるが、これに崎乃平さんは不服だつたらしく、ちよつと可愛らしく眉を釣り上げる。

「殺生やないべ！ 出すものは——」

俺の手を取ると、崎乃平さんは自分の——自分の——！

「ココに、出してくれんと♡」

言つて、ちよつと照れている。だが。

「けど、こういうことできるのは今月だけですし」

これに崎乃平さんはキョトンとして。

「何ゆーとるべ」

そして、すつと顔を近づけて——

「全裸生活が終わつたら、もう種付けしてくれんべ？」

！ 俺は勘違いしていたようだ。来月になつても崎乃平さんは、決して——

二連戦——子供を望んでいる崎乃平さんの期待には応えられないかもしれないし、このままでは残業を強いることになつてしまいそうだ。けれど——崎乃平さんの指が構わないと言っているのなら、俺もそれに応えよう。これからも、ずっと。

そしていつかは——子供のためにもきちんと覚悟を決めておきたい。

島門佑衣

かれこれ三〇年ほど前に巻き起こった日本文化の大転換——『自己責任主義』——これは、『歌舞伎町クライシス』に端を発する『管理主義』の反動ともいわれているが——ともかく、『政治的正しき』に抑圧され、どうにもならなくなった人間たちの防衛本能ともいわれており、ゆえに『人間主義』もしくは『快樂主義』『墮落主義』ともいわれている。

しかし——コレは一体誰の墮落であり、誰の快樂なのだろうか——
相手との距離は少しあるため、その肉声は届かない。だが、そのバツの悪そうな表情から、誤魔化し笑いが聞こえてくるようだ。そんな、講義棟四階の廊下——俺はいま、試されているのかもしれない。全裸の女のコを目の前にして、理性を保つことができるのか、と。

さて、どこから情報を整理すべきか——先ず勘違いしてほしくないのだが、ここは大学の廊下であり、決して更衣室等の類ではなく——事故で全裸の女子を覗き見してしまうような場所ではない。

俺が受講しようと目論んでいた近代文化論は、いわゆるポータス単位といわれている

る。期末の筆記試験の答えは授業中に堂々と散りばめられており——まさに卒業のための科目といえよう。学問を修めるといふより、まるでパズルか宝探しか——これが全国規模の企画であればあつという間にネット上に答えがばら撒かれることだろうが、ここはいち大学のいち講義である。名声欲より講義に出ていない連中に甘い蜜を吸わせてなるものか——そんな感情が働き——せいぜい仲の良い友人からこつそり教えてもらうくらいが関の山である。……こんなことなら斜に構えずもつとフランクに人付き合いをしておくべきだったかもしれない。が、今年で卒業という年次で急に近づいたところで、下心以外の印象は与えないだろう。

そんなわけで——正直、あの時間に改札をくぐるようでは講義に間に合うか否かは五分五分といったところだったが——あの助教授が時間通りに講義を始めることはない。大抵、数分遅れる。それを見越して走ってきたものの——残念ながら、今日は比較的正確なスケジュールで動いていたようだ。様々なところで緩い分、締めると決めたところは厳しい。一旦講義が始まってしまえば、途中入場は認めないのが数少ないルールのひとつである。

よつて、ここは諦めて踵を返すしかない。だが——目の前の異変に対して、俺は改めて状況を俯瞰してみることにした。女のコはリノリウムの床にペタリと直にお尻を着け、壁に寄りかかって太ももにノート端末を乗せている。何か音楽を聴いているように

——左右の耳たぶに引つ掛ける形のイヤホンは開放型。それもあつて——おそらく大音量で流しているわけでもなく、俺の足音にもすぐに気づいたことだろう。

だが、立ち上がったたり、逃げ出したりする様子はない。そして、両腕で身体を隠したりする仕草もない。ただ、恥ずかしがっているようには見えない。もしくは、照れているのか。

いずれにせよ、こちらに対する敵意や警戒心はなさそうなので——俺は試しに、相手の方へと一步近づいてみた。この程度では女のコに変化は見られない。なので、さらに一步、もう一步——どうやら、女のコは俺の接近について否定的な感情はなさそうだ。

なので——とにかく俺が気になるのは、そのノート端末で何をしているのか——このような場所で、そのような格好で。声をかけると怖がられるかもしれないし、何よりここは静かな講義中の廊下だ。小さな声でも意外と響く。

俺の接近しようとしている意思を察すると、女のコは慌ただしく視線を泳がせ始めた。それでも立ち上がる様子はない。なので、俺は俺の目的を完遂する。彼女の隣に座り、軽くモニタを覗き込んでみた。すると、そこには——

「…………ツ!？」

これは——完全に予想外である。まさか、彼女が見ていたものは——近代文化論の講義そのものだったとは——

正直なところ——この講義は俺も聞いておきたい。一回分落としたからといって試験で大幅に不利になることはないとはいえ——この講義中に試験の際のヒントが含まれているかもしれない。

彼女もまたそんな事情を察したのだろう。自分の右耳に掛けていたスピーカーを俺の左耳に掛けて——

『ということ、これが有名な——』

本当に変哲もない講義である。裏技のような形で受講できて、こちらとしてもありがたい。

しかし、これは——さすがに内容なんて頭に入らないぞ……!? いや、一言一句覚える必要はない。だが、助教授の『ここ、試験に出るからな——』だけは押さえておきたい。けれど、授業に集中しようとしても、つい隣の肌色に意識を奪われてしまい——しかも、いくらひとつの画面を共有しているとはいえ、そんなふうに肩を預けられては——！ 身体は細いが胸はあり——全裸というのは胸の先まで例外ではなく、ピンク色の突起が可愛らしく自己主張している。そこが気になればなるほど、その向こう側——上からでは女のコのその下が見えない。気になる。だが、それを遮っている胸そのものも気になつてしまい——

そんな意識のせめぎ合いの中で——つい女のコの太ももに触れてしまった俺の指先

に、彼女が嫌がる様子はない。それどころか——彼女の指先もまた、俺のズボンの上に——

いつしか互いの手の平はより露骨に——より敏感なところに——快樂と理性の間で振り子が激しく行ったり来たりする中、モニタの向こう側では淡々と講義は進んでいき——
——だがしかし——

「……………あつ、そろそろ講義が終わっちゃう……………」

我に戻った女の口はふたりの空気を断ち切るようにノート端末の蓋を閉じ、脇に置いてあつたカバンにグイと詰め込むと勢いよく立ち上がった。そして、階段の方へと駆け出していく——俺にイヤホンの片割れを貸したままで——

階段を選んだのは——人目の多いエレベーターを避けてのことだろう。そのまま裏口から建物を出て——女のコのミディアムヘアがふわりと風に舞う。ここはいわゆる校舎裏だ。そこでようやく足を止めて——彼女はこちらへ振り返る。

「や、やつぱり……………着いてきちゃいました……………?」

結構全速力だったのか、女のコの息は荒い。

「そりゃあ……………そうするだろ……………」

「で、ですよね……………私も……………」

そう言って、彼女の方から歩み寄ってくれたので、俺は左耳のイヤホンを外した。

「これ、返しておかないと」

「あつ」

これには彼女も真つ赤になり――

「す、すいません。私、ちよつと勘違いして……」

「勘違い……?」

その可愛らしい表情から、それは男にとつて嬉しい勘違い――だからこそ、俺の方も勘違いして先走らないよう、相手からの言葉を待つ。

「……私、実は――」

彼女――島門しまかど 佑衣ゆいはストリップ・アイドル見習いだと名乗った。

「それで、ですね……今月、劇場からの指示で全裸生活というものに挑戦中にして……」
一ヶ月全裸で生活――それも、できる限り日常通りに――見習いに対する苛烈なトレーニングか、それと陰湿な嫌がらせか――いや、ただの悪意であれば、ここまで大学側と掛け合うことはないだろう。本来リモートを認めていない近代文化論の授業で、例外的に認めさせるなど――ただし、あの助教教授は出席主義である。全裸のまま人前に出るのが恥ずかしいとしても、廊下までは来るように、と。電波の出力を絞っているのか、端末にGPSでも仕込んでいるのか――ともかく、こうして島門さんは講義を拝聴する

ことができたらしい。

「そ、そうなんだ……」

俺は相槌を打ちながら考える。何故島門さんがそのようなことを俺に話してくれたのか——大学で全裸になっていた件に対する弁解——だけでもなかったのかもしれない。

「え、えーと……そういうわけで……その……普通の女のコよりこう……ことにも慣れてる、と言いますか……」

そう口にして、さらに近づく。そして——ふわり、と女のコの指が俺の足に触れた。それは偶然や事故ではなく、確信的に——先程の講義中で交わしたやり取りのように——

「……まで着いてきてもらえて私、嬉しかったんです。さっきまでの気持ちは……私の勘違いじゃなかったのかも……みたいな感じで」

この状況は、最初とは逆に——島門さんの方から、俺にどこまで近づいて良いのか確認するように。

「先輩方ならもつとはつきりと求められると思うんですけど、私はその……まだ……難しく……」

ストリッパーの先輩が男に求めること——このような状況で——その時点で答えは

ほぼ出ていて、島門さんもまたはつきりと求めているに等しいのだが——

「けど……ちゃんとと言えるようにはなりたくて……」

自身の意思は伝えた上で、なお。

「なので……その……」

それでも、明確に口にするのはやはり恥ずかしいのだろう。これが、いまの精一杯。

「……次のコマ……講義、入ってますか？」

その問いに対する答えは、イエスである。いまから向かえば少々の遅刻で大目に見てもらえるかもしれない。だが——この時代は『快樂主義』『墮落主義』——それを全面的に肯定することはできないが、行き過ぎた先の揺り返しを人類は学んでいるがゆえに、それを極端に否定するようなこともするべきではない。

この場においては、女のコの気持ちとか勇氣とか、様々な複合要素を天秤にかけた上で——俺はあえて授業はサボることを決意した。あくまであえて、今回だけのことで。

しかし、彼女はストリップ・アイドル——所属先も教えてもらった。ならば、これ以上俺が快樂に溺れることはない。今度会うのは、快樂の劇場で——節度を持って人生を楽しむバランス感覚のある人間になりたいものだ。

園内晴恵

ずっと、噂としては聞いていた。この 新歌舞伎町まには触れてはならない闇がある——その深淵を——俺はついに目撃してしまった。

いや、俺だけではない。この場にいるすべての男たちが共有している。……ここがシンカブという男の街で良かった。わざわざこんな治安の悪い地域のジムを使う女性は普通いないだろう。

そのベンチプレスの周りには様々なトレーニング機器が並んでいるが、使用者の動きは総じて止まっている。それどころか、ただ突っ立っている者さえも——俺もそのひとりではあるのだが。しかし——それも仕方のないことだろう。よりにもよって——妙齡の女性が全裸ベンチプレスとは……。

程よく足を開いているため、下から割れ目まで覗けてしまう。もちろん、堂々と鎮座した胸の先も。元々厚みはさほどではないようだが色は鮮やかで、白い肌に薄桃色の乳輪がよく映えている。

さて、この 新歌舞伎町まの闇とは——あの美しい痴女こそがまさにそれである。これ見よがしに——それこそ誘ってるのか、と言わんばかりにこのような女子が全裸で出沒

やかだったりすることはなく……むしろ地味だ。白地のマスクにウサギの顔をマジックで描いたかのような。見れば、頭の横からピョコピョコと耳も立っている。頭頂部分は開いているようで、髪の毛がふわふわとはみ出ている。さほど量もなさそうだし、マスクを取ったらロングヘア、ということもなさそうだ。

どうやら今日のメニューはこれで終わりらしく、彼女はシャワールームへと向かっていく。目当ての女性がいなくなると、男たちは散り散りに去っていった。現金なものである。だがしかし——俺はどうしても彼女が気になっていた。あまり深入りしては危険も伴うが——ジムを闊歩する全裸女性——もう少しだけ、あの浮世離れた光景を眺めていたい……！

しばらくして、彼女は出てきた。入るときと同じようにマスクひとつで。どうやら、トレーニング中だけ全裸ということではないらしい。

おそらくタオルは使い切りのレンタルのものを利用したのだと思われるが……あのマスクからの滴り方は……まさか、かぶったままシャワーを浴びたというのか……？どこまで気に入っているんだ、あのマスクを。

しかし、そのままの姿で出てきたということは——靴も履いている——つまり——！彼女はジムを出ていく。本当に、平然と。全裸のまま、フロアの外へ。入ってくるころは見えていなかったが、もしかしたら、あの姿のままここまで来たのかもしれない。

この感情は——ただの劣情ではない。焦燥感——危機感——このまま行けば、彼女は
どうなってしまうのか——！ 想像さえできない未知の領域へ——！

彼女を追って外に出ると——我ながら、まるでストーカーのような所業だと自覚して
いるが、それでも彼女から険しい気配は感じない。軽く足を伸ばすと——彼女は突然走
り出す。走り去っていった、というべきか。闇に触れてはならない——だが——俺は彼
女を追って駆け出していた……！

彼女に後ろを気にする素振りはない。ならば、俺から逃げているわけではないのだろ
う。だとしたら、あんなに急いでどこに行くのか——それも、あのような格好で——見
れば、胸を両手で隠している。これまで一切恥じらう様子がなかったというのに、ここ
にきて——？ しかし、そんな女性を追っていると見なされれば、俺の方が黒服に連行
されてしまうかもしれない。だが、それでも……！

少し手前で彼女は急に走りを止める。何故なら、信号が赤だったから。別段、急いで
いるわけではないらしい。意表を突かれて——俺はつい彼女の隣に並んでしまった。
そして至近距離で目が合う。どうやら、彼女は俺の尾行に気づいていなかったわけでは
なかったようだ。にも関わらず——なんと彼女の方から話しかけてきた。

「お疲れ様ですっ！」

マスクの覗き穴から楽しそうな瞳が覗いている。

「もしかして、コースがご一緒なのでしょうか」

「こ、コース……?」

「はいっ! ランニングの!」

ら、ランニング……だと……!?

そうこうしているうちに、信号が青になった。

「では、行きましようっ!」

そう言っただけで彼女は——再び両手で胸を隠して走り始める。俺も——どうやら同じコースを走っているということになってるので釣られて続いていた。

しかし、そんな格好で並走されると、やはりその胸が気になってしまふ……! どうしても視線、もしくは意識を抑えることができず——それは隣を走る彼女にも伝わってしまったようだ。

「あ、こちらはお気になさらず。コーチから胸を極端に揺らすようなことは控えるようにと言われてるので」

どうやら、胸を隠しているわけではなく、手で乳揺れを押さえている、ということらしい。なのに、ブラを着けることも許されないとばかりかしている。それでも、特訓の後にはひとっ走りしないと落ち着かなくて——彼女は屈託なく笑うが、俺が気にしているのはそこではない。

「コーチ、というのは……?」

誰かの指示でこのようなことを行っているのだとすれば、それを指示できるほどの人物とは何者なんだ……? 新歌舞伎町の闇の主か?

「はいっ、私はいま、全裸トレーニングの最中なのですっ!」

走りながら——俺は闇の正体を知ってしまった。TRK26——そのうちほるえ園内 晴恵と名

乗る彼女はストリップ・アイドル・ユニットの一員なのだという。つまり、風俗嬢だ。なるほど……そういう仕事であれば、裏にその道の組織があってもおかしくはない。

「そこでですね……」ヶ月全裸で生活するよう指導を受けているのです!」

彼女に何があったたのかわからない。しかし、全裸で生活していても警察も手を出せないのだから、闇の噂は本物だったということだ。

また信号待ちであるため、晴恵ちゃんは足を止める。本来のジョギングであれば待機中もステップだけは止めないものだが、胸に負担を掛けないよう——いや、そんなに腕を上げて伸びをされては——俺だけでなく、誰もが彼女を注視してしまう……!

俺もまた、晴恵ちゃんの裸体を舐めるように見ていたからか——逆に晴恵ちゃんからの視線に気づくのが遅れた。

「むむう……つかぬことをお尋ねしますが」

それはまるで、俺の股間に話しかけるように。

「殿方のおちんちんは……上下に振り続けても萎えたりしないのでしょかつ」

風俗嬢だけに淫語に対する抵抗もないようだ。

「そ、それは……そうだな……うん」

晴恵ちゃん自身が気にしているのはクーパー鞆帯のことだと思われるが……ずつと、噂としては聞いていた。この新歌舞伎町には触れてはならない闇がある——その深淵を——俺はついに目撃してしまった。

いや、俺だけではない。この場にいるすべての男たちが共有している。……ここが『シンカブ』という男の街で良かった。わざわざこんな治安の悪い地域のジムを使う女性には普通ないだろう。

そのベンチプレスの周りには様々なトレーニング機器が並んでいるが、使用者の動きは総じて止まっている。それどころか、ただ突っ立っている者さえも——俺もそのひとりではあるのだが。しかし——それも仕方のないことだろう。よりにもよって——妙齢の女性が全裸ベンチプレスとは……。

仰向けになって程よく足を開いているため、下から割れ目までいい感じに覗けてしまう。もちろん、堂々と鎮座した胸の先も。元々厚みはさほどではないようだが先端の色は鮮やかで、白い肌に薄桃色の乳輪がよく映えている。

さて、この新歌舞伎町の闇とは——あの美しい痴女こそがまさにそれである。これ

見よがしに——それこそ誘つてるのか、と言わんばかりに、このような女子が全裸で出没するという噂がずっとあつた。この新歌舞伎町という風俗街で。

しかし、理性を失い迂闊に襲いかかると——彼女たちのバックには危険な連中が控えているため、その女子が一声上げれば簀巻きにされて東京湾に沈められるという。実際、警察さえも見て見ぬ振りをしているのがその証拠といえよう。その絶大なる身の安全に対する自信が、全裸徘徊——というか、全裸ベンチプレスというか、そのような暴挙を引き起こしているのだらう。……その目的はまったくわからないが。

誰もが遠巻きに女体を眺めている中で——ガシャンとバーベルがラックに掛けられた。どうやらトレーニングを終えたらしい。それにしても……見た目は細いのに結構な重量を持ち上げていたな……。裏に黒服がいなくても、格闘技の心得があれば大抵の暴漢は撃退できそうだ。

そして……機材利用のマナーとしてアルコール消毒をしてタオルでひと拭き。……妙なところでマメだな。というか、女子の生尻の跡なら喜んで使いそうな男たちもいるなものだが。

何とも間拔けたことに、散々乳や股間を堪能した後になって、ようやくそのご尊顔に意識が向くこととなつた俺だが——マスク……だと……? な、なんなんだ、コレは。顔を隠していれば恥ずかしくない、とでもいうつもりか……? ?

それはいわゆるプロレスラーが着けるような——とはいえ、イカツかったり、きらびやかだったりすることはなく……むしろ地味だ。白地のマスクに動物の顔をマジックで描いたかのような。見れば、頭の横からピヨピヨと長い耳も立っている。ということは、これは……ウサギか。

頭頂部分は開いているようで、髪の毛がふわふわとはみ出ている。さほど量もなさそうだし、マスクを取ったらロングヘア、というイメチェンは期待できない。

どうやら今日のメニューはこれで終わりらしく、彼女はシャワールームへと向かっていく。目当ての女性がいなくなると、男たちは散り散りに去っていった。現金なものもある。だがしかし——俺はどうしても彼女が気になっていた。あまり深入りしては危険も伴うが——ジムを闊歩する全裸女性——もう少しだけ、あの浮世離れした光景を眺めていたい……！

しばらくして、彼女は出てきた。入るときと同じようにマスクひとつで。どうやら、トレーニング中だけ全裸ということではないらしい。

おそらくタオルは使い切りのレンタルのものを利用したのだと思われるが……あのマスクからの滴り方は……まさか、かぶったままシャワーを浴びたというのか……？どこまで気に入っているんだ、あのマスクを。

しかし、そのままの姿で出てきたということは——靴も履いている——つまり——！

彼女はジムを出ていく。本当に、平然と。全裸のまま、フロアの外へ。入ってくるところは見ていなかったが、もしかしたら、あの姿のままここまで来たのかもしれない。

この感情は——単純なる劣情とは異なる。焦燥感——危機感——このまま行けば、彼女はもうなってしまうのか——！ 想像さえできない未知の領域へ——！

彼女を追って外に出ると——我ながら、まるでストーカーのような所業だと自覚しているが、それでも彼女から険しい気配は感じない。軽く足を伸ばすと——彼女は突然走り出す。走り去っていった、というべきか。闇に触れてはならない——だが——俺は彼女を追って駆け出していた……！

彼女に後ろを気にする素振りはない。ならば、俺から逃げているわけではないのだろう。だとしたら、あんなに急いでどこに行くのか——それも、あのような格好で——見れば、胸のあたりを両手で隠している。これまで一切恥じらう様子がなかったというのに、ここにきて——？ しかし、そんな女性を追い回していると見なされれば、俺は黒服に連行されてしまうかもしれない。だが、それでも……！

少し手前で彼女は急に走りを止める。何故なら、信号が赤だったから。別段、急いでいるわけではないらしい。意表を突かれて——俺はつい彼女の隣に並んでしまった。そして至近距離で目が合う。どうやら、彼女は俺の尾行に気づいていなかったわけではなかったらしい。にも関わらず——なんと彼女の方から話しかけてきた。

「お疲れ様ですっ!」

マスクの覗き穴から楽しそうな瞳が覗いている。

「もしかして、コースがご一緒なのでしょうか」

「こ、コース……?」

「はいっ! ランニングの!」

ら、ランニング……だと……!?

そうこうしているうちに、信号が青になった。

「では、行きましようっ!」

そう言つて彼女は——再び両手で胸を隠して走り始める。俺も——どうやら同じコースをランニング中ということになっていようなので、彼女に釣られて続いていた。

しかし、そんな格好で並走されると、やはりその胸が気になってしまふ……! どうしても視線、もしくは意識を抑えることができず——それは隣を走る彼女にも伝わってしまったようだ。

「あ、こちらはお気になさらず。コーチから胸を極端に揺らすようなことは控えるようにと言われているのでっ」

どうやら、胸を隠しているわけではなく、手で乳揺れを押さえている、ということら

しい。なのに、ブラを着けることも許されないとばかりかしている。それでも、特訓の後にはひとつ走りしないと落ち着かなくて——彼女は屈託なく笑うが、俺が気になるのはそこではない。

「コーチ、というのは……？」

誰かの指示でこのようなことを行っているのだとすれば、それを指示できるほどの人物とは何者なんだ……？ 新歌舞伎町の闇の主か？

「はいっ、私はいま、全裸トレーニングの最中なのですっ！」

走りながら——俺は闇の正体を知ってしまった。TRK26——そのうちはるえ園内 晴恵と名

乗る彼女はストリップ・アイドル・ユニットの一員なのだという。つまり、風俗嬢だ。なるほど……そういう仕事であれば、裏にその道の組織があってもおかしくはない。

「そこですね……一ヶ月全裸で生活するよう指導を受けているのです！」

彼女に何があったのかわからない。しかし、全裸で生活していても警察も手を出せないのだから、闇の噂は本物だったということだ。

また信号待ちであるため、晴恵ちゃんは足を止める。本来のジョギングであれば待機中もステップだけは止めないものだが、胸に負担を掛けないよう——いや、そんなに腕を上げて伸びをされては——俺だけでなく、誰もが彼女を注視してしまう……！

俺もまた、晴恵ちゃんの裸体を舐めるように見ていたからか——逆に晴恵ちゃんから

の視線に気づくのが遅れた。

「むむう……つかぬことをお尋ねしますが」

それはまるで、俺の股間に話しかけるように。

「殿方のおちんちんは……上下に振り続けても折れたりしないのでしょうか」

風俗嬢だけに淫語に対する抵抗もないようだ。

「そ、それは……そうだな……うん」

晴恵ちゃん自身が気にしているのはクーパー靱帯のことだと思われるが……風俗嬢にしては男の性器カラダに対して理解が薄い。しかし、興味はあるようだ。恥じることなく、俺の股間を凝視している。こちらも凝視しているのだからお互い様か。それもあって——すっかり雄々しくなってしまうところを。

そして、晴恵ちゃんも——とんでもないことを言い出した。

「もしよろしければ……一緒にトレーニングいたしませんか!？」

「そ、それは……!？」

裸の女性から誘われることといえは……!

「やはり、開放的な気分で走っていると……清々しいですよー」

まさか……本気で走るだけ……? いや、しかし……俺にも脱げと言っているのだから、ただ走るだけで済むはずがない。何より、ここは新歌舞伎町——そのような行為が

許される唯一の場所だとするならば——

あれから俺は毎日ジムに通つてみたが、晴恵ちゃんと再び出会うことはなかつた。どうやら、普段はプライベートジムでトレーニングをしており、外のジムを利用したのはほんの気まぐれか、スケジュールの都合か……ともかくレアケースだったらしい。

新歌舞伎町の闇としては、晴恵ちゃんだけでなく他の女のコと遭遇することもあるらしいが——不思議と俺は晴恵ちゃんのことばかりが気になつてしまふ。それは、一度共にトレーニングを交わしたからだけではなく——あのカラッとした明るい色気に惹かれてしまったのかもしれない。

また偶然出逢えれば——などとケチ臭いことを言える相手ではないのだろう。闇に触れたければ深淵を覗くべし——TRK劇場——そこに彼女はいるのだから。

萩名里美

ぶつちやけた話、事務職ならどこでも良かった、というのが主な志望動機である。別段アダルトコンテンツに抵抗もなかったもので、この会社を選んだ。競争率も低いと思つて。……実際のところは期待したほどでもなかったのだけだ。

ただ、女性社員に対する風当たりは非常に穏やかだ。まあ、そんな企業で被害者として声を上げたら致命的な大問題、ということもあつて。

だから、これまで女だから、という理由で仕事を押し付けられたことはなかった。なので、むしろ今回の件には驚かされたといえる。

ストリッパ・アイドル・ユニット『TRK26』——業界の人間として、その名前くらいは聞いている。ストリッパでありながら、ステージ演出に対して大真面目に取り組んでいるという。ただ、実物は観たことがない。けど、そのような評判が立つのだから、うちで扱っているアイドルモノ——前半で適当に唄った後、後半では何の脈絡もなく普通のAV……のような雑なことはないのだろう、多分。

で、これまでは山岸先輩がTRK担当として、MVと呼ぶには過激な企画を持ち込んでいたが……まさかの途中降板……というわけではなく、今回の案件だけは私に受け

持つて欲しい、ということのようだ。

引き継ぎ資料には目を通してある。……いわゆる、典型的なオフィスラブだ。一応M Vのような体裁にはなっているが、観る側にとってそれはどうでもいいことだろう。

ともかく、今日は来週の撮影に向けて最終確認である。ほとんどの大枠は決まっているので、私がいまさらひっくり返す要素もなければ、ひっくり返してまで撮りたいジャンルでもない。

打ち合わせは十四時からで——その五分前に私の端末に来客ありのメッセージが入った。もちろん、こちらでも対応の準備はできている。お待たせすることなく、私は小会議室Bへと向かった。

ノックをして。

「失礼します」

扉を開けて中に入ったところで——

「……!?!」

——私は固まる。

TRK事務所からお越しの、今回の企画担当である 萩名^{はぎな}氏の令嬢^さ、里美^{さとみ}様は当然先に待っていた。萩名氏といえ、アダルト動画の大手であるライブネットの社長一族のひとり娘であり——萩名嬢は色々あって单身TRK劇場へと移り、そこでその経営手

腕を振るつてしていると聞いていた。

あくまで、経営手腕を。

なのに、この様子は——完全に、女優そのものとして——！

大きな胸——綺麗な乳輪にかかるゲストカードのストラップ——全裸勤務は弊社の人気シリーズではある。とはいえアレは、期間限定の契約社員として籍を置いただけの外部女優であつて——というか、萩名嬢が弊社に移籍してきたという話は——いや、今日はTRK事務局との打ち合わせのはずで——!?

錯乱して頭が追いつかない私を見つめて——萩名嬢は不思議そうに椅子から腰を上げる。小会議室はちよつとした机にふたつの椅子が左右に合計四つだけ。それにホワイトボード。距離が近すぎて心の準備もままならない。

「あら、山岸さまは……?」

「やつ、山岸から引き継ぎましたつ、南と申します……つ」

ふ、普通に……振る舞っている……全裸なのに……! うわ、うわ、いや、女子の裸なんて会社中にあふれてるけど……ああ、撮影に同伴したことはなかったか。銭湯みたいなものだと思ひ込もうにも……会議室で全裸つて……違和感がスゴすぎる……!

「それでは、改めてご挨拶させていただきますね」

萩名嬢がハンドバッグから取り出したのは……名刺入れ……! そして、そこから取

り出したのは――

「わたくし、TRK劇場にて踊り子兼企画を務めております萩名里美と申します」

ぬ、名刺――！ 本物だ……本物の……萩名里美嬢の名刺だ……！ も、もちろん

こつちも交換するつもりで持参はしてきてるけど……うわ、うわ、背、ちっちゃ……！

なのに、おっぱいはビックリするほど大きくて……乳輪、綺麗……こんなに大きいのに

垂れてなくて、張りもあつて……下から見上げてくるの……そんな、ニコつと微笑ま

れたら……可愛い……可愛い……！ 全裸だけど……！ うわ、どうしよう……っ！

「このような装いで失礼いたしました。実は、劇場の方で、全裸生活という企画を実施中でして」

装いも何も、靴しか履いてないんですけど……！

というか、全裸生活って何……！

いきなりのごで大変キョドってしまったけれど――ああ、一歩間違えればコレ、セクハラ事案だったわ。何しろ、性的な企画に女性社員を巻き込んだわけだから。とはいえ、相手が萩名嬢だけに情状酌量の余地はある。全裸の萩名嬢を男性社員がお迎えするなど……うん、無理。嬢本人がいつて言つても、絶対無理だわ。

しかも、この全裸生活というのは、なんとカメラが回つていない。あとで――これもまた劇場の別の企画で、トークのネタとして報告するのだとか。一ヶ月間全裸のまま、

できる限り日常通りの生活を送ったうえで。というか、もう十一月なんだけど。外移動は車だとしても、絶対寒いわ。

小さな机で向かい合ってふたりきり。萩名嬢は滔々と会議を進めているけれど、いろんな思考がグルグル回っていて……あーもう！ おっぱいが気になって話が頭に入っていない！

「大筋は固まっていると承知しているのですけれど……」

今回はTRK所属のみずうら水裏理々さんを軸にしたレンタルオフィスでの撮影と決まっている。ぶつちやけ、弊社の都合で。

先日、うちのスタッフが壁に穴をブチ空ける大失態をやらかして……事実上の出禁を食らってしまったものの、あのハコが使えなくなると、様々な撮影で支障を来す。

で、あの管理人がリリちゃんのファンということで——とりあえず、リリちゃんの撮影なら、ということで許可が下りた。つまり、和策策というか、懐柔策というか、そんな感じである。なので、それ以上の奇抜なことではできない。

だが——議事録から察するに、萩名嬢が一貫して主張しているのは社内調教——オフィスのセットを組み込んだSMプレイなんて始めたら、今度こそ管理人から永久追放を言い渡されかねない。

もちろん私は、山岸さんの意向をそのまま引き継ぐつもりだった。しかし、萩名嬢は

——担当者が変わったことでワンチャンありそう、という勢いで迫ってくる。

「オフィスだけでなく廊下まで撮影可能なあの設備を活かすには、単純な室内での会話だけに留めず——！」

と食い入ってくるけど……おっぱいが……おっぱいが気になって……！

萩名嬢は今回の撮影に思うところがあるようで、やたらとSM調教の素晴らしさを説いてくる。とはいえ……私、そういう特殊なジャンルは……すいません！

「わたくしが自ら縛られてお見せできれば一番なのですけれど」

「いえっ、いえっ、私、そんなのできませんからっ！」

というか、恐れ多すぎるっ！

「ご心配なく、わたくしでしたら自分の身体を縛るのにも慣れておりますので」

そ、そうなんだ……けど、何で？

「ただ……今月は全裸生活月間ですから」

「はい」

「認められているのは肩に掛けるストラップひとつまでで、緊縛は着衣という扱いになってしまうようでした」

「そ、そうなんですか……？」

ま、まあ……簀巻きっぽくロープでグルグルに巻いたらある種のボンテージファッ

シヨンになつちやう、ということでもそういう線引きになつてゐるんだろうけど……全裸の本人にロープは無理、と言われてもある意味納得できない。縛りも全裸も変わらない……というか、縛つた方がエロいでしょ！

このとき私は——とにかく、自分の視線の制御に精一杯で——机に乗つたおっぱいは気になるけれど、おっぱいばかりジロジロ見ているのは失礼だし——そんな葛藤に苛まれていて気づかなかつた。何となく、萩名嬢の視線も——エロい。まるで、私の身体を品定めするように。

そしてこんなとき、同性からの言葉選びには遠慮がない。

「南さま……貴女、いい身体をされておりますね」

「えっ、えっ?」

話の流れからして……非常にヤバイのでは……? 萩名嬢は再びハンドバッグに手を入れて——取り出したのは、今度は——

「やはり、こういうものは実際にお見せするのが一番お伝えしやすいものですから」

赤い——荒縄——!? この人、そんなもの持ち歩いてるの……!? いや、最初から自身の提案を持ち込むつもりだったのだから——これは、確信的に——!

「……けれど、ふむ、担当者之急遽女性に変えていただけただけなのは、こちらにとつても都合が良かったかもしれませぬね」

どうやら萩名嬢からしても、これは予想外の事態だったらしい。それでも、決して物怖じすることなく――!

「心配しないでくださいませ。痛くすることはありませんし、女性同士でもありますし――」

いや、いや、これ、断れる雰囲気じゃない、というか……けど、え、ちよ、マジで？
ひ、ひ……ひいいいいいい!?

ともかく、ミーティングは終わった。着衣の乱れも、里美嬢直々のチェックできちんと整えている。そして、前任者である山岸さんにも議事録を送っておいた。すると――先輩は血相を変えてすっ飛んでくる。

「おいおいおいおい! 骨子は変えないように、つて言っただろ!」

確かに、そのようには聞いていた。けれど……現担当者は私である。

「今回の撮影は、こちらの方が水裏さんの魅力を引き出せると思ひまして」

ある意味、今回の撮影に社運が懸かっていることは承知しているつもりだ。次、変なことをやらかしたら、それこそ始末書レベルでは済まないかもしれない。だとしても――

「お任せください。何とかいたします」

この言葉には何の根拠もない。それは山岸先輩も察しているようだ。

「……南に任せたのは失敗だったかなあ」

もし自分がしくじれば、前任者であり先輩でもある山岸さんが尻拭いをするものだろう。そこまで迷惑を掛けたくないし、何より——私は、里美嬢の理想を実現したい。何故ならば——

「……まさか、何か弱みを握られてんじゃないだろうーな」

先輩からの当てずっぽうの軽口に、私は思わず頬が熱くなる。よ、弱みなんて握られていません！ だって……撮影は、私のスマホで行われたのだから。

これは……消すには惜しい気がして……けど、絶対誰にも見られるわけにはいかなくて……！

初めてのことで、私の感情は複雑だ。けど……経営者たる里美嬢が、自らカメラの前に立ちたがる気持ち、少しだけわかった気がする。

天菊まこ2

最近、この大学では奇妙なことが起きている。

そしてそれは、今日も起きていた。

俺は二限目からだだったので、のんびりと余裕ある時間に登校している。もちろん、俺に限らず、同じスケジュールで動いている学生ならこの時間帯に集まってくるのだろう。

登校の基本は徒歩だ。駅から十五分と少々遠いが大学とをつなぐ商店街は賑やかだし、一〇時も過ぎていれば大抵の店は開いている。まあ、授業のことを考えればのんびり買い物をなどしているほどの余裕もないが。それでも、昼飯はどうするか、などと思いを馳せることくらいはできる。

そんな中——いるんだよなあ、車で登校してくるヤツが。とはいえ、この大学に学生用の駐車場などない。ゆえに、そういう連中つてのは得てして彼氏に送ってもらっている女子であり——昨晚もお楽しみだったんだろうなあ、などと余計な想像に苛まれてため息が絶えない。

そんな憂鬱をひっくり返してくれたのが彼女である。

「うひひひ……寒い寒い寒い！　ほんとアホじゃないの、この企画考えた人！」

悪態をつきながら出てきたサイドテールの女のコは——確かに寒そうだ。何しろ——服を着ていない。いや、まったく何ひとつ着ていないわけではない。肘を超えるほど長い手袋と、ヒザ下までのブーツ、それにマフラーはしている。あと、猫耳のついた耳あても。だが、そのくらいだ。他には何も着ていない。今日は車から出てくるところから目撃してしまったため——正面から目撃してしまったため——彼女の胸は、標準よりやや控えめ、といったところか。しかし乳輪はそのサイズに見合った小ささでそこはかとなく可愛く見えるし——女子の乳首つて寒いと勃つんだっけ？　そういうところもしつかりと自己主張していた。

下腹部にも何も着けておらず——ふわつとした毛の奥にぶら下がるものは見えないため、確かに女のコであることは間違いない。そんな彼女は通学用の薄いカバンだけを持って——よほど寒いのだろう。せかせかとキャンパスへと駆け込んでいく。俺以外の学生たちも軒並み振り返り——足を止めてガン見している者もいる。とにかく、俺の目がおかしくなったわけではなく——いや、俺の目が何らかの異常をきたしている可能性は拭いきれないが——ともかく、彼女が道行く人々の視線に留まる容姿をしていることは間違いないということだ。

この状況は当然大学側も認知している。先日、公式ページのお知らせが更新されてい

た。

——当大学の敷地内における『服装』について、大学側は一切関知しない。各々過ごしやすい服装で登校するように——

アレを服装と呼んで良いものか……？　　というか、本人寒い寒いと震えてたんだが。過ごしやすいとは到底思えない。

さて、二限目の授業は終わったものの、三限目には何も入っておらず、四限目にはまた講義だ。この虫食いスケジュールはどうにかしてほしいが、単位の都合上仕方がない。

昼休みまで含めれば一旦帰宅できるほどの猶予はあるが、無駄に二往復するのも忍びない。これも、二限目の縁だろう、ということ、昼は学食で食べることにした。

すると——

「まこちゃん、三限何の授業？」

「んー、あたし何も入ってないから、一階でレポート進めようと思って」

この時間の学食は当然混む。だからって……全裸の女子がこும்自然に紛れるか!? さすがに、すぐ左隣の席は空いている。が、右隣は友人と思われる女子が座っているし、その正面にも……普通に話してるぞ、大丈夫か。ああいう態度を取られると自分がおかしくなったようで不安になるが、あの一団以外はやっぱりチラチラとかなり気にしているの、まこちゃん？　の友人らの方がおかしいのだろう。ちなみに、長手袋はそ

のままだが、マフラーと猫耳は、室内だからか着けていない。寒かろうに。

まこちゃんはミートソースの Pasta を食べ終えると、トレイを持って女友だちと共に食器返却口の方へと向かっていく。ぷりぷりと振られるお尻が可愛い。

が、見惚れている場合ではなく——俺は自分のカレーを大急ぎで平らげ——二階の食堂から一階の休憩スペースへ。こっちは売店で買ったり弁当を持参した連中が席だけを確保するためにやってくるフロアだが——おいおい、本当にこの中に全裸の女子がいるのかよ。紛れすぎててわかんねーぞ。お前らもお前らだ。全裸の女子がいるんだからもう少し挙動不審な反応を見せろ。

昼休みが終わりに近づくに連れて、人も徐々に捌けてくる。それで理解したんだが……どうやらまこちゃんはこの部屋にはいなかったらしい。おい、ここでレポート進めるんじやなかったのか。どこへ行った、まこちゃん。

さらに時間が経つと、席はいよいよガランとしてくる。ほとんどの学生が三限目の講義へと旅立っているのだろう。

そして、あつという間に寂しくなってしまった。そんな休憩スペースに立ち尽くす俺。何かアホみたいだぞ。とりあえず、温かいものでも飲みながら、休憩スペースで休憩でもするか。どうせやることもないし。

ということ、自販機で缶のロイヤルミルクティーを購入。もちろんホットの。商品

を取って振り向くと――

……まこちゃん!?

どこ行つてたんだよ、まこちゃん！ さつきまでいかなかったじゃねーか！ しかも、こんな近くに――た、確かに裸みたいだな……。ふわつと膨らんだ胸にぶくつと膨らんだ乳首――肌の熱気が触れなくても伝わってくるようだ。

つい乳首に釘付けになってしまった俺に、まこちゃんは怪訝な目を向ける。……ああ、邪魔だったか。まこちゃんも飲み物買いに来たんだろうし。ということでも速やかに横へ退いて――それでも、ついまこちゃんの挙動が気になってしまう。まこちゃんもまた俺と同じロイヤルミルクティーのボタンを押して、スマホ決済――だが――？

「…………？」

商品が出てこないため、もう一度押してスマホをタッチパネルに押し当てる。まこちゃんは首を傾げているが、俺はここで気がついた。

「…………譲りましようか？」

売り切れランプ――どうやら俺のが最後の一本だったらしい。それで、まこちゃんも気づいたようだ。

が、しかし。

「あつ、いえ、それならココアにするんで」

別段ロイヤルミルクティーに強いこだわりはなかったようだ。とはいえ……
「冷たっ!」

膝を曲げずに屈んだので、後ろから女のコの深いところまで見えてしまった。お尻までつながる割れ目——紐のTバックのようなものさえなく、本当に何も穿いていないらしい。思わず後ろから見惚れてしまったが、そんなまこちゃんは缶を取り出そうとして、思わず手を引つ込めている。それ、コールド商品だぞ……よく見て買わないから。

「……交換しましょうか?」

いまならまだ温いし。俺は十分熱をもらったし。

「え、でも……」

いきなりなこと——予想外のミスもあって少々混乱気味のようなので、俺は、つい。
「その格好で冷たい飲み物は酷でしょう」

まこちゃんは——まるで禁忌に触れたかのような反応——王様が裸であることには触れてはならなかったのか——まこちゃんは急に恥ずかしそうに俺を睨みながら胸と股間を両手で隠したが——胸に当たったココア缶が冷たかったのかすぐに手を胸から離して

「……ありがたく頂戴します……」

ガクリと肩を落として手を差し出すまこちゃん。このミルクティーで少しでも温まっ

てくれれば良いのだが。

ともあれ、先程の反応によって、本人も全裸であることを自覚していることはわかった。まこちゃんさん——と呼んでみたところ——

「天菊まあまぎくこよ。これでもアイドルやってるの」

と、スマホでホームページを開いて見せつけてきた。

そんな感じで……俺たちはいま、休憩スペースで椅子を隣り合わせて座っている。天菊さんが見せてくれたサイトは『TRK26』——

「ストリップ・アイドル……？」

聞いたことないが、サイトはちゃんとしているし、何より、ストリップ・アイドルである証拠として——

「あつ、ストリップ・アイドルだからって、みんな常々全裸で生活してるわけじゃないからね!」

どうやら違ったらしい。

「唄って踊って……そんなでもって、脱ぐ……それがストリップ・アイドルよ!」

「脱ぐ……？」

袖袋とブーツをか……？

「ステージに上がるときはちゃんと衣装着るのよ! で、それを脱ぐの! う……」

アーカイブ動画見せてやりたいわー……」

ステージに上がるためにわざわざ衣装を着て、それをステージ上で改めて脱ぐというのも何だかシュールだ。

「いまは……というか、今月は特別なよ。全裸生活ってゆって、全裸で生活する企画中で」

「まんまだな」

「まんまとかゆるな」

しかもこの全裸生活とやら、できる限り日常通りの生活を送ることで、そのギャップを報告する、というのが趣旨らしく、このように大学も普通に通っているらしい。

……いや、普通か？

「大学側に相談したら、普通に全裸で登校していい、って許可が降りて……」

「すげーな」

許可というより放任って感じだったが。

「友人らも何か自然に受け入れちゃって……騒ぎにもならないし」

「騒いでほしいのか？」

「いや、大学で騒がれても困るけど」

とはいえ、複雑な心境なのはわかる。二階の食堂でも無茶苦茶馴染んでたしな。おそ

らく、講義も普通に受けているのだろう。

「……ねえ、こういうこと訊くのもセクハラかもだけど……」

と、全裸の女が妙なことを言い出した。

「……チンチン立ってる？」

実のところ……いままで寝てた。あまりにも平然としすぎてて。けど、いきなり性を意識するようなことを言い出したもんだから。

「見てみるか？」

「ちよつとだけ」

机の下でズボンの前をこつそり緩める俺。隣の女は全裸なのに何を気にしてんだ、つて感じだが。

「……ほつ、良かった。みんなあまりに無反応だから、心配になってて」

「その心配はいらなと思うぞ」

「え？」

天菊さんは可愛い——胸の大きさについては好みがあると思うが、俺の価値観では可愛いと思う。そんな気持ちがつい裸になってしまい——頬が熱くなるのが自分でもわかった。

それは天菊さんも同じようで。

「ふっ、ふんっ、だってあたし、アイドルだからね！」

その可愛らしい胸を見せつけるように背を反らして誇張してくる。だが——内心俺は複雑な心境だ。天菊さんは確かに可愛いし、ムスコもこうして反応しているもの——別段セックスがしたいかという……？ 天菊さんはそんなことしなくても可愛いと思う。こうして、普通に話しているだけでも。

「……あつ、良かったらあたしのファンクラブに入らない？ まな板ショーつてゆつて、あたしとエッチできるサービスマもあるんだけど……？」

天菊さんはチラチラと照れくさそうにこちらを窺っているけれど……それについてはいま自分の中で決着したばかりだ。

でも——それとは別に、天菊さんのファンにはなってしまうている気がする。授業が終わったら劇場まで直行せずにはいられないだろうな、こりや。

檜しとれ3

この間、メイドデリヘルに行つてみた。いや、デリヘルなので呼び出した——もしくは、利用した、と表現するのが適切のかもしれないが。ともかく、俺はホテルでメイドさんとエッチなことをした。しかし、絶望した。何故なら——俺は、メイドさんを愛するご主人さまなのだから——

エッチなメイドさんからエッチなサービスを——膨らんだ期待は脱いでいくメイド服と共に散つていった。我ながら、そこまで深く考えていなかったことが悔やまれる。メイドさんは——メイド服を脱いだメイドさんは、ただの風俗嬢にすぎなかっただなんて——

一先ず又いてはもらったが——心が満たされることはない。そこにいたのは、俺のことを『ご主人さま』と呼ぶだけの風俗嬢である。身体は反応すれこそ心は反応しない。結局のところ——きつと、過大な期待を膨らませすぎただけなのだろう、と諦めた。

ここで、メイドさんについて改めて考え直そう。先ず、実生活にメイドさんはいない。いや、いるところにはいるかもしれないが、一般人の日常には存在しない。家事手伝いサービスに来てくれたオバチャンにメイド服を着せたところで、それをメイドさんと呼

ぶことは難しいだろう。

つまり、我々が普段目にしてているメイドさん——メイドと認識している存在は、空想上の生き物なのである。

空想上の世界では、メイドさんはメイドさんである。ゆえに、メイド服を脱いでもメイドさんである。そんなメイドさんにエッチなサービスをしてもらう——それは夢見すぎだったということだ。メイドさんとは、エルフや魔法少女のような架空の存在だったのである。

——などと諦めることはできない。何故なら、メイドさんはかつて実在し、いまも世界のどこかでは存在しているのだから。もちろん、大富豪となれば雇うことは可能だろう。……ただ、エッチなサービスまで含むとなると日本の法律ではわからないが。そもそも、いまから地道に大富豪を目指していくのも先が長すぎる。

そこで、俺が次に訪れたのはメイドセクキャバである。性的サービスという意味ではデリヘルより一段劣る。しかし、ここではメイド服を脱ぐことはない。あくまでおっぱいを愛でるだけである。これならば、まだメイドさんを感じることもできるかもしれない——そう考えたのだ。

メイドセクキャバ『メイド・イン・ヘブン』——同じような名前の店舗、および、作品タイトルが世界に一体どれだけあることだろうか。きつと、メイドの歴史と同じ数だ

けあるのだろう。新歌舞伎町の雑居ビル五階に構えているのも、そんな安直な店のひとつだ。

飲食店たるもの、必要以上に性を誇張してはならない——と、メイドさんが一度滅ぼされたのが半世紀ほどまえのことか。その後復活して、いまではこうしてメイドセクキャバまで隆盛している。風俗産業を厳罰化したところで結局は地下に潜って半グレの資金源になるだけ。ゆえに、合法化して適切に管理しなくては誰も幸せになれない。禁酒法が二〇世紀のことなので、人類は百年ごとに同じ失敗を繰り返すのだろう。

それはさておき。

メイドセクキャバはあくまで飲食店——下半身まで世話しては風俗店としての資格が必要になる。それがたとえ建前であっても、表面上は守らなくてはならない。だが、おっぱいサービスでムラムラした男の股間を、そのままにしておくことなどできようか……っ！

建前は建前。店としては関知していない。しかし、星印の付いた特別ドリンクを注文すると——！

グラスの中には精力剤配合なのだから徹底している。ただし、ここから先は客次第、女のコ次第。どうやら、星印メニューの注文が入ると、女のコに臨時ボーナスが入るようだ。ゆえに、先ずは何度か通って仲良くなること——ぶっちゃけ、覆面調査のために潜

入するほど警察も暇ではない。ゆえに、警戒すべきはどちらかといえば同業者なのだろう。下半身へのサービスの証拠を掴んで警察にタレ込めば——さすがに警察も動かざるを得ず、ライバル店を営業停止に追い込める。ま、すぐに名前を変えて復活するのが、それまで積み重ねてきた信頼が崩されることは否めない。

俺は、メイドさんを愛するご主人さまである。ゆえに、お店のメイドさんともすぐに打ち解け——マミちゃん、リンカちゃん、エイラちゃんあたりは——イクところまでサービスしてくれるようになった。

——今日も、長椅子にメイドさんを侍らせながら、俺は思う。やはり、ビジネスホテルにメイドさんと呼んでもダメなのだ。この店内を見よ。中世ヨーロッパを思わせる……壁紙。いや、本物でなくてもいいんだよ。こういうのは雰囲気大切なのだから。この雰囲気、メイドさんをメイドさんたらしめてくれる。本職のメイドさんではない彼女たちを、限りなく本職のメイドさんに近づけてくれるのだ。いや、マジで。この雰囲気の中でメイドさんからかきずかれながら——股間にかきずかれたら——

こうして俺は、ようやく求めていた理想の終着点を見出したのである。
だがしかし。

『サンタメイド・フェスティバル』

——バカな——！

メイド服に足し引きはいらない。

メイド服はメイド服としてすでに完成されているのである。

そこに——サンタ——だと——!/?

ホームページの写真を見て愕然とした。白いふわふわもこもこに真つ赤な生地——これが——メイド——?!

否ッ! これはサンタだ!

ただのサンタだッ!

断じてメイドなどではないッ!!

メイドキャバクラはそこらのコスプレ居酒屋のようにデコレーションするな!

メイドさんはなあ……メイドさんは……

メイドさんなんだよ……ッ!!

……と一頻り憤ったところで、俺には『来店拒否』という選択肢しかない。この店に行き着いてから、一度も行かなかつた月はなかつただろう。だからこそ、女のコの方からもお誘いのメッセージも送られてくる。

リンカちゃん——俺が認めたメイドさんともなれば、露骨な営業メッセージを送ってくることはない。『サンタの衣装、初めてなのですがとても可愛らしいです』——と写真つきで。写真は腕ブラ&セルフスカート捲りで。パンツは穿いていない。ちゃんと星

印サービスできますよ、というメッセージを込めて。

だが、俺からの返信は簡素に。

『また来月行きます』

褒めもしない。あえて、忙しいからとか理由もつけない。俺が好きなのはメイドさんなのだ。サンタコスなどと邪道なイベントに興味はない。

ただ——店に対して一定の信頼は置いている。別の街のメイド喫茶ではやれ水着だ、やれハロウィンだと浮かれ尽くしていた中、ここだけはしつかりとメイド服を守ってきた。だからこそ、今回の件にはやや驚いている。これはきつと店長の気の迷いだっただろう。シーズンが終われば……そこからさらに和服メイドなどいい始めることもないはずだ。

しかし——

これは……メイド欠乏症とでもいうべきか。それを見越して十一月の終わり——サントに侵食される直前にメイド納めとしてメイド分を補充していたというのに——今年いっぱいメイドさんに労ってもらえないのか——そう思っただけで、生きる気力が失われていく。できることなら、年明けまで冬眠したい。

だからこそ——その誘惑に抗えなかった。『三〇〇〇円クーポン』——とにかく来店させてしまえば、あとはなし崩しに——そんな思惑が見え透いている。甘く見られたも

のだ。他の浮ついた『自称・ご主人さま』ならともかく、俺の心が揺らぐことはない。だが——『メイド・イン・ヘブン』——そこは思っていたより、俺の心の拠り所天国になつていたようだ。

何円引きクーポンには、得てして何円以上お買い上げの場合、と条件がつく。だが——『クーポン分だけ飲んでお出掛けされてもOK』——ああ、『お出掛け』というのは店のことだ。来店時は『お帰りなさいませ』で、退店時は『行つてらっしゃいませ』——これはメイド界限では常識の挨拶である。つまり、クーポン分だけ呑んで帰つてもいい、ということだ。もちろん、そうさせてもらうつもりだが——店側の強い自信も感じる。

しかし、それは俺の買いかぶりだったようだ。店の扉を開けてみると——これには愕然とせざるを得ない。シツクな内装が無駄にキラキラしたデコレーションにより侵食され——キンキンしたクリスマスミュージックなんて流されたら、メイド空間が台無しである。

席で寄り添ってくれるリンカちゃん——クーポンを送ってくれたメイドさんだが——彼女には申し訳ないけれど……やっぱりそんなサンタサンタしい装いではメイドさんと呑んでいる気分にはなれない。

きつちり三〇〇〇円分呑んだところで――

「あ、ちよつと待つててもらえますか？」

言つて、リンカちゃんはさつと席を立つ。だが、これ以上何を注文するつもりもないぞ。リンカちゃんならわかつてゐる。俺のテンションも――股間も全然盛り上がつていないことくらい。

俺を待たせて何を企んでいるか知らないが、財布の紐をきつく縛つて暇潰しにスマホをブチブチといじつてゐると――

「……こちら、よろしいでしょうか」

その声で顔を上げると、そこにいたのは――

メイドさんだった。

サンタじゃない――メイドさんである。

サンタを意識した赤い袖袋。

赤い膝下ブーツ。

まったくメイドさんらしくない。

服装にメイドの要素など何も無い。

なのに、メイドのオーラを感じてしまう。

何故ならば――

俺の胸は高鳴るところか停止してしまっているかもしれない。

そんな天にも昇る気持ちで——ポツリと小さく呼びかける。

「メイド☆スター……」

今宵、メイドキャバクラに舞い降りたのは——

綺麗に足を揃え、

背筋を伸ばし、

両手はお腹に——

実のところ、メイド喫茶のミニライブなんて邪道だと思っていた。ゆえに、本人と相対するのは初めてのことである。ホームページで写真も見たことはあったが——多少の美人ではあるものの、メイドらしさが足りない分、ステージで唄って踊って補う涙ぐましい小細工だと侮っていた。

が、しかし——俺の目の前にいるのは——

「……それはもう、昔の名ですよ」

メイド☆スター・しとれちゃん——いや、しとれさんは少し寂しそうに微笑む。そして、両手をこちらに差し出した。

「さあ、主人さま」

そこにメイドさん要素は何もない。袖袋とブーツだけ——他に着ているものは何も

ない——ここは、メイドセクキヤバ。飲食店であるがゆえに、下半身へのサービスは建前上禁止されているはず。

なのに——何も着ていない。

胸に隠す意志はなく、禁じ手となる下の割れ目——毛に覆われた女のコのそこまでありありと——

俺がメイドデリヘルに期待していた理想がそこにあつた。エッチなメイドさんにエッチなことを——しかし、現実にはメイド服を脱げばただの女——だったはず。だが、しとれさんは脱いでなお——裸になつてなお——メイドさんだった。俺の夢の終着点を、さらに軽々と超えている。それが、メイド☆スターとしての——貫禄——ッ！

この姿はメイド☆スターがゆえの特例か。もしくは、もはや目の錯覚か——俺は——俺は——！

普通の客なら一発で出禁になつていただろう。だが俺は、メイドを愛するご主人さまである。店側から特別クーポンが送られてくるほどの。

後注文になつてしまったが、しとれさんへの星印ドリンクもちやんと三杯分飲み干した。そして知る。彼女はいわゆる非常勤であり、正式に登録されていない——それが、あのような過剰サービスが許容——看過される理由——もしくは言い訳なのだ。

これまでメイド☆スターの動向には興味がなく、彼氏とのプライベート動画が流出して引退した、くらいしか聞いていなかった。が、いまではこの店の近所——『TRK劇場』という舞台上でストリップ・アイドルをしているらしい。

そこでの企画——一ヶ月間全裸生活——それこそ警察に摘発されかねないが、だましだましやっているようだ。その期間になると、しとれさんはこのようなサーブに興じるらしい。普通のメイド喫茶に出られない分、セクキャバの方を増やしているようだ……いや、上下全裸はセクキャバでもアウトなんだが、名目上は。

さて、リンカちゃんが俺にクーポンを送つても来店してもらいたかった理由——まあ、キャバ嬢が来てほしい理由なんてひとつしかないのだが——どうやら、このように間が空いてしまうと、それを機にキャバクラ通いを辞めてしまうご主人さまも少なくないようで、俺のような優良客——優良ご主人さまに丸一ヶ月も足を遠退かせることは店としてそのような懸念があったらしい。それで、クーポンを送り、ついでに、もう少しメイドに対する許容範囲を広げてもらえたら、とメイド☆スターをあてがってみたようだが——その目論見は半分成功して、半分は大失敗だといえよう。

確かに、許容範囲は広がった。メイドとしての作法を完璧に備えたメイド☆スターであれば、どんな服を着ているてもメイド然とできる——それは認めよう。

だからこそ——これからはTRK劇場とやらにも足を運ばなくてはならなくなった。

すでにしとれさんのファンクラブにも入会している。そこはメイドのための舞台ではない。が、メイド☆スターが、出演でするのは、そこはメイドライブと化す。

ひのき 檜しとれ——彼女こそ日本最後のメイドであり、メイド服を脱いでもメイドさんであり続けられるメイドさん——至上の性的御奉仕実現できる唯一のメイドさん——彼女のご主人さまであり続けられるよう、俺もメイドさんを愛し続けるつもりだ。

渋長優2

お疲れ様、しぶながゆう 渋長 優よ。先月、ランキング企画において二六人中二五位という不名誉な結果となってしまったため、今月は全裸で生活することになったわ。毎月恒例の全裸生活、というやつね。

とはいえ、十二月もこの時期ともなると大学も正月休みに入っているわ。そうなる
と、日常的にこれといって出掛ける理由もないでしょ。全裸でなくとも出掛ける気が失
せるほど外は寒い季節なのだから。食事についてはさきのひら 崎乃平さんが用意してくれるし
——用意はなくとも、カラオケ店ともなれば食糧に困ることはないし。レッスンについ
ては十階のミニステージを使っているから。この建物内で日常のすべてが成立するの
が大学のない時期の私の生活よ。

もちろん、劇場で仕事があることもあるけど。ただ——私は冒頭で述べた通り、不名
誉な順位だから。そんな私に、精力的に定番が巡ってくるようなこともないわ。それで
も基本的には優雅な生活を送らせてもらっているんで不満はないけど。

ただ、ここで問題が起きたわ。そんな私の暮らしぶりに懸念を示した たかばやし 高林秘書が
……まさか、あんな露骨に、カラオケボックスの私の部屋に刺客を送り込んでくるなん

て。

それは、まつはたあけみ
松畑 朱美。

松畑とは前職が同じだったこともあり、何かと絡んでて。まあ、一方的に絡まれてい
る感はあるけれど。それは今回の件も同様で。

この松畑という女の露出狂のケについては……まあ、メンバーやファンの間では周知
のことね。と、全裸の私がいつても説得力がないかもしれないけど、ともかく松畑は全
裸生活でなくても全裸になりたがっていて。それどころか、相手まで脱がしたがるのが
ヤバイ。どうやら、スキンシップが好きらしいわ。悪い意味での。

本来、松畑は徒歩一〇分のところにあるマンション——社宅に住んでいるのだけど。
なのに、今日からカラオケボックスにも部屋を用意されたって。ひとつ屋根の下で松畑
との全裸生活——事あるごとに抱きつき魔の目が光っているなど、地獄以外の何物でも
ないわ。つまり、全裸生活分の特別報酬を支給しているのだから、それ相応に話のネタ
になるよう行動を起こせ——それが高林秘書の意向ということね。

こんなことなら、大学に行っている間に何かレポートを用意しておけば良かったか
も、なんて思ったりもしたけれど、全裸生活が始まって一週間程度で大学は正月休みに
入っちゃったから。いまから思えば、黒塗りの高級車で送迎してもらえたんだから贅沢
なことだったわ。

そんなことを思いながら、私は外に出たのよ。全裸で。まだ明るい時間だけに、バス通りは今日も賑わっていて——私が姿を現しただけで、視界に映る人々の間に動揺が走るのがちよつと面白いわ。こんな街なのだから、そろそろ慣れてもらいたいものだけだ。人の循環も激しい環境だから仕方がないところもあるのかしらね。

さて、このような季節でなければ無料で時間を潰せる場所もあるけれど、この寒さの中で野外は厳しすぎるわ。なのに、屋内はどこもかしこも金を取るのよね。そんな中、無料で過ごせる場所を考えると、真つ先に思いついたのは……劇場、ということ。今日の出演はないけれど、出番がなければ赴いてはならないという理由はないでしょ。高林秘書の迷惑とは少々ずれてるかもしれないけど、カラオケボックスから劇場まで徒歩五分……いや、一〇分弱、といったところかしら。それだけ歩けばネタとも出会えるかもしれない、という期待もあつて。ネタができれば松畑も帰ってくれるかもしれないし。

それにしても……普通に着衣が許可されていても上着に厚着を重ねるような季節に全裸で踏破するのってどんだけ無茶苦茶な企画よ。コンビニやスパーでのバイト経験のある人は、冷蔵庫の中に全裸で放り込まれたと思ってくれればいいわ。この罰ゲームが如何に厳しいものか、よりリアルに想像できるでしょ。

なお、全裸で歩かされていることについては、罰というか、別に……って感じで。そ

もそも、私たちストリップパーだから。裸を見られることを恥じらつていては成り立たない。いくら自分の身体は商売道具だといつても宣伝は必要でしょ。特別報酬を受け取りながら宣伝活動をしていると思えば、これもまた無駄のない仕事の一環よね。何より、出番があればこのまま衣装を着ればいいのだし。だったら、私服を脱ぐ手間が省けるといふものよ。無駄な工程がひとつ取り除かれたと思えば、むしろこっちのテンションも上がるわ。ま、今日は私の出番なんてないのだけれど。

さて、新歌舞伎町という街は相変わらず平常運転でね。年末年始だから特別な催しがあるわけでもないし。いや、何らかのイベントにかこつけて年中派手にしたがる、という方が適切かも。歓楽街であり、客商売なのだから外に向けて売り込むのは当然のことともいえるでしょうけど。だから、一つひとつのイベント自体に深い意味はないんでしょうね。何らかの理由で金を落としてくれ、というだけのことで。気持ちはわかるわ。

そんな中を、私は全裸で歩いていく。このときの数少ない被服については、同僚であり先月の全裸生活担当だった天菊あまぎくが示してくれたわ。帽子やマフラーは許可されているからそれに倣い、あとは——アオズミライン——肩から外側と膝から下のみということで、膝丈ブーツと袖袋——なお、袖袋についてはプロデューサーに経費で買わせた——そんな装い。身体の中から冷えていくから焼け石に水かもしれないけど、天菊は

『次はカイロも仕込む!』などと意気込んでたわ。また最下位になるつもりかしらね。

と、いろんな工夫はしてみたところで……季節柄、結局寒空の下には一秒でも長く居たくないわけで。これはもう、走り出したいところだわ。激しい運動を課せば身体も温まりそうだし。けど、それは推奨されてないのよね。何しろ、この格好だから。中途半端に走れば何かの事件を疑われるかもしれないとか何とか。そのうち園内のようにきつちりしたフォームでランニングでもしていればまだしも。

なので腹を括って、私はしっかりと地に足を着けて歩かせてもらったわ。身体の芯から冷えきって、震えが止まらないっての。劇場には浴室もあって……毎週雑談の収録に使われているアレね。何故あんな音響の悪い部屋を使うのかはわからないけど、もちろん入浴料は無料。有料のスパなど使ってたまるか——そんな強い思いで、私は劇場に到着。

風呂にもゆっくり浸かって温まった後は、控室の方で自主練をさせてもらったわ。マットが敷かれている一角があつて、そこで……まあ、場所が場所だけにガッツリ練習つてよりは本番前の確認で使われるところだけ。で、その控室ではプロデューサーや高林秘書が事務仕事をしていることが多いのよね。今日もその例に漏れることなく——私の姿を見るなり、高林秘書は『何故来た』と言いたげな顔をしていたわ。こちらに非はないので、淡々と自主練に努めていたけど。

そんな中でも、高林秘書秘書から鋭い意識が飛んで来てたわね。自主練を積むのはむしろ推奨すべきでしょうに。ま、高林秘書の目は『違う、そうじゃない』と言っているような気がしたけど。

とはいえ、結局ここはある意味全裸であつても問題ない場所だから。話のネタになるようなことなど起こりようもなくて。とつと別の場所へ行つてレポートしてこい、と言わんばかりに暖房の設定温度を下げる高林秘書。彼女が席に戻ると入れ替わりで操作パネルの温度を上げる私。むしろ、元の温度より上げてやったかも。こちらは暇なのでそんなバトルを繰り返しても良かったけど、事務職ふたりの方が忙しいのですぐ諦めた模様。

とはいえ、高林秘書の気持ちもわからなくもないけどね。この全裸生活は法的にも完全にアウトだから。フィクションだけど。ともかくそのため、高林秘書が裏で色々と手を回してくれているっぽいよね。それをこのように無駄に浪費されては苦労が台無し、という思いはあるんですよ。

けど、実はそれだけじゃないのでは、と私は踏んでいて。

ここだけの話、高林秘書はプロデューサーとのふたりきりでの事務仕事を何気に楽しみにしているフシがない？ あの人、いわゆるワーカホリックだから。仕事をすることで人生が充実するんですよ。それがプロデューサーとふたりきりならばなおさらで。

他に人がいないとき、こつそりプロデューサーを食っているのでは、という噂もあるし。見たところ、今日の衣服に乱れはなかったけど。年末進行で余計なことをしている暇もないだけかもだけど。閑散期に全裸生活になった人は、試しに覗きに来てもらいたいのね。

さて。

適宜休みを入れながら夕方五時くらいになったかしら。櫛ひのきに出演予定が入っていたら、そろそろやってきて劇場の台所で夕飯を作る頃合いだけ——残念ながら今日はオフだったわ。ということは、夕飯は社宅の方。いや、カラオケボックスに戻れば崎乃平さんの夕飯があるけど、せっかく外に出たのにも通り、というのもがいしゅつぜん外出損な気がして。それに、徒歩一〇分で夕飯を食べられるのなら寒さも耐えられるから。あと、マンションには雪見ゆきみの部屋もあったはず。転がり込めば相手してもらえるかもしれない、という狙いもあって。けど、同建物内には松畑の部屋もある。雪見が留守の場合、それを理由に引きずり込まれるかもしれない。松畑の挙動は読めないのよね。いまだどつちにいるのか。

そんなことを考えながら本日二度目の冬空の下を歩いていると——とある男と目が合ったわ。ただの通行人とここまでしつかり目が合うのは珍しくない？ 普通は、こんなにガン見することはないでしょ。

おそらく——この街の初心者なのかしらね。ネルシャツにリュック——歳も若いし、買い物を終えてこれから帰ろうとしている大学生、といったところかしら。

男は突然のことに放心していらたみたいで——私が近づいてもまだ放心したまま——声を掛けたところでようやく我に返ったみたい。

お兄さん、いま、時間ある？——その問いに、『あつ、はい』なんて間抜けた返事が。せつかくアイドルが逆ナンしてるのに、未だ状況が飲み込めてなかつたみたい。私たちの知名度なんて、街の中でもこの程度なのね。

だから、私は堂々と言つてやつたわ。美味しいお店を紹介してほしいんだけど、つて。裸一貫で。金を持ってないのは明らかなのに。

その状況を把握した上で——男は『そ、それなら』と案内してくれたわ。口頭で伝えるのではなく、自ら先導して。思ったより頭の回る男で助かつたわ。

その間、色々と説明はしたわよ。自分はストリップ・アイドルであり、全裸生活の企画中で露頭に迷っている、と。そして、金は払えないが他に払えるものもある、とか意味深なことも。

これで、お互い誤解の余地はなくなつたわけで。劇場外での行為は控えるように、と言われているけれど、このような企画を強いているのだから、この手の接触は想定範囲内だと私は解釈しているわ。

こんなところで、私からの全裸レポートは以上よ。なお、ここに書かれていることはすべて創作としてのフィクションだから。

村月李冴

つい今しがた気づいたんだが、新歌舞伎町にスパができていたらしい。とはいえ……ゲーセンや映画館の類であればともかく、こんな街の風呂に入りたい、なんて思う人はあまりいないだろ。

しかし、いまの俺は緊急事態にある。まさか、うちの風呂が壊れて一週間も入れなくなるとは。汗を掻く季節でもないし二日・三日は平気だと思っていたが……今夜はバイトのシフトが入っている。臭っていたら店長からドヤされかねない。

そんなことに軽く頭を悩ませていたところで、俺は件のスパの前を通りがかったのだ。入り口の看板によると、タオルやシャンプー等は一式揃っているから手ぶらで入れるらしい。それに、ランドリーも完備で服を洗ってる間に身体も洗える、と。

……むむむ、そーいや、最近銭湯なんてあったか？ 少なくとも、うちの近所には思っているに足りない。となると、家に着替えとかを取りに戻っていたら、そこから銭湯のために改めて遠出しなくてはならないだろう。それは面倒くさい。

だったら——通りの人口密度から察するに、どうやら新歌舞伎町という街は日の出から午前中が最も静かな時間のようだ。この隙にさっと入って、さっと——服まで洗って

いたらそうもいかないけれど。ともかく、まあ、うん。時は金なり、ということ。この寒い季節にあまり外をウロウロしたくない、というのが最も大きいが。

そんなわけで、建物に入ると階段で二階へ。上がった先にはタッチパネル式の料金所があった。そこで金を支払って——男性……はこつちか——シユつと磨りガラスの自動ドアが開き、俺は脱衣所へと足を踏み入れる。

カラフルな背中の大男が跋扈してたらどうしよう、とそこだけは本当に不安だったが、跋扈どころか無人である。あ、いや、人の気配はするので完全貸し切り状態とはいかないが——ロツカーの空き具合からみても、ほぼほぼ無人で間違いないようだ。

そんなじゃあ、貸しタオルは……ふむ、まあ、二〇〇円程度なら良心価格だろう。ロツカーにしまう荷物といえは財布とかスマホとかその辺で、服は全部ランドリーに……つてこつちは高エ!? ぐ、ぐ……足元見やがってえ……! とはいえ、いまさら諦めて帰ることもできず……はあ、これも必要経費か。

だったら、洗濯料金含めて元を取るくらいスパを満喫してやる! とかそんな意気込みで浴室の方に入ってみると——

うをつ、アフロ……!?

……あー、いや、室内は広いし綺麗だし、快適そうではあったんだが……唯一いた先客が……アフロ……だと……っ!?

ま、まあ……髪型は個人の自由だが……アフロの人ってアフロのまま風呂に入るんだな……頭はどうやって洗うんだろうか……う？ そんなことを考え始めていたら……気になって仕方がない……ッ！

だが、ここは新歌舞伎町である。あのアフロも危険人物である可能性が高い。そうではなくてもジロジロ見るのは失礼だが。

と、いうことで……さり気なく相手と横並びの蛇口を陣取ること。少し離れたところから……チラリと覗く。ワシワシと身体を洗っているが……まあ、そのへんはどうでもいい。重要なのは髪だ。髪をどう洗うのか。それだけに注目していたのだが……チツ、やっぱりそう洗うもんじゃならしい。身体の泡を流し終えた後はそのまま浴槽の方へ。それで俺もさつと身体を洗って、同じように浴槽へと向かった。いまは浴室内とはいえ、外は寒かったので身体は冷えている。しっかりと湯船に浸かって身体を温めたい。

だが……何というか、混んでいる銭湯も落ち着かないが、ふたりきりというのも何だかな。あつちの男がいなければ独占できるのに、というよくわからん対抗意識も生まれてくる。この際だから、ヤツが出るまでこつちも出ないぞ……なんて下らない決意を固めたところで——ふむ、居づらいのは先方も同じだったらしい。ちよつとこつちに視線を向けて——ただ、ニコリと。俺と違って、別に敵対意図はないようだ。いや、敵対

どころか、むしろ全面降伏の様相である。殊勝なことに、とつと先に上がるべくアフロの方が浴槽から立ち上がった。

が――

――ん？

……え？

ん？ ん？ ん？

本来、見ず知らずの相手の身体を……それも股間をジロジロ見るものじゃない。だが

上はモジャモジャアフロのクセに下の毛はツルリと綺麗に剃り落としているから――だが、それが逆に彫刻というか、現実味のないものに見えた。何故なら――そこになら。男として、あるべきものが。

とはいえ、美術品のように省略されているわけではなく……綺麗な筋が一本切れ込んでいる。これは一体どういうことだ……？ いや、可能性はひとつしかないのだけだ。だが、どうして……？

何が起きているかわからないまま、アフロ男は――いや、男でないどころか、そのアフロさえも偽物だった。まるでシャワーキャップのように外されたアフロの中から溢れてくる長い髪は艶やかで――

そんな……彼女が、俺の方へとジャブジャブ近づいてきて……！ 俺はそれを見上げて——釘付けになっていて——何もできず、何も言えず、指一本動かすこともできず——

そして、彼女はこう言った。

「見るなら、こっちね」

俺の鼻先に下りてくるのは——胸——その先——左の乳首——そのまま抱きしめられてしまったら——薄い胸だと思っていたけど、ほんのりと柔らかさはあつて——それで——

あー……俺、いま、自分でも信じられねーけど……女のコと隣り合つて風呂に入つてゐるんだよな——……。

「——というわけで、すっかり温まつてから出ようと思つてね」

「あ、うん、はい」

というわけで、というのはどういうわけかというと——

「つたく、こんな極寒の時期に『全裸生活』になつちやうとかツイてないわー」

彼女は、むらつきりさえ村月 李冴えといつて、近所の劇場で踊り娘をしているらしい。とはいえ、こ

こは新歌舞伎町。ただの劇場ではなくストリップ劇場である。……まだそういうの

あつたんだな。

で、その劇場には『TRK26』というアイドルグループが所属しており……もちろん、ストリップ劇場のアイドルなので脱ぐようだが、そのグループの企画として、一ヶ月間全裸で生活することになったようだ。とはいえ、そういうときつて家に籠もるとか、外に出るときは服を着るもんだろ。外出まで全裸つて……警察、仕事しろ！

ああ、警察の仕事といえば、女子が男湯こつちに入ってるのもマズインじゃないか？

「……おつと、あんま騒さわぎにしない方がいいよね」

脱衣場の方の気配を察知して、李冴さんはタオルと一緒に置いていたアフロのウィッグを……慣れた手つきでひよいひよいと長い髪を中にまとめていく。そして、どこぞの爺さんがこつち側に入ってきたときには、すっかりアフロ男に戻っていた。す、すげえな……その変身っぷりもそうだけど、度胸の方も。

「じゃ、そろそろ上がつとくわー。人が増えてきたらやりにくいし」

そう言つて、今度はタオルの方を手に取る。

「あ、じゃあ、俺も……」

と同じように。だが……揃つて股間をタオルで隠してるけど、俺にはあつて、李冴さんにはないわけで。乳首についても、自分と比べてみるとその差は歴然だ。乳輪だつて綺麗な色してるし。よく見たらバレそうなものだけど、同性の裸体をジロジロ見る男も

そういないようだ。身体を洗い始めた爺さんの後ろを俺たちは堂々と退室していく。

そして、本来であればこれから着替えるわけだけど……李冴さんのロッカーにはスマホがひとつだけ。それも、黒光りするシブいやつ。そういうところからメンズ趣味なのか？ いや、注目するところはそこじゃない。中には本当にそれしか入ってなかったってことだ。俺のように洗濯中ってことでなければ、本当に――

李冴さんの全裸生活は昨日今日始まったものではないようで……スマホの肩掛けストラップも、何だか板についている。この街ではスマホがあれば大抵のところでは決済が済むからな。って、そういう問題でもないけど。

そして、改めてアフロキヤップを外し……使用済みタオルをボックスへと放り込み……ここまではちよつと現実味がなかった。まさかな……と疑っていたところもある。出合い方が出合い方だったし。なので、そのままの李冴さんが出口の方へと向かっていくのを止める気にはならなかった。

そして、内側から自動ドアを開いても。

「ひっ、ひえ〜……やつばヤバイほど寒いわ〜……」

身を切るような冬の空気が流れ込んで、同じ格好の俺もまた鳥肌を立てる。が、これからその中に飛び込んでいこうというのだから李冴さんの胆力も桁違いだ。とはいえ、来るときに身に沁みていたであろうこともあり、李冴さんの覚悟はすでに決まっ

ている。グズグズすることなく靴を履き——タオルは使用済みボックスに放り込んでしまったのもう隠すものはない。モジャモジャアフロで股間とか隠してたら絵面的に余計ヤバイし。かといって、スマホひとつではどうにもならず——開き直っているのか、むしろ女のコの割れ目まで堂々と。やっぱり髪が長いと女のコに見える。胸はないけど、何だかんだで身体の線は男のものではない。アフロで後ろ髪を誤魔化して男湯に入っていたからギリギリそう見えていただけで。だからきつと、いまの李冴さんは遠目でも女のコだろう。この、新歌舞伎町という危険な街で。しかもまだ午前中で、人はいっぱい行き来している時間帯だというのに。

そんな路上へと続く階段を前にすると、裸の李冴さんの異質さが際立つ。けれども、彼女自身はまったく自然に。

「そんじやーねっ」

俺は少し期待していたのかもしれない。もう少し、李冴さんとの時間があるのではと。けれど、まったく怯む様子のない彼女の背中を見て、俺は思わず——

「あつ、最後に！」

こんな寒いところで引き止めんな、と李冴さんは眉をひそめるが、どうしても……もう会えないかもしれないから、これだけは、どうしても……！

「どうして……寒い中こんなスパに？」

風呂なら自分の家でも入れるはずだ。なのに、どうしてこの極寒の中を踏破してこんなところまで……？ しかも、変装までして男湯に……！

これに李冴さんは、別段驚きもせず、ウインクをひとつ飛ばして。

「女のコは、見られるほど綺麗に育つからねっ」

そして——今度こそ駆け出していく。トントンと軽く響かせる足音は自動ドアによつてピシヤリと閉じられた。だからもう、俺に李冴さんを追うことはできない。そもそも服もまだ乾いてないし。

けれど、行き先は——どこへ行けば会えるかはわかつている。

「……TRK劇場……か」

次に会うのはステージと客席を隔てて……かもしれない。けど……一抹の不安はあった。

「……ステージでもアフロだったらどうしよう」

まあ、だとしても俺にはどうすることもできないのだが。

天菊まこ3

猫カフェに行ったら、猫が交尾中だった。いや、そんなことあるわけない、と皆は思
うだろう。そもそも、カフェ猫は去勢済みだし。

つまり、厳密には猫同士ではない。一方は確かに猫だが、もう一方は——猫耳こそ着
けているが、人である。しかも、全裸の女のコ。全裸というだけでもヤバイのに、そこ
に猫耳まで着けているので違和感がすごい。つまりそこでは、全裸の女のコに、オスと
思われる猫が後ろから覆いかぶさっていたのである。まさかの獣姦？ と、いいたいと
ころだが、このような位置関係ではそれとも事情が少々異なる。バター犬だって挿入は
しないだろ。

う、うーん……一体これはどういう状況なんだ？

俺の入店に気づいて、女のコの方が気不味そうにこちらへ振り向く。それに対して、
猫の方は引き続き構わずフンフンしていたが——突然興味を失ったのか、何事もなく
スツとどこかへ行ってしまった。それでも女のコは相変わらず気不味そうにこつちを
チラ見しつつ床に丸まったままなので——うーむ……？ 入ったばかりだけど、この
状況はなかなか居づらい。一旦二重扉の向こう側へ——猫カフェは猫スタツフの現

場放棄を防止するため二重扉になっている——部屋の外と中の扉の間で待機していようと踵を返したが——

「あつ、待って！ 待って！」

女のコの方から呼び止めてきたので、俺はひとまず留まっておく。

立ち上がり、駆け寄ってきた女のコは——後ろから見たとおりの全裸であった。強いというなら、肩から長いストラップを掛けて、スマホをぶら下げている。そこにも猫の小さなストラップを付けているので、よほどの猫好きなのだろう。猫と交尾するくらい

の。
全裸の女のコは全裸であることを感じさせないほど自然に——だから、こちらもつい普通に應對してしまう。

「え、えーと……大丈夫ですか？」

「うん、あ、はい。猫と遊んでただけだから」

「あー……」

なるほど、遊びというのなら納得できる。猫スタツフは原則として去勢済みだ。やはり、本気の交尾ではなかったらしい。

ということとは。

「遊んでたというか、遊ばれていたというか……」

「むぐう」

女のコはちよつとシヨックを受けている。

「さつきも甘咬みされちゃつて……。ほら、こつ、こつ」

そう言つて、右足首のあたりを豪快に持ち上げて俺に見せようとしてくる。が、相手が全裸の女のコとなると、つい視線は別のところについてしまふわけ。

見せているところを見てもらつていないことに、女のコの方も気づいたようだ。

「あつ、あたし全裸だつたっけ」

どうやら本人も思い出してくれたらしい。しかし、そうなると……俺は何と声をかければ良いのだろうか？ 服を着るよう促すべきかもしれないが、見ての通り手荷物はなく、部屋に脱ぎ散らかした形跡もない。

少しキョロキョロと見回すと——天井には監視カメラもある。記録されているのを承知した上でその格好なのか。

という疑問を女のコは察することなく。

「あたしのことは気にしないで。こーいうの、慣れてるからっ」

手を腰に当て、堂々と胸を張る。裸の胸を。本人の自信とは裏腹に、その丸みは極めて控えめなものだが——ともかく、どうやら俺が目のやり場に困っているものと思つたのだろう。いや、実際に困つてはいるのだが。とはいえ、性的な意味より奇異なもの

いう意味合いの方が強い。

それに、女のコから慣れていると言われても、こちらの方が慣れてない。いや、それは異性の裸体ということではなく——うーん、ただの裸体といえども、時と場所が違うと見え方も変わってくるものだな。

ともかく、彼女の状況が特殊であることは疑いようもなく、その上で彼女自身はこの状況を肯定的に捉えている。なので、服を着ることを勧めることも難しいし、ましてや意味を問うことすら否定的に受け止められない。

なので、最大限当たり障りなく。

「『それ』は……ポリシーで……?」

また話が食い違ってしまったらどうしようかと思つたが、俺の言う『それ』が『素っ裸であること』にはつながってくれたようだ。

「ちっ、ちがつ! 劇場の企画で仕方なくっ!」

「劇場?」

ここに来て新たなワードが現れたが——彼女はただの痴女ではなかったようだ。あ、いや、こんな場所で平然と全裸になっている時点で痴女ではありそうだが。それでも、個人的な性癖で脱いでいる、というわけではないらしい。

そして、そんな彼女が裸である理由とは。

「あたし、あまぎく天菊まこ！ 劇場でアイドルやってるんだよっ」

「え、ええ……？」

あまりに突拍子もないことを言い出されると、こちらもどう返していいやら困惑してしまう。ただ、まこさん本人も突拍子もないことであると自覚しているようで——さすがさまスマホを開き、俺に向けて突きつけてくる。

「ほらっ、これっ！」

この手際の良さ、多分ホーム画面にリンク張ってるんだろうな、名刺代わりについてもお出せるよう。じゃあなんだ、アイドルとしての営業活動のために全裸であちこち出回り、その度にこんなことしてるのか。

劇場——見せられたサイトによると、そこは『TRK劇場』という名前で——『あえる！ やれる!! ストリップ・アイドル・ユニット』——『あえる』の方はともかく『ヤれる』の方はキャッチにしているものなのか……？

アイドル・「ユニット」とあるし、おそらく何人かいる中のひとりなのだろう。まこさん個人の紹介ページの方にも衣装でポーズを取ったり、ステージで唄っていると思われる写真もあるが——こっちは画像がぼかされているものの、間違いなく全裸なのだろう。ぼかされる前の状態がいままさに俺の目の前にあるのだけけど。……そう考えると、ちよつと意識してしまうな。

けれど、まこさんの方は意識することなく相変わらずの調子で。

「そんでねー……一ヶ月全裸生活って企画に巻き込まれちゃって」

「はあ」

もはや何を聞いても驚かなくなりつつある。

「そういうことなら、家でじっとしていた方がいい気もするのだけれど……」

思わずごぼれてしまった本音にまこさんは――

「それじゃネタにならないでしょっ」

どうやら、この一ヶ月にどんなことがあったか報告する場があるらしい。まー……自宅で全裸ってことならそれほど珍しい習慣でもないしな。

とはいえ、こうして外を出歩くのはマズイだろ。ただ、同じ出歩くのなら、新歌舞伎町がいいというのは頷ける。アダルト関連の商売が多いというのもあるが――この街ほど無人化が進んでいる地域もなかなかない。この猫カフェだってスマホでタツチ決済である。他の街の店舗に全裸で赴こうものなら、有人の受け付けで門前払いされてしまうことだろう。

「まあ、こんなんだから、暖かい室内で過ごせそうな場所、つてことで来てみたつてわけ」

一応、一通りの納得はできた。根本的なところで納得できていないけれど。

「そんなわけだから、あたしのは気にしないで、猫と遊んでいつてね」

などと店員のようなことを言うまこさん。しかし……

「ん？ ん？ どうしたのー？」

まるで肩を叩かれたかのような雰囲気です。足元に対応しているけど……多分それ、ふくらはぎに猫パンチ食らってるんだろ。それに——逆サイドからは別の猫が頬ずりしていたかと思えば、さり気なく口を大きく開けて——さすがに痛そうなので横から俺がスツと足を近づけると、不貞腐れながらその猫は去っていく。

猫は代わる代わるやって来るので、嫌われているわけではなさそうだけど——

「……まこさん、過ごすにしても猫カフェはやめといた方が」

「えっ、なんで？」

「生傷が絶えないでしょう……」

さつきも嘸まれたばかりのようだし。

「まあ、猫つてそういうものじゃん？」

違うと思う。

「さつきもマウンテイングされてましたし」

「……ぎえっ!? じゃれてきてるだけだと思ってたのにー」

言葉は選んだが、交尾の動作を模して遊ばれたことは伝わったようだ。

それでも。

「むーう……もしかして、猫にもあたしの魅力が伝わってる?」

どこまでも前向きなコだな。嬉々としてその場に座り込むと——猫と視線を合わせ何やらにやんにやんゆつっている。しかし、その横っ面に容赦なく猫パンチが。何かと攻撃されるコである。

それにしても、このまこさんという人は——全裸だというのに卑猥さが無い。こういうのを健全な色気、というのだろうか。これはプロポーションの問題ではなく——まあ、胸は控えめだし腰もストンとしているけど。だからといって、決して色気がないわけではなく——どこことなく無防備な感じが自然であり——卑猥さが無い、というのはそういうところなのだろう。

だからこそ。

「にやーにやー、あたし、魅力的かにやー?」

まこさんは猫に向かって問いかけているが……やはり、人間のメスの魅力は人間のオスにしか伝わらない。そんなにお尻を突き出されたら——!

卑猥さがないというのは、罪悪感も和らげるものらしい。まるで、ここではこうするのが当然かのように身体の方も反応してしまっている。監視カメラのことはわかっているけど、それをいったらまこさんはずっと全裸だったわけだし、それに、新歌舞伎町ってのはそういう街だし——

俺はつい……猫に夢中なまこさんの後ろでゴソゴソと良からぬものを取り出して――

「え、え、ちよ、ま……っ!?」

後ろからマウンティングしたところで、まこさんはようやく慌て始める。だが、本気で嫌がつてるのならもっと強く抵抗するよな……? そんな都合のいいことを考えながら、本物の猫たちに囲まれて俺たちは――

フロアの隅の方のソファにふたりで座り――俺は服を着ているが、まこさんに着る服はいまもない。

「猫好きに悪い人はいないと思ってたのに……」

「面目ないです……」

人格を分類するのに猫好きという要素は大雑把すぎるが、ともかく……俺は悪い人判定されてしまった。それでも、こうして肩を並べて傍にいてくれるのだから、嫌われたわけではないのだろう。こうしている間にも、まこさんにイタズラしようとする猫をさり気なく追い払ってるわけだし。

少し疲れて、それでいてむくれながらまこさんはぽつんと独り言のように呟く。

「このこと、『お風呂行進曲』でネタにさせてもらおうから」

「あ、はい……」

どうやら、それが先程話に出ていた報告の場のことらしい。ネタということなら俺が訴えられるということはないと思うが――

「……お手柔らかにお願いします……」

実際以上に酷い男のように言われる危険性はあるので、そこには留意しておきたい。

そのフオローのためにも。

「え、えーと……何とお詫びすれば良いものやら……」

そういえば、まこさんは『あえる』だけでなく『ヤれる』アイドル・ユニットである。正規料金を請求されれば、それは仕事中のネタということになるわけで。

だが、俺が何を言っても、まこさんは仏頂面のまま。

「それじゃあ、約束して」

けれど、少しだけはにかんで。

「今度、あたしのライブを観に来て。劇場に」

「それは必ず……はい」

言われなくとも観に行くつもりだ。こんなまこさんが、ステージではどんなパフォーマンスを魅せてくれるのか――そんなの気にならないはずがない。

俺からの力強い返事で、まこさんも笑顔に戻ってくれた。それも、ちよつと照れくさ

そうに。

「あつ、ちなみに……その……まな板ショーっていつてね、ステージでさつきみたいなことするサービスがあつて、その……」

それって……うん、『ヤれる』アイドルだもんな。

「そのためには、ファンクラブに入ってもらふ必要があつて……」

劇場に観に行くだけでなく、どっぶり応援してくれ、ということか。けれど――

「……あたしとの……良かった……？」

そんなふうには訊かれてしまったら……入会するしかないだろ、そのファンクラブとやらに。

乙比野杏佳 2

さすがに二度目ともなれば慣れる。俺たちも、本人も。

「——よって、XイコールYとなり……えーと……」

午前最後の数学の授業——課題をたどたどしく読み上げるのは おっひのきょうか 乙比野 杏佳——
今日も堂々と全裸である。

乙比野が全裸で登校してくるのは今回が初めてではない。前の夏休み明けにも同じことをやらかしており——その際には緊張のあまり倒れて、保健室へと運ばれていった。そしてそのまま通学謹慎——他の生徒と通学時間をズラして、別室で授業を受けさせられるというものだ。

乙比野本人としては、『何も悪いことをしていないのにそのような処分は納得できない』と言っていたようだが——制服を着てこないのは校則違反ではなからうか。というか、全裸登校はもはや日本の法律の方にも引つかかるだろ。

この件について、真つ向から問い詰める生徒はさすがにいない。てか、乙比野つて友達いないんだよ。嫌われ者というわけではないのだが、ダンサー志望のアイツは、それ以外のことには興味ありません、みたいな空気を出してるから。近づきたいというよ

り、近づくな、という雰囲気。ヤツの名前でググってみると、いろんなところで受賞したり活躍したりしてるから、ただアブないヤツってことでもないみたいなのだが。

そして、その活躍の中でも最も目立っているのが、『TRK26』というアイドル・グループである。

あの乙比野がアイドルを……？ というのもなかなか信じがたいものだが、これはどうやらストリップ・アイドルらしい。ストリップパーというのならまだわかるかな……と納得してしまうのはいささか失礼かもしれないが。あくまで、踊り中心という意味で。

と思っていたのだが——このTRKというグループは意外と唄うのな。もちろん、踊りも、乙比野が納得するくらいにはしっかりしている。それでもって、裸になる。ストリップパーだから。俺は、アイドルとかそういうのはあまり詳しくない。が、クラスのみんなで劇場に観に行ったとき、最初普通に唄ってたと思ったら、一番終わったあたりで脱ぎ始めて——下着で続行してたのにはさすがに度肝を抜かれたわ。ちなみに、ここで精神的にも覚悟を完了してくれたらしく、そこからさらに全裸にまでなった際には……むしろ『待ってました！』って感じだったな。

で、乙比野は、というと——まさかバックダンサー——とはいえ、公式サイトによるとTRK内の『シャドウステップ』というダンサーグループで——決してオマケということではなく、TRKの一員だけにしっかり脱ぐ。当然、最前列で唄っているボーカルが

一番目を引くのだが——やはり、顔見知りか脱いでいく、というのは強烈だ。

しかも、アイツら唄わない分何度も出てくるのな。……ああ、アイツ『ら』というのは、シャドウステップってグループのことで。全部で五人だか六人だかいるようだが、その全員が一齐に出てくることはあまりないらしい。大体そのうち三人くらいだが、乙比野だけは必ず出てくる。曲風に合わせて学生服だったりメイド服だったり水着だったり、いろいろな格好で。しかも、どうやら他のメンバーは乙比野を目印にしているというか、合図をもらっているのか、ともかく、明らかに乙比野が中心だ。まさに指揮者である。……あの乙比野がなあ。教室では浮きまくってるのに。

正直、俺は——俺たち同級生一同は、男子も女子も含めて乙比野のことをよく知らない。休み時間は次の授業の用意をしてるし、昼休みは部室の方で——ダンス部はとつとに廃部になっており、いまは軽音楽部の部室になっている。が、放課後しか使わないということで、それ以外は練習に使わせてもらっているらしい。飯も基本的にそつちで食う。ひとりで。だから、俺たちは乙比野のことを知る機会もないのだ。

そんな乙比野が、突然の全裸登校——しかも、これで二度目である。職業差別とも受け取られかねないのであまり言いたくはないが——ストリップパーって、やっぱ痴女なのか？

あくまでウワサだが……どうやらTRKという事務所はものすごくヤバイところら

しい。警察さえ手を出せない権力を持つてるとかで。そんな連中ゆえに校長も逆らうことができず——一度ならず二度も全裸登校を認めさせられているとのこと。……一度目については、認めさせたうえで通学謹慎に変更しているあたり、何がしたかったのかよくわからないが。

そして、この二度目である。乙比野は——正直、可愛い。可愛らしいというべきかもしれない。それに気付かされたのは最近のことだけど。何しろ、これまでこんな表情は見たことがなかった。数学的証明を読み上げて——すまし顔を作ろうとしているが、ものの見事に真っ赤に染まっており——強がっているのは明らかで、そこが可愛い。もちろん、胸も、お尻も——何しろ下の毛の生えているところは明らかで、そこが可愛い。可愛らしくないはずがない。だが、恥ずかしいのに『全然恥ずかしくありませんケド!?』これでも私、ストリップ・アイドルなんで!』と言いたげな乙比野は——これまでになく可愛く見えてしまったのだった。

相手は全裸の女子ゆえに、下手に近づいては下心丸出しにしか見えない。いや、下心は否定できないとしても、下世話な意味ではないつもりなのだが。間違いなく、俺以外の男子もその多くが乙比野のことが気になっていることだろう。だが、ここでコクつたり、妙な親切心を見せただけでも——あからさますぎんだろ、って話で逆に手が出せない。

だから——授業が終わり昼休みに入ると、俺は、まあ、廊下をフラフラと。傍から見れば、自分の教室に戻るようでもあり、どこかに用事があるようでもあり。あえて遠回りをした上で——南校舎に來ると、こちらは職員室や特別教室ばかりになるので生徒もまばらになる。だから、ここからは開き直つて真つすぐに。目指すは現・軽音部の部室——

目的地の前へと到着すると——中に人の気配がある。扉は閉まっているが——やはり、室内が気になつて仕方がない。バレたらアウトだよなあ、という懸念はあるけれど——前後を見回したが誰もいない。このチャンスを逃したら……この幸運を逃したらもつたない気がして——ドアノブに手をかけると、ちよつとだけ——ほんの少し隙間を開けただけで——

「……ッ!!」

思いつきり目が合つてしまった。中で——モクモクと昼飯を食っている乙比野と。当然全裸である。……いや、当然というべきなのだろうか？　しかし、状況が状況なら——乙比野が登校時から全裸だと知らない者が見たら——着替え中を覗いているに等しいわけで——

違う！　俺は乙比野の裸を覗きに來たわけではなく——ならなんだ、という話だが——ともかく——俺に後ろめたい事情はない——ッ！

もはや勢い任せで、俺は扉を全部開くと――

「……何？」

この反応をもらえただけで、俺は何だか救われた気がした。叫ぶでも逃げるでもなく――堂々と食事中の乙比野――どうやら今日はカレーらしい。備品のレンジで白米とルウと一緒に温めたのだろう。なので、俺は。

「いや、カレーの匂いがしたから」

本当に、自然に。何も考えずに。口に出してみたら考えたが、軽音部の部室からカレーの匂いが漂ってきたら気になるよな……と一応の辻褄は合っていると俺は納得できたつもりだったのだけど。

「で？ カレーに何か問題でもっ?！」

……ああ、そーいえば、乙比野つてのはこういうヤツだった。何かにつけて喧嘩腰なんだよ。しかし――こういつてしまうのも厭らしいが――女のコが全裸つてだけで、この刺々しさも不思議なくらい許せてしまう。だから、俺に動揺はない。そもそも、胸や色んなところは教室でずっと見てたしな。目のやり場に困ることはなく、ちよつと部屋を見回して……空箱発見。

「お、辛さ0・5倍、初めて見たぞ」

最近ちよつと流行っていた『辛さ何倍シリーズ』――だが、やりすぎたのか単調になっ

てきたからか、ここに来て急に辛さ半分という本末転倒な商品が現れたものの、そもそもユーズーから求められていかなかったゆえにすぐ消えた——と思われていた。が、ここにあつたのだから驚きである。

俺としては、ただレアなものにお目にかかったただけのつもりだったが……

「たっ、たまたま見かけただけよっ」

「そんなわけないだろっ」

もはや探す方が大変な代物だ。言い訳にはあまりに拙い。思わずノータイムでツッコんでしまったが……おおっ、乙比野の顔色がまた一段と赤くなつて……どうやら、この不自然な甘口カレーを食べているところは見られなくなつたようだ。

そんな乙比野が可愛くて、つい。

「乙比野って結構子供なんだな」

面白半分に憎まれ口を。これに黙っている乙比野ではないと知りながら。とはいえ。

「私のどこが子供よっ」

俺は味覚のことを言つたつもりだったのだが。乙比野は俺の方へ一步踏み出し、胸を張り——ずっと見てきた乙比野ではあるが、こうして見せつけられると、さすがに怯むぞ。

だが、それがちよつと悔しくて、俺も負けじとベルトに手をかける。

「身体ならこつちだつて大人だつての！」
ちよつとした挑発のつもりだつたのだが。

「……フツ、脱ぐんじゃないの？」

ぐ、ぐ、ぐ……ッ?!? 何で勝ち誇つた顔してんだよ、お前……ッ!

「見たいのかよ。痴女か？」

「自分から見せようとして日和つてるの？」

そこまで言われたらこつちだつて引つ込みがつかねえ。お前が挑発したんだからな、後悔すんなよ……ッ!?

休み時間終了のチャイムが鳴り、カレーはすでに冷めている。

「……私のお昼、どうしてくれんのよ」

部屋にはふたつの裸体が。にも関わらず散らかつた制服が一組だけというのがどことなく違和感を禁じ得ない。

「教室に戻つたら、俺のパンやるから」

それなら授業の合間に軽く食えるだろ——と思つたのだが。

「じゃなくてっ、せつかく温めたカレーが勿体ないでしょ!？」

それももつともである。

「なら、俺が代わりに食つとくよ」

昼飯の交換という形になるしな。しかし、乙比野は納得してくれない。

「いまから食べる気？ 授業に遅れるじゃない」

だろうな。けど、理系の俺に地理の授業は必要じゃねーんだわ。

「サボる。体調悪くて保健室で休んできた、ってことにして」

これですべて丸く収まるだろ。だが、そこは乙比野である。

「なら、私も休む」

まったく意味がわからないが……乙比野の視線はジッとカレーに。……ああ、どうしても食いたいんだな。けれど、俺がそれを口にする前に。

「……さっきの、どっちが勝ったかよくわからなかったし」

女のコの方から再戦のお誘い——これに乗らない男子はいないだろ。

カレーはとっくに冷めている。だから——

「ちよ、ちよつとつ、カレーっ！」

そんな乙比野からの抗議に。

「俺に勝つたら食わせてやるよ」

そういうと——俺の下で乙比野の瞳が爛々と輝く。やっぱり乙比野ってやつは……どこまでも可愛いヤツだ。

島門佑衣2

決して、佑衣のことを尻軽そうとか、ユルそうとか、そんなふうに見たことは一度もない。だが、強いていうなら……土下座すればやらせてくれそう……みたいな。彼女の愛想の良さには、そんな可能性を感じさせてくれる。

そーいや、前に就活してたとき、どこぞの講師が『フォロワーシップ』なんて話をしていた。『リーダーシップ』の対として、良き部下、良き後輩になりましょう、みたいな。ナニ都合いいこと言ってるんだ、と一蹴したけれど、佑衣というのはそれが素でできるキャラなのかもしれない。

そんなわけで、サークルにいたときから俺もついついアプローチをかけずにはいられなかったのだが……さすがに浮気はNGだったらしい。けど、佑衣って断り上手というか。次はイケるんじゃないかと期待を持たせる断り方してくるんだよ。それで……気づけばハマってた、というか。

で、そんな佑衣が彼氏と別れたと聞いて、これはチャンス！ ……なあんで、自分も彼女いるのに思ったりもしたわけだが——佑衣たちが別れた理由が物凄い。

『彼女がアイドルになったから』

しかも、それがただのアイドルではなく、ストリップ・アイドル・ユニット『TRK 26』——『あえる！ やれる!!』をキャッチフレーズにした風俗嬢集団の一員になったというのである。元カレのヤスマトは凹んでいた、というか……彼女がオクテだったんで、どうにかエロスを開花させようと手を回していたところ、回しすぎたとか何とかで。

俺も最初はビビったけど——そもそも俺、彼女持ちだし。だったら、むしろちようどいいんじゃない？ だって、もし佑衣と仲良くなれたら、芋づる式に大量のエロい女子とお知り合いになれるチャンスなんだから！ つき合ってるわけじゃないなら邪魔する理由もないだろうし。

あ、ちゃんとアイドル推していることは俺のカノジョにも言ってるぞ。というか、こないだ一緒に劇場行つたし。意外とちゃんとしてた、というのがカノジョの感想だった。これをもつてして、俺の推し活はカノジョ公認となつた……と、俺は認識している。佑衣曰く『カノジョ持ちがストリップ・アイドルを推すなら、まずはカノジョに許可を取れ』——許可取ってきたぞ！ もう文句はないだろ！ ということで、それを佑衣にもメッセで送つて——何かと渋い顔はしても、ブロックとかしないのがアイツのいいところなんだよな。最低限の節度を守っている俺の良識によるところも大きいが。

そんなわけで、俺たちはこれから会う。ちゃんとした形で顔を合わせるのは佑衣が

サークルを辞めて以来ではなかるうか。……実は、劇場で一度まな板ショーはしているが、結局何も喋ってないんだよ。だから、まっとうな会話は久々だ。

いや、まっとうな会話になるのか、一抹の疑問はあるけれど。佑衣はアイドルだけに、ブログも更新している。それによると……現在とある超過激企画に挑戦中で——もしガチだったらその俺もその恩恵に与れるわけで……!

そのために、わざわざ佑衣が来やすいであろう新歌舞伎町の喫茶店を選んだ。この街は何かと物騒だからできれば学校近くにしたかったのだが、その企画を理由に断られたら困るし。

ということとで、俺は外の通りを見張るような目つきで待っていたが——どうやらウィンドウの前は通らず、反対側から入店してきたらしい。

「お待たせしました」
「うをつ!」

マジかよ!? 佑衣のやつ……マジの全裸で……! すげえ絵だぞ、コレ。喫茶店に入ってきた佑衣は——小さなショルダーバッグの紐を斜に通して——シートベルトのように胸の谷間に挟まれてるのが全力でエロイ。というか、その胸も乳首の先までポインポインだし。下だつて毛までじっくり見れて——あ……尻も見てえ……つ! けど、残念ながら俺が取っていた席がボックスだったため、佑衣はテーブルの向こう側に

するりと座る。くう、何で天板ガラス張りじゃねんだよ！ 下が見えねーじゃねーか！
けど……おっぱいは堂々と丸見えて……！

「このような恰好で失礼します。今月は『全裸生活』という企画を実施中でして」

どうやら、持ち回りで一か月間服を着ずに生活する『全裸生活』という企画が、あの劇場にはあるらしい。今月は佑衣がそれに選ばれたとのこと——正直、面白半分に呼び出したところはある。ガチだったらそれに越したことはないし、着衣で来たら全裸生活はどうした、みたく話題になるかな、と。今回は前者である。これはまさに眼福だな。

しかし、佑衣のヤツ……さりげなく胸の前で腕を組む姿勢を崩さない。しっかりと乳首はガードしてる感じだ。全裸なのに……！

それでも俺の視線は胸——を押さえる両腕に釘付けで。それは佑衣もしつかり感じ取ってるんだろうな。そんな不自然な空気の中、最近どーしてんの、とか、ステージすごかったな、とか、当たり障りない話題をつなげていくも、佑衣の方は『そうですか』『ありがとうございます』など他人行儀な返答ばかり。サークルに来てた頃は理想の後輩って感じだったのに。サークルを抜けたらこんな露骨に変わるのか？

少しガツカリしながらも。

「んで、いまつき合ってる男とかいんの？」

「いいえ」

そんな会話になったので。

「だったら、俺とかどーよ」

「先輩にはカンナ先輩がいるでしょう?」

そんな感じの、サークルにいた頃のような会話が交わされたので、つい。

「なら……カンナと別れたら、つき合ってくれんのか?」

はい、と言われたらちよつと迷うけど。

「いいえ」

即答かよ。

「だって私……アイドルですから」

「けど、やりまくりじゃねーか」

そんなアイドルがいてたまるかよ。けれど、佑衣は悪びれることなく。

「はい。ストリップ・アイドルですから」

アイドルって下ネタとか男関係とか厳禁なもんじゃなかったっけ。ストリップ・アイドルから『ストリップ』の部分を取っちゃったらまったくの別物だろ。

俺がいま、佑衣のことをどんな目で見ているかはわからない。が、佑衣が見ている目は明らかに冷めている。

「先輩、女のこのこと、セックスの相手としか思っていないんじゃないですか?」

「いや、そこまで極端でもないけどよ」

セックスは重要だ。けど、セックスさえできれば他は何もいらぬ、なんて考えては
いない。

けれど、佑衣はやはり冷めた瞳で。

「先輩の行いを見ていると——」

ここからどんな罵詈雑言が飛んでくるのかと構えていたが。

「……カンナ先輩に、今日のこと話せますか？」

最大限の、気遣いでオブラートに包まれていた。けど、そういう心配は無用である。

「問題ねーって。あくまで喫茶店で話してただけだからな」

酒さえ吞んでねえんだから、責められる筋合いねーだろ。しかし、佑衣は納得しない。

「私がこの格好だったとしても？」

「フツーは言っても信じねーな」

俺だつて未だに信じられねーよ。佑衣がこんな場所で素っ裸……というか、ここまで
素っ裸で来たっばいし、そんな佑衣に店内が動じてないことも。

むしろ、佑衣自身が一番緊張してらしい。

「ともかく、先輩のことは脈なしだというのをご理解いただきましたか」

「ちえっ、冷てーな。そんなら——」

他の女の紹介してくれよ——とつなごうとしてんのに、佑衣はそそくさと席を立ち始めやがった。おつ、カワイイ尻——とか見惚れてる場合じゃねえ！

「ちよ……っ、おい、待て……！」

佑衣を追って立ち上がったが——背後から肩を掴む手の力強さに、俺は足を止めて振り返る。そこにはスーツを着た男がいて——だが、そこらの会社員つて雰囲気じゃない。決してこの街だから、というわけでもなく。そして、袖や襟から入れ墨がチラついているわけでもなく。筋骨隆々でもなく、顔つきがいかついわけでもなく——むしろ、スマイルを無料で売ってるサービス業みたいな穏やかさだ。

だからこそ、かもしれない——その手に込められている圧との違和感に、俺は思わず後ずさる。

「あ……貴方は……？」

ヤベエぞ……少々失念していたが、ここはアブねえ繁華街・新歌舞伎町である。そんな渦中で全裸の女のコと……いや、まあ、イチャイチャしてたわけじゃねーけど。だが、目を付けられるのは当然だ。

俺に抵抗の意志がないことを察して男は手を放す。そして、名乗った。

「私は——」

アイドルをプロデュースしている者です——名刺はなかったが、信じるに値する熱い

威圧感があった。なので、俺も腹を括る。

「ちようどいいところに。俺もアンタ……いや、貴方を探していたんだ」

佑衣は自分から全裸で来ておきながら、会話どころじゃなかったみてーだし。むしろ、これから信頼を築いていきたい相手はこちらである。ならば、喧嘩腰だったり上から目線だったりとは良くない。かといって、謙って従っていても意味がない。改めて見れば、歳も結構若そうだ。だったら……イケるだろ。同じエロいオネーチャン好きとして……！

ちよいとお時間よろしいか、と尋ねてみれば、それ相応につき合ってもらえた。佑衣は予定よりかなり早く俺との対話を切り上げたいらしい。

んで、このプロデューサーは話せばわかる相手で——とはいえ、もしここで佑衣と揉めるようなことがあったら、劇場を出禁になっていたようだ。アイドル本人がそのような処分を望んでいない、という温情によって首の皮一枚でつながっている状況だとプロデューサーは脅してくるが……それはいい。むしろ、これ以上つきまとっていると余計に拗れそうだし、推し変しちまうかなー。こっちだつて、メンバー全員チェックしている。紫希しちゃんとか、エロくて良さそうだし。

そんなこんなで、俺たちはとんとんと話し合った。女のコと、エロスについて。この

男、エロい話をめっちゃ真顔で熟考するのな。本人曰く、アイドルたちを輝かせるため、とのことだが……その方法がエロスばっかってどーなんよ。

だが逆に考えると、エロス大好きで、エロスで輝く女子を集めたってことなら……他に輝ける場所なんてなかなかないよなあ。いや、あるけど、どうしても後ろ暗い裏道になっちゃう。それで明るい未来を目指してるんだから大層な茨道だぜ。

とはいえ、エロい女子をいっぱい世に出してくれるのならこっちとしても大歓迎だ。つつーことで……今後とも仲良くやっついていこーぜ！

萩名里美2

大人数を収容するための箱を維持し続ける費用も馬鹿にならないということで、説明会の類はオンラインで済ませる企業が多いのが昨今の就職活動情勢だ。まあ、その方が申し込む側としても助かるし、願ったり叶ったりではあるけれど。

しかし——俺はいま、オンラインであることを猛烈に恨んでいる。

『コーナーエッジツーリストの経営目標としましては、国内ならば行けないところはない、というものがありません』

今回俺が説明を受けている『コーナーエッジツーリスト』とは旅行代理店である。大手が扱わないような僻地や離島に対して、むしろ重点的にフォローしているのが特徴のようだ。

ぶっちゃけ、そのへんのことはどうでもいい。こちらとしては飯のタネとして入社できるところに就職するだけなのだから。大手だろうと中小だろうと。

なので——俺が気になったのは、説明しているこの女性の方だ。最初、何かのバグでAVが流れ始めたのかと思ったぞ。しかし、今年度まで含む最新データが掲載されたスライドショーが始まったことで——紛れもなく、これが正規の説明会であると認め

ざるを得なくなった。

正規の説明会で——全裸の女性が堂々とプレゼンしているのだと。

てか、こういうのって普通は映したとしても表情を見せるためのバストアップくらいのもんだろ。さらに、スライドショーが始まればサウンドオンリーとなるのが常だ。集会の趣旨を考えれば、ここまで執拗に説明する人間を映す必要はない。しかも、わざわざ引きで——大きなスクリーンの前に直立させることで全身を。

長い髪に大きな胸——名札のストラップがその谷間にスツと流れているところが全力でエロい。それに、お腹から下の毛までしっかりと見せてくれるし。時々画面の方を確認するテイで後ろを向いて、お尻もぼいんとこつちに見せてくれるところもサービース精神旺盛だ。彼女には恥じらったり照れたりする様子がまったくなくない。まるで、自分が服を着ていないことに気づいていないかのように。

ああ、スクリーンに投影するために部屋を暗くしているのがもどかしい。が、その反面、細部に対する想像力が掻き立てられてエロテイシズムが引き立てられているともいえる。これが本当にAVだったら、乳首や股間をズームにしたり——それどころか、揉んだり入れたり、男優陣による羞恥プレイが繰り広げられたことだろう。そういうのが一切ないあたり、ガチの説明会なのだと実感させられる。

そういうリアリティもあり——すげえ——すげえな、コレは——チクショウ、コレを

現地で観られていたら——いや、ここでいうコレってのは説明会ではなく、彼女の裸体^{カラダ}の方を指すことになるのだろうけれど。否が応でも。説明会って名目だったとしても、いよいよ話なんて頭に入るはずがない。

反面、リモートで良かった、と思える要素もある。現地にいたら、こんなふうには下半身をモロ出しにしながら話を聞くことなどできなかつただろうからな。なので、その恩恵を最大限に享受すべく——はあ、はあ……この状況の異常っぷりに、こちらも脳がバグっちまってるみたいだ。ヌいてもヌいても収まることなく——ウツ、これで三回目……さすがにもう出るもんねーぞ。なのに、一向に萎えてくれず——説明会に参加する際に『配信の録画を禁ずる』『説明会で知り得た情報の漏洩を禁ずる』という署名に同意させられたが——もちろん、途中からしつかり録画させてもらっている。バレたり流出させたら結構ヤバイが、これでしばらくオカズに困ることはないだろう。こんな巨乳美人が説明会プレイとか……こんなの……こんなの……ッ！

……クツ、ついには四回連続……！ このままじゃ説明会が終わる前に干からびちゃう……ッ！

——と理性を失ったサルのように快楽を貪っていたが——

『説明は以上となりますが、質問のある方はコメントにてお願いします』

や……や……や……と終わってくれた……。が、彼女が服を着るわけではない。むしろ、スラ

イドを映す必要がなくなったことで部屋が明るくなり——お、お……暗がりでの裸体もミステリアスで良かったけど、こうして蛍光灯に照らされると——真つ白な肌をほんのりと染める乳輪が可愛らしい。くう、乳首も立ってんだらうなあ……カメラ！ もつと寄せてくれよ！ はあ、固定で置いてるだけとか、こういうところで手を抜きやがって……！

とか何とか、もはや質問そつちのけで彼女の胸とか股間とかばかりに集中していちよつと気づくのが遅れたけれど……この手の説明会で、ここまで何も質問出ないことってあるか？ まあ、すぐさま質問するようなやる気マンなら、こんなエロスパフォーマンスを見せつけられて辞退しないはずがない。とつくに途中退室してるんだろう。

誰も訊かないのなら、俺が……俺が……ッ！ つい、チャット欄に——『何故全裸なのでしょうか』——絶対に誰も気がなってるはず——だが、あまりに訊きづらすぎる——それを、俺が——！

だが——どうやら女性の方もその質問を待ち望んでいたらしい。むしろ、瞳をキラキラと輝かせている。

『実はわたくしは……コーナーエッジツーリストの社員ではないのです』

よくよく見れば、首から下げているカードに顔写真らしき像はない。が、こんなこと

ができるのだから、関係者ではあるのだろう。多分、アレはゲストカードのようなものなのだと思うわ。

『わたくしの本当の仕事は——』

アイドル——それも、ストリップ・アイドルの——はぎなさとみ萩名里美——彼女はそう名乗った。何故そんな風俗嬢が企業説明会に……？ というのは、どうやらここの社長の妹だかららしい。

いまでこそ風俗嬢をしているが、かつてはわりと大きな企業で管理職を務めていたようだ。その手腕には社長たる兄も一目置いており、事業を手伝うよう常々打診されていたたこのこと。

そんな中、『一ヶ月間全裸生活』——ストリップ劇場の企画で、里美さんは三月いっぱい服を着てはならないらしい。そのタイピングで打診を受けるあたり、里美さんも意地が悪いし、それでも受け入れてしまうあたり、社長はさぞシスコンなのだろう。

『現在、我らTRK劇場では全国ツアーを計画しております』

ストリップの全国ツアーなんだから……まー、そーいうことなんだろうな。けど、日本の風俗街って何十年も前に全部取り潰しにあつて、復活したのが東京新歌舞伎町だけだと思っていたが。デリヘルみたく個人間の情事です、と取り繕える業態ならともかく、堂々とイベントを開きます、というのは無理があるだろう。

だからこそ。

『コーナーエッジツリーリストとは事業協力していただく前提で話が進んでおりまして』

まー……結構なシスコンだろうし、妹から頼まれたら嫌とは言えないだろうな。つまりは、そのエロエロツアー部門への配属を前提とした募集がコレ、ということだ。なお、その他の部署への採用はとつくに終了しているとのこと。だよなー。てか、どっちかとゆーと、採用自体は秋頃に済んでいたのに、この里美さんがエロエロツアーの企画を持ち込んで、そのための人材を集め始めた、ってことじゃなからうか。

『ということ、採用条件としましては、女性の裸体を前にしても動じることなく業務を進められる方、となります』

そのために全裸で説明会を行った——と言いたげだが、こじつけだろうな。その審査のためにわざわざこんな形で魅せつける必要もない。まあ、観せてもらった方は眼福ではあるのだが。

俺の質問を皮切りに、ぼちぼちコメントは続き始めた。その部署に配属されたらもう異動はないのか、とか、そもそも法的に実現可能なのか、とか。けれど——俺にはもう、考えるだけの気力はない。何しろ、もう……ウツ……七回目……。さすがに痛くなってきた。なのに……ダメだ……まだ……右手が止まらねえ……ッ。この時点で、俺はもう里美さんの言っていた採用条件から外れてしまうのだろう。

けど、何だかおかしい。普通にAVとかは観るけれど、こんなにたぎったことなどあったらどうか。これはおそらく——限定されたこのシチュエーションに魅入られてしまったに違いない。録画を流せば、里美さんの全裸説明会の様子は何度でも観られる。けれど、時間が経ってしまえばただの企画モノ——本物の企業説明会の中で里美さんと相對することはできない。だからこそ、この時間の中でできる限りの幸福感を享受したい——そんな想いを込めて、俺は——

『なお、入社希望の方は二次面接として、来週入社していただくことになりましたが——』
来週！……ってことは、まだ全裸生活中にだな。そして、来社……ッ！ 里美さんと会えるのか……!?! 全裸の里美さんと……!』

ぶっちゃけ、俺はもうこの会社に就職するつもりはない。さつき自覚した『条件を満たしていない』ということを差し引いても——俺は、里美さんのツアーを客として——いや、ファンとして楽しみたい。運営する側になっちまったら、アイドルとしての里美さんを推せないからな。

そんな本音は棚に上げて——

まあ、この説明会は釣りで、来週行ってみたらオッサンとのタイマンという可能性だって十分にある。だとしても、わずかな希望があるのなら行かずにはいられない。それが——ファンとしての心意気なんだろうな。

崎乃平花子3

俺がこの街に家を借りたのは、ひとえに通学の都合である。まったく、こんな都心に大学なんぞおっ建てやがって……！ 新宿まで通うためには、都心の高い家賃を払うか、郊外から長時間電車で揺られるか——この地獄の二択に対して、俺は高い家賃の方を選んだ。せつかく上京してきたのだし、ここは東京の生活を満喫したいだろ。

だが……チクシヨウ、嫌な感じで噛み合うなあ！ この街は家賃だけでなく食費も高えし、何をするにも金がかかる。これはもうゴリゴリ働くしかねえ、と思ったらバイトも見渡す限りで募集してやがんのな。なんかもう、金欠を狙われてるとしか思えねえ。

ただ、その時給は……う、うーん……？ そりゃー、地元よかいくらか色くらはついてる感あるけどよ。それでも都心の物価高に追いついてる気がしねえ。一応、新歌舞伎町ってだけに高収入と引き換えにヤバそうな店ならちらほらあるが。ポスターに描かれてるのはセクシーな女性のシルエットなのに、『男性スタッフ募集』とか。間違いなく裏方だろうが、どんなトラブルに巻き込まれるかわかったもんじゃねえ。

……ああ、うん、まあ、そういうことだ。俺が都心住みを選んだのは通学時間の短縮つ

て目的が一番だけれど……決め手になったのは、新歌舞伎町ってゆー日本唯一の風俗街の存在にある。地元でもデリ嬢をホテルに呼ぶことはできた。だが、本格的な設備のある部屋で至れり尽くせりってのはここでしかできねえ……！

……って期待してたんだけどな。こんな貧乏生活じや指を啜えて眺めるばかり。それでも少しずつ金を貯めて……途中、大学の連中との飲み会だの何だのと浪費もあつたりで一進一退だったが……一年かけてついに貯めたぜ！ これだけあればこの街の最上級ソープにも入れる……！

だが、俺はまだ店には行っていない。一世一代の大勝負だから慎重になっている、ということもある。だがそれより——俺にはもつと気になる店があつた。

それは——コンビニである。ただし、いわゆるオトナのコンビニ——ようするに、アダルトグッズの店だ。

ちようどいまから半年ほど前——夏休みに大学の連中とうっかり北海道旅行になど繰り出してしまったため、俺の高級ソープ計画が三歩くらい遠のいてしまった。その慰めもあり——せめて手淫くらいは充実させたい、ということ、そのプレジャーグッズの店に行つてみたのである。新歌舞伎町だけに、この手の店には困らない。だから、そこを選んだのは本当に偶然だつた。

実家では通販に頼るしかなかったものを、まさにコンビニ感覚で買いに行けるとは、すげえ場所に越してきたもんだぜ、などと感慨深く——念のため、出陣前にはヌイてから。これからエロスの巢窟に踏み込むのである。余計なモノを溜めて行つて、余計な浪費を重ねては本末転倒だ。

さて、店に到着してみると——店舗の面積は狭いが地上五階に地下一階。入つてすぐには何故か過去の名作的な映画が並んでいる。一説によると、一定数の全年齢ビデオを置いておくと、アダルト関係の様々な規制を回避できるらしい。一世紀以上続く不毛な法律である。それでも、大した足枷になつていないのか、普通の映画も普通に売れるのかは知らないが、いまでもその風習は細々と続いているようだ。

そして、オナホール関連は需要があるのか地下一階。最も入りやすいフロアである。が……う、うーん……？ 正直、ネットの方がラインナップ豊富じゃないか……？ とはいえ逆に、この店長の選りすぐりが取り揃えられてるわけで……なんて、末期の本屋の言い訳のようなフォローを入れてみたり。

となると、この店舗もいずれは滅んじゃまうのかなあ……なんて思つてみたりもする。だが、それは少々もつたない。確かに、同じものはネットでも買える。だが……見てほしい、この一面に並ぶ箱々を。パッケージもエロに全振りすることもあつて、全裸のネーチャンがところ狭しと跋扈してやがる。モニタ上で並んでもここまでの迫力は

出せねえ。この文化は失わせるにはちよつと惜しくないか。

例え滅ぶ宿命にあつたとしても、せめてこの胸に刻み込んでおきたい。ということ
で、せつかくだから俺は買い物前にこの店を隅々まで見て回ることにした。階段をふた
つ上がつて、地上二階へ。すると、ここからが本領発揮といわんばかりの成人向け動画
の数々が。

……おおつ、この表情はそそる……！ この女優、いい仕事してんじやねーか……つ
！ 不覚にもパケを手に取り、裏面も拝見……おとおお……つ、これは……俺好みの
美熟女モノ……！ だが……ふう、あぶねえ、熟女と呼ぶには少々歳若かつたようだな
……！ それに……なーんか、昔ブイブイ遊んでた女が結婚して落ち着きましたー
……つて雰囲気だし。そういうのはいいんだけど。

ただ、それは作品のコンセプトじゃねえ。純粹に、この女優から醸し出される雰囲気
だ。もちろん、そういうタイプが好きなの男もいるから、俺からそれ以上言うことはない。
うん、やはりヌイテから来たのは正解だった。もし溜まっていたら……いまの誘惑に
抗えなかつたかもしれないねえ。だからこそ、これは良い機会だと三階、四階とフロアを覗
いて——そして、最上階の五階——ここまで来ても、売り場の様子は変わらない。いや、
ジャンルは変わっているのだが、ピンク&肌色に埋め尽くされてるといふ点について
は。

ここまで色んなAVと出会い、ヌイたばかりにも関わらず帰ったら早速オナホールが
拂いそうだけ……つ、なんて昂ぶらせながらやってきたわけだが——

ここで俺は、これまでにない衝撃と出会った。

アレは……売り物じゃねえ……パッケージでもねえ……！　小さなレジカウスター
に座っているのは——まさかの——！

いや、信じられるか？　こういうところに座ってるのって、大抵つまんねーオッサン
だろ。それが……まさかのオバチャン……っ!?

い、いや、オバチャンと呼ぶには若い。乳も垂れてねえし。……そ、そうなんだよ。オ
バチャンが上半裸で……おっぱい丸出しで……！　台に座ってるから、下半身は見え
ねえ。けど、上は……！

それも、何かのキャンペーンって雰囲気でもねえ。眼鏡をかけたほんわかしたオバ
チャンが——

どうやら、俺は少しの間彼女に釘付けになっていたらしい。少しして我に返ったと
き、彼女は俺にニコリと微笑みかけ——

そのとき俺は、無我夢中で逃げ出していた。何が起きたのか、何を目にしたのかもわ
からずに。

そして、帰ってヌイた。脳裏に焼き付いている記憶をオカズに。素手で。

俺が目にしたのは妄想か、それとも錯覚か——後日、再びあの店に赴いてみたが、上半裸どころか、女子の姿さえなかった。きつと、何かの見間違いだっただろう——そう思い込みたいが、俺にはどうしても忘れることができない。

だから、高級ソープへ赴く前に、最後に一度だけ——俺は、あの店に足を運んだ。

ひしめくおっぱいのパツケージにもポスターにも目もくれず——けれど、階段を上がる足は重い。それはおそらく、この気持ちを抱えたままソープへ行ったら、何か大切なものを失うような気がするから。

そして、ついに五階に辿り着いたとき——！

これは——奇跡か——！

もう二度と会えないと思っていた彼女が、またあのレジ台に——！

さすがに初めてではなかったので、俺は正気を失うことなく——けれども、意識は外せず、どうにか凝視だけはしないようにして——とりあえず、柵の後ろに隠れた。そして、柵板とパツケージの隙間から覗き込むと——裸だ——おっぱいだ——！ 決してピチピチというわけではない。けれども、いい感じに落ち着いている。素朴で、質素で——眼鏡をかけてるところも、変な企画による作り物って感じがしなくてそれも良い。ああ、頭に高く結ったお団子へアも似合うなあ……。

俺は、ソープに行くために備えていた——オナ禁して。そんな俺に、そのおっぱいは耐えきれなかった。他に客もいないし、俺はフロアでゴソゴソとズボンを緩め——

けれど、ここで——彼女と目が合った。何しろ、俺はフロア唯一の客である。店員として、その動向は気にしていたのだろう。とはいえ、良からぬことをしないかと監視していた——という刺々しきはない。相変わらずのふわつとした雰囲気のまま——彼女はレジ台から立ち上がり、売り場の方へ——

そこで、全身がお目見えして——握ったまま固まっていた俺の右手は再び熱い摩擦を再開させる。俺が期待した通り、彼女は——下にも何も着ていなかった。全裸である。雑でもなく、整いすぎてもいない自然なヘアが……ああ……オクから込み上げてくるモノを感じながら、ようやく自覚していた。あのこそ、俺の好みの女性だったのだと。この店内に並んでいるどの女優よりも、レジ台の彼女こそが。

だから、俺が覗いているこのちらへと歩み寄ってきて、俺はしまうどころか手を止めることさえできず——けれどこのまま、こんな簡単に果ててしまうのはもつたいなくて少し焦らしながら——まるで、彼女の到来を待ちわびるかのように。

いままさに、彼女が俺のいる通路を覗き込もうとしている。来客の男が放り出した股間を握っていることを知ってか知らずか。いずれにせよ、やって来るのは店員である。こんな所業がバレたら、もう二度とこの店の敷居を跨ぐことはできないだろう。

それでも、彼女が全裸だからか——俺は愚息をしまうことなく——ついに、彼女と対面して——

「あんらあら、こんなところでダメだよお」

軽く咎めながらも、決して厳しい様子はない。

ゆるりとした步調は変えず——下半裸と全裸——ふたりのそんな異様な状況を感じさせずに、彼女は俺の前へ——互いの吐息が届くほど近くに——そして、俺の右手に温かな両手を添えて——

「……若い子種を無駄にしちゃあ♡」

そして、彼女はその場でぐるりと踵を返した。けれども、それは用が済んだからではない。

彼女の名は さきのひらはなこ 崎乃平 花子——この店でレジ打ちをしていたのはあくまで副業であり、本業は——アイドル——それも、ストリップ・アイドル——様々な店舗型風俗に紛れて見落としていたが——ストリップ劇場——そこで踊り子をしているようだ。

その劇場では色々と過激な企画を催しているようで、そのひとつが『一ヶ月間全裸生活』——それも、ただ全裸で過ごすだけならともかく、なるべく日常と変わらないように——ただ、花子さんがこれに参加するのは三度目で——新歌舞伎町では半ば恒例行事

になつてゐるらしく、二度目に続いて三度目もこの店から就労のオファーを受けたようだ。半年前、俺が出会つたのは二回目するときだつたのだろう。

花子さんと初めて言葉を交わし——狂つたように——他の客が覗いては驚いて引き返していくのを何度か申し訳なく見送つた後——当然、俺はソープになど行つていない。むしろ、ここまで行かずに貯めこんできたのは、彼女のため——彼女のファンクラブに入会するためだつたのだと思える。

しかし……月額費、結構重いぞ……？　つまり、俺のバイト生活はまだまだ終わらない、ということだ。これからずっと、花子さんのファンを続けていくために。